
キョン子の憂鬱

ヒルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キョン子の憂鬱

【Nコード】

N1104E

【作者名】

ヒルト

【あらすじ】

…皆も知つての通り、オレの日常は涼宮ハルヒを中心に回っている。振り回されてから始まって終始そのままにその1日が終わる。それがオレの日常であり、これからその繰り返しだと思ってた。しかし、しかしだ。確かにオレは振り回されるのには慣れたが流石にコレはやりすぎだろ？なあ…そうは思わんか、ハルヒよ？……………登場キャラ全員が性転換してしまった世界に放り込まれたキョン達っ！果たして元の世界に戻せるのか？この反転した世界に涼宮ハルヒは何を望んでいるのか？とネタ系のファンフィクション

小説です。凍結しました。理由は紹介文やinnocentblue2の前書きに書いてあります。

プロローグ（前書き）

需要に便乗として欲の赴くままに書いてしまいました……他にも書いているにも関わらず（汗）

暖かく見守ってもらえると嬉しいです

m (_ _) m

プロローグ

”平穩”とはどういう意味だったか？ と、たまに思い、それが結局は今のオレには一番縁遠い言葉だと思い出して溜め息をつく。そして今日も今日とて、いつもと変わらない、誰かさんに振り回される1日の始まりを告げる、そんないつもの朝だと思った…そんな朝だったらどんなに良かったことが。

「…む？」

朝、まだまだ寒い朝だけにベッドから這すのに苦労した後のそんな覚醒間もないオレの寝ぼけ頭と感覚がまず感じたのは身体の違和感だった。

「…んん？」

何というか…生まれてからの約15年間も付き合ってきた自分の身体に違和感を感じるなんざ、有り得て欲しくなかったね。だからオレは

「…ふむ」

何やら身体の重心が今まで感じたのとは別のモノのようにふと思っただがとりあえず無視する事にした。そうしてボーっとしていると下から騒々しく慌てたように駆け上がってくる聞き慣れた足音。

「キヨンくんキヨンくんーっ」

朝っぱらから大声張り上げて家の廊下をドタドタと走るな、妹よ…と、思った所でまた違和感を感じた。

…んん？

「アイツ、あんな声だったか？」

いや、断じて違う。

兄バカと言われても仕方ないが、少なくとも妹は年相応に可愛い声だ。その声で”お兄ちゃん”と呼ばれなくなって久しく、寂しい思いをしている。

それはさて置き、

「キヨンくんっ！」

とりあえず部屋の扉が開けて姿を見せた妹を見た瞬間は、ああ…まだオレは夢中だなと思っただね。

自分の身体に違和感なんて感じる筈もないし、妹の雰囲気は何か違うのも夢の所為だと…さ、そろそろ目を覚まそうぜ？ おれ。現実世界はもう朝

「どうしよっつ、わたし…男の子になっちゃってるっ！」

「…はいはい」

夢とはいえ面白い展開ですな。

…？

「…」

…おい。

何でか、オレを凝視したまま押し黙っている妹…いや、何でソコで急に黙るんだ弟になった妹よ？

「……………」

だから、それをやめろ。何で啞然というか首傾げてるんだ？ し
かも、オレの顔を見てっ。

「キョンく」

「っ？ 待って何も言っなっ！」

オレは悪寒感じて瞬時に妹の言葉を遮った…あ？ 何故？ 何故
かだって？ そんなもん知るか。

ただ日頃の経験から何だか危険予測じみた何かを感じたからと言
っておこう…だが、それはだ

「あ、携帯…」

「っ」

沈黙を破るように鳴った着信音を聞いた瞬間、携帯をひつつかん
で相手の名を見た。

相手は”古泉 ……”

夢にしてはやたらとリアルなタイミングで掛かってくる事に徐々
にイヤな感じのモノが膨れ上がってくる。

オレは通話ボタンを押すとはっきりと不機嫌な声色で応対するこ
とにした。

「…朝っぱらから何だ？」

こっちは忙しいんだよ、色々とっ。

『こんな朝早く申し訳ありません』

電話に出るとそこにはいつもの調子の古泉の声だった。
…挨拶はいらん、

「さつさと用を言え」

『…そう、ですね』

…何だ、珍しく煮え切らない反応だな。

『用とは、実は…その、確認………なんですか？』

「だから早……ん？」

ここに来て今更ながら違和感に気付く。

「古泉、何か声がおかしくないか？」

着信相手の名前から古泉と分かっていて対応したのですぐには気付かなかったが、その古泉の声が何処かおかしい。

…まさか遅咲きの声変わりか？

『だったら…良かったのですが』

エラく覇気がないな…いつものムカつく語調は何処に行った？

「ねえー、キヨンくんー」

妹？ がオレの裾を引つ張り始める。

ちよつとでいいから静かにしてくれ、取り込み中だ。

「キヨンくんの髪ー」

「は？ 髪が何……………？」

妹の指摘に自分の頭を無造作に触った瞬間、イマイチ覚めきつて
なかった夢現な頭が一気に晴れたね。

「……………！？ つー！」

「！？ きゃうっ？！」

妹？ にぶつかって尻餅着かせてしまったが今はそれどころじゃ
ねえっ。

『…今、貴方の姿は』

こちらの様子を察したのか、古泉が何か意を決した声が通話口か
ら聞こえてくる。

くそっ、やな汗つてのはどうしてもっと、こっ…流れる場所を選
べないんだろっな？ 気色悪くて仕方がないぞっ。

「っ？！」

『どうなっていますか？』

未だに古泉らしき人間が状況を訊いてきたが既にオレの耳には届いていない。

何故なら、

「な、何だコレ…っ」

洗面所に猛然と向かい、そこに備え付けられた鏡に自分の姿を映した瞬間に自分の姿に釘付けになっちまってたからな。

その鏡に映っているのは…厳密にはオレ自身だ。確かに自分自身なんだが、

「な、んで…？」

徐に再度、自分の髪に触れてみる。

自慢じゃあないが、髪になんか一切も気なんか使ったことはなかった。が、それに反してやけに髪質の良い髪の毛が背中まで流れ、触れている指からサラサラと髪が零れ落ちていく。

「おお、一夜でこんなに？ て、アホかつ。んな訳」

『変化はそれだけじゃありませんよ』

状況を察したのか、古泉？ が先を促すかのように言う。

「…っ、ま、ま…さか？」

もう何っ？か、オレはとりあえず自分の察しの良さを恨んだね。いや、良し悪しなんかは遅い早いの違いだけかもしれん。が、心の準備ってもんがあるだろ？

『とりあえず…私は耳塞いでおきますから。存分にどうぞ』

そんなつまらん気遣いに押され、オレは視線を…隅に置くには惜しい容貌の顔から自分の着てる物へと下げ、バツと前をはだけてそれを目にした瞬間、

「なっ、なあんじゃこりゃああーっ!!??」

叫んだ。ああ、叫んだ、叫びましたよ叫んだともさ。

色々と耐性が出来て？　あまりに突発的な出来事にも慣れて何とか対処してきたオレがだよ？　まるで某刑事モノに出ていた俳優のラストシーンのセリフを大音量で叫んじまう程に。

でもな、流石にこうも突飛も無い変化が起こるなんて誰が思うよ？　現に、

『今回ばかりは……涼宮さんの考えを理解しかねますね』

ハルヒの心理観察が仕事の古泉が匙投げてんだから。オレに至っては、

「な、なに考えてやがんだよ…あのバカ」

が本音だ。

はだけた上着から覗く緩やかで控え目な双丘と本来ならトランクスのハズの下着ではなく、しかも…

「っ？　お、おおっ…」

今更に気付いた、

中にあるはずのブツの喪失感。

もう、いつそのこと倒れ込んでしまつて気絶してしまいたい…そんな衝動があつたが必死に抑えこんだ。

今も古泉が何やら言つてはいるが耳には入らない、戻る最中に妹が何か纏わりついた気がしたが気にも止めずにふらふらと部屋へと向かった。

そして、まだ頭の隅では大丈夫だ、絶対と思つて開けたクローゼットの中身を見た瞬間、最後の希望も砕け散る音を聞いたような気がする。

「…………マジっすか」

何とかショックから復活する事が出来たオレが呟いた第一声はそんなのだった。

だが、現実を直視しなければいけないのだ。そんな目の前のハンガーに架かっているのは男の意識のオレにはもう、信じがたい”ブツ”。

『…信じがたい話ですが、事実です』

古泉…女の声だが口調やら持つて回つた説明は紛れもなく本人だな。が、言うには誰も彼もが性別が反転し、且つ世界全てが元からこの姿が正しいとして人々の記憶や存在何もかもが改竄されてしまっているらしい。

『ごく一部は記憶をそのままにこの姿に変えられたみたいですね。私たちと妹さんがその例です』

と、まあ何やら説明してくれているのは有り難いが途中からそんなもの脳に届いちゃいない。

んな事は後でもいいんだよ。今のオレにとっての最大の問題はクローゼットの中に掛かってるブツなんだよっ。

『まあ、確かにあなたの言い分は尤もです。が、まあ…最初は抵抗があるかもしれませんが思い切って着てしまえば何の事はありませんよ?』

…は?

待て…ていう事は何か? 既にお前はこのブツを着ているというのか、古泉よ!?

『はい』

「…」

『…どうしまし』

「……ぐはっ」

やべ、クソっ想像しちまったじゃねえかつ。

『それは男の頃の僕に着せたからでは? 今の姿ならバツチリですよ』

いや、男の頃って何だ? 女子バージョンなんか思い浮かばんぞ?

『まあそれは向こうで会ってからの楽しみと言つことで』

「お楽しみ、ね…」

…オレはこれで学校に行かにならんのか？

クローゼットの中で異彩なオーラを放つ女子用の制服を凝視する。異彩と表現したのには理由があり、他の衣類も見てみたが女の子らしい服は見つからず、ジーンズ等のパンツルックが主でスカートのようなヒラヒラしたモノは殆ど無いのだ。

「まあ、何だ」

自分で言うのもなんだが女のオレは多分、男つ気皆無で過ごして今に至っているのは明らかであり、それはそれで寂しいとは思いう。が、それこそ彼氏なんか居ると思いきモノなんかを見つけた日にゃあ、朝のモーニングコール代わりに別れを告げていただろう事は日を見るよりも明らかだが。

「彼氏が居たとかの形跡は無いのが救い、か」

『その辺りはこっちも大丈夫でした』

…それは何より。

「互いに運が良かったな」

全くです…と、微笑笑混じりに呟く古泉。それにしても声を聞く分には古泉の奴のそれはかなり上品な声色と言える。

女版古泉…どんな風だ？ と思えるのは気持ちに余裕が現れたからか、古泉がどんな姿なのか変に興味が湧いてきた…いや、まあ。その辺は登校すりゃ分かる、分かるんだよな。分かるんだが、なあ？ 女子用の制服…これを着るには物凄い抵抗がある。

「…なまじ記憶があるから質が悪いよな」

どうせなら記憶ごと改變してくれば良かったものを。

『とは言っても仕方のない事ですし、滅多な事は言わないでください。昨日まではそれが当たり前の事だった訳ですから』

「解ってるさ」

…だから今、困ってるんだろうが。

『…かと言って、他の服装は不味いですよ?』

当たり前だ。

今日から急に違う服装になんかなったら変な目で見られるのは解りきっている。

「…はあゝあ、くそ」

『ふふつ。さて、そろそろ時間も差し迫ってますし後のことは学校で話しましょう』

「…分かった」

『…では、学校で』

笑いをかみ殺したような言い方で古泉は電話を切りやがった。
接続が途切れた携帯を睨みながら、他人の事笑えた義理か? と
内心でツツコミを入れる。

「早々に男の尊厳を棄てたクセに」

と。だが、言ったところで自分もまたほんの数分でその尊厳を不燃ゴミとして出さなきゃならんわけだが、

「…はあ」

そんなこんなで何もかもを観念した溜め息をついた後、雑念を捨てて無心に着替え、当たり前前に朝飯を抜いて玄関に向かった。

反転 ある意味で異世界（前書き）

第2部分です。

いやはや執筆がなかなかに走ります、キョン子（笑

あ、まだこの回ではハルヒと古泉のみで全員揃いませんので悪しからず（礼

反転 ある意味で異世界

本当ならこのまま学校に向かつても良かったのだが、とりあえずは…とオレは玄関先に居た妹に言い聞かせていた。

…いいか？

「お前も元々男の子だったんだ。だから女の子だった時の事は今はとりあえず忘れる」

「何で？」

「いいからっ」

「うーん……分かった」

お兄ちゃん…いや、今はお姉ちゃんだが、その何あーんも分かってないような満面の笑顔で返事されると物凄く不安なんだぞ？
分かってるのかよ。

「行つてきまーす」

「っ？ 待ったっ」

「ほえ？」

歩き始めたのを呼び止めたオレはすぐに傍へと駆け寄ると元妹の頭の横に付いている髪留めの赤いボンボンを外した。

「あぁーっ」

「言ってるそばから、んなの付けてるし…」

オレはブツブツ言いながらスカートのポケットからシンプルなゴム留めを取り出すと頭の上ではなく、新しく首の後ろの方で髪を括ってやる。

「…ったく」

あんないつも通りに頭の上なんかにはボンボン付けて学校に行つた日にや友達や級友から何言われるやら

「…キョンくん、ホントにお姉さんだー」

は…？ お前は何を言つとるんだ？

確かに今は女の身体だが、今でもオレはお前のお兄ちゃんだぞ。

「ん…何かね？ わたし、いつもキョンくんに朝こーゆうのして貰ってるみたいなんだー」

…だから何の話だ？

お分かりのようにオレは別に妹にこーゆうのをした覚えはない。

「そうじゃなくてー…お姉ちゃんのキョンくんがいつもこーゆうのしてくれるの」

この世界のオレがいつもしてる？

「…て、お前記憶があるのかっ？」

「うーん…ん。みたい」

…どうなってる？

妹にはこの世界での記憶が有るというのにオレには無い…妹だけが特別なのか？

考えが纏まらないまま妹の髪をキレイに縛ってやると、とりあえずその場に立ち上がる。

これは妹が特別に覚えてるって事は無いだろう。何か要因が有るわけでもないだろうし…なら、オレにしろみんなにしろ覚えてるって事か？

「んー…」

何とは無しに何かこの世界の事を思い出してみようとするが、男の時の記憶しか浮かんでこない。つか、それが当たり前だ。

だが、他はどうか？ 古泉はごく一部の人間は意識がそのままと言っていた…て事は、だ。

「…SOS団の皆はまず間違い無い、よな」

しかし、かく言うオレにその女として過ごした記憶は今の所無い…追々、思い出してくるのか？

…んんー、

「何か今日学校に行きたくなってきたな」

男の時の記憶があるという矛盾があるが、記憶が無いというのはここまで不安なものだと思いきらされる。

オレだって付き合いのある奴が急にいつもと違った行動を取ったり、それが言動だったりしたら絶対に戸惑う。

だが、それでは何の解決にも成らない。

「…結局、行くしかないんだよな」

そう、結局はこの状況を打開するには部室に赴き、SOS団全員が集まる必要があるのだ。

「はあ…」

「ねえ、もう行つていい？」

溜め息をつくオレに首の後ろに括られたおさげを振りながら元・妹が訊いてくる。

…あ？ ああ、

「行つていいぞ」

「行つてきまーす」

人が悩んでるというのに脳天気な声でさつさと走り出す元妹にオレもあれだけ脳天気だったらどんなにいいだろうかとふと思う。

「…ああもう、やめたやめた。今、オレ一人が考えた所で何も出てくるかつてんだ」

それに今回は皆に記憶がある。

あの時とは違う、長門が必ず打開策を見つけているに決まっている。

…っし、

「行くか」

そうしてオレはもう一度腹を括ると玄関を開けて外に出た。その瞬間、

「ん？ つむお！」

外気の温度差で発生した風ではためくスカートを必死に押さえた。

「ええい、何クソっ」

先程の折角の気合も一陣の風で掻き崩されてしまい、ぐだぐだ感で以て行き慣れた道を歩く。慣れないスカートに四苦八苦し、足がスースーして物凄い歩きづらさと心許なさに辟易しながら学校へと向かった。街並みは変わらない…変わったのは街行く人々の性別。暫くしていつもの急勾配ハイキング坂に差し掛かり、心の隅でこの勾配を改変しろよなと思いつながら登ること数分。

「…っ、何だ？ おい？」

性別が反転したに因る弊害と思われるその一が発生した。

「…っ、いつも、歩いてる…坂道なのに、何で息が切れるっ！？」

学校に至るための長い長い坂をいつものペースで歩いていたら半分も行かない内に息が切れ始め、絶句する。

「…マジ、かつ？」

一応、運動は可もなく不可もなく体力も至って普通だと思っていたんだがな、男の時のオレは。

それが女になってこうも息が持たないのとは…じゃあ、何か？

女になった時のマイナス補正入れたらオレの体力ってこんななのか？

「…男につ、戻ったら…筋トレか何かをやった方がいいかもしれん、な…」

そんな事を誓いながらガードレール伝いに坂を上がっていると

「おっはよーっキョン」

「んがっ!？」

そんな挨拶と共に不意にオレの背中に誰かが抱きついてきやがった。

誰とも判らないが明らかに柔らかい二つのブツを今、オレの背中にしつかと押し付けられている。早い話、今正に弊害その二が発生したのだ。

「な、なっ何だ!？」

「うあっ?!」

オレは即座に暴れて振り解くと慌てて後ろを振り返って相手を見た。

この状況と声を掛けてきたタイミングはアイツしかない…そう一応は頭で理解していたんだが、実物を見せ付けられるとやはり…

「お……おまつ」

「イタタ…」

絶句する。

尻餅を着いた拍子に何かで打ったのか頻りにお尻をさすっている
北高女子。

「もう……キョーンっ」

「グッチ、大丈夫？」

「ぐ……グッチで」

声を掛けてきたのはやはりと言うか馴染みの二人……谷口と国木田、
確かに男の時の名残があった。

男の谷口は髪型をオールバックにしていたのをそのままに髪は後
ろ、長さが肩程に伸びていた。つか、国木田がそのまんまなのが驚
きだっ。本当に男子のブレザーから女子のセーラーを着ているだけ
だ……ここは笑うところか？

「……？」

「キヨン？」

「……国木田と谷口、だよな？」

「？ 当たり前だよ。何言ってるかな、キヨン？」

「そんなことよりいー、アタシの朝のスキンケアを無碍に扱っ
たんでヒードーいーっ」

何だ、キャラと言うか言動はそのまんまなのか？

とりあえず再確認するように本人と照らし合わせていく。尻餅を
着いているのが谷口で手を差し伸べて立たす国木田。

「大丈夫、グッチ？」

「大丈夫じゃなあい…うう、絶対お尻に痣出来てるよお」

「…お？」

今、気付いた。

谷口を助ける国木田だが、全く変わってないと思った国木田の髪型がほんの少し違っていたのだ。

少しだけ後ろ髪が長くなっており、キレイに両端をゴムで括られてお下げになっていた。

「…キヨン、何か今日変だよ？」

「…へっ？」

視線に気付いた国木田がこちらを見て小首を傾いできた。
そ、そうか？

「うん。それに何だか動きが男っぽーい」

谷口？　と思しき女子が半眼で国木田に倣う。
そりゃそうだろ…オレの意識は男なんだから。

「うん。ただでさえ女の子としてのスキルが無いのに拍車が掛かってちゃってる」

「…」

…この世界での日頃のオレは女としては落第点な日々を送ってるのか？

だが、そこで谷口が意外な事を口走った。

「でも、モテんだよね」

何っ、その話はマジかっ？

この世界の自分の事を悪く言うつもりはないがハッキリ言おうっ。自分の部屋にあるクローゼットを見たとき、野郎の気配なんぞ微塵も感じませんでしたよ？

「そ、そう？」

何っーか、まさかこっちでは異性にモテているとはな。

全くモテた試しのないオレはかなり肖りたい気分だったが、谷口の口から出たモノはそんな変な期待を木っ端微塵に吹き飛ばしてくれやがった。

「うん。女子にね」

「…っ」

また絶句だよ。

もし半径１キロ圏内に誰も人が居なかったら叫んでたね、

何故にっ！？

と、声を大にして何の憂いもなく。

「えーと…」

そんなオレを余所に国木田が何やら指折り数え始めている。
…何だ、その本数は？

「今月に入って三人…だったかな？ クラスや学年問わずキヨンが告白されたのって」

嬉しくない記録というのはどうしてこんなにも精神的に来るものがあるのだろうか。しかも、全部が同性…異性からは一切無しと来たか。

言っとくがオレにはそんな趣味はこれっぽっちもないぞ、コノヤロウっ。

「そんなに言うなら料理の一つでもやってみろー」

「うん。普段着も女の子らしいの買わないとね」

…はっはっは、

「断る」

「これだもんねえ」

「あははっ」

断言するオレに対して苦笑いで返す二人…どうやら、不安の種の一つであった日頃の自分というのは別段、変わりないらしい。

知りたくもないモノまで知っちまったが。

とは言え、だ。男の時のオレの行動や性格を女に当て嵌めた時、同性にはウケがいいとはな。

「…あ」

そんな周囲を思い浮かべ、オレはふと呟く。

「男だったら嬉しいな。この状況」

「いや、逆になるんじゃない？ 男になったらなっただでやっぱり同性の男にモテる」

「…」

…はっはっはっ。

谷口よ、そんなマジ顔で薄ら寒いことを言わんでくれまいか。想像しちまうじゃねえか…

出てくんな、古泉っ。

いきなり浮かんだ光景に相手は古泉だった。

これには理由がある。あの野郎、何かっちゃオレに顔を近付けてくるからだ。だが、貞操の危機などこれっぽっちも無かったし、これ以降もそんな危機が来ることはない。

ノーマルな自分に感謝、ノーマルな古泉に感謝だ。

「あ…キョン、早く行こ、余裕無いよ」

「あ…ああ」

「ほらっダッシュダッシュー」

国木田に引つ張られ、谷口に背中を押されてオレは長い長い坂を登っていき、学校を目指した。

…

実際に目の当たりにして接すると性別が逆転してしまった
SOS団の皆との接し方にも弊害が出てくる。
何とというか見た瞬間は信じたくなかったね。

「お、お前…古泉か？」

「ええ。良く分かりましたね」

休み時間の間に古泉を訪ねようとして廊下を歩いていると向こう
もそう思っただけで向かってきていたのか、大体距離的に中間辺りでオレ
達はすれ違い、すれ違った瞬間に互いが同時に気付いたのだ。

「お互いに何となくは面影が残っているモノですね」

「顔はな…」

…本当に顔だけな。

そう呟くのがやっとだ。何故ならオレの視線は古泉が持っている
ブツに釘付けになってしまっているからだ。

「？ どうしまし……あ、これですか。やっぱり気になります？」

そう言いながら古泉のヤツはあろうことが胸の二つのブツを両の

手で持ち上げやがった。

…う、お。

「こ…古泉、頼むから持ち上げんな」

「付けてみて初めて朝比奈さんの苦勞が分かりましたよ。毎日この重さを持つてたら肩の凝りや動きも悪いはずです」

「持つなって」

「アナタぐらいのサイズが羨ましい」

「…」

…喧嘩売ってるのかコイツは？

お前は今、今正にこの場で取っ組み合いをしたいとな？

「よし、受けて立つぞ」

「冗談ですよ。そんな怖い顔しないで下さい」

「だからっ…だったらそれを持ち上げんなって」

オレが強い語調で言ってやっと古泉がブツから手を放した。その瞬間、零れ落ちた二つのブツは重力に翻弄されてブルンブルンと跳ねてやがる。

もし、ニュートンが見たのがリンゴではなく、コレだったらどうなっていただろうか？ と心配するぐらいに跳ねてます。

…何か、

「この扱いの差に腹が立つのは何故だろうな」

オレは古泉から視線を外すと自身の身体を見下ろした。

制服越しに朝に見たお世辞にも大きいとは言えん、かなり控え目だった自分の胸を思い出す。

「そうですか？ 私はこれと言って何も」

「…あ？」

今、さっきは小さい方が羨ましいとか言ってたクセに何、肩をすくめてるんだよコノヤロウ。

もう、男の時は顔とセンスの良さにムカついたが、今はそれプラス胸の違いで更にムカついてくる。

「まあ…人は他人と同じ立場に立つと自分に無いモノを他人に見た時、酷く羨む性質がありますからね」

…弾くぞ、マジで。

「そのメロンの片方を思いつ切り、千切らんばかりに力一杯に」

オレの目がマジだったのを見て古泉は腕を前に出して制止のジェスチャーをして落ち着かせてきた。

「…気に障ったのなら謝ります」

…まあ冗談だが、何だ？

「やけに殊勝だな」

「そうですか？」

古泉はオレが何も行動を起こさないと見ると疲れたような溜め息を吐き始めた。

「…大丈夫か？」

「…正直に言いますと僕も今の状況を持て余し気味です」

言われてから古泉がともに巻き込まれたのが初めてなのだと気付く。

…そうか。

「古泉は」

「ですから…気を紛らわすために少し意地悪を、ね」

「…」

何があつたか知らんがオレを一服の清涼剤にしないでほしい。

…まあ、何だ。

「とりあえず放課後に部室に集まるぞ」

「分かりました」

ふと笑みを浮かべると踵を返して教室へと戻っていく古泉の後ろ姿を何となく見送る。

何があつたのかは知らないが疲れているのは見て取れた。

向こうは向こうで色々大変なのだろう。

「…はあ」

古泉の後ろ姿見えなくなった後でオレも教室に戻ろうと踵を返したその時、視界の隅に遠巻きにオレを見て囁き合っている女子グループの姿が入った。

「うん…？」

それがやけに気になった。

オレはもう一度良く確認しようとした時、女子グループがこちらの気配に気付いたようであるで蜘蛛の子を散らしたかの様に別々の教室へと入っていくのをそのまま成り行きを眺めた。

「はて？」

はつきりではない。が、確かに何やら思いつ切り睨まれていたような錯覚を覚えたんだが…やはり気のせいかな？

オレは一瞬とは言え、うる覚えではあるが先のグループの個々の顔を見ていたので思い出してみる。

「…面識無いな」

全くなかった。

オレ自身、睨まれるような恨みを買った覚えはない…いや、S O S 団の団員として考えると知らない内に色々と買っているのかもしれない。

…くそ。

「この世界での記憶はまだ全然だつてのに」

とりあえずこの世界での日頃のオレがどんな人間だったのか分からない以上、放課後になるまでの間は大人しく過ごさしかない。

「…はああ」

しかし、まだ見ぬ色々な弊害がどう出るか？

いや、それは後回しにしよう。確かにそれも気にはなるが、やはり目に見えていて既に解っている弊害を先にしないとな。が、

「…珍しい、な。休みか？」

気合いを入れてはみたものの当の本人が何でか居ないから、対応も接し方も無かったりする。

要は早い話、

ハルヒがまだ学校に来ていないのだ。

そんな理由でこの世界での大事な初日は未だに全くピークを迎えないまま、昼休みに入り、今のオレは谷口と国木田の三人で昼飯を食っていると言うわけだ。

「涼宮くんなら何か用事が有るとかで学校来るのはお昼からだって」

…用事ねえ。

「そ。このクラスが平穏無事なのはこのお弁当が食べ終わるまでって事」

「…」

オレは購買で買ってきたパンをモソモソと食べながら谷口と国木田の話を聞いていた。

どうやらこの世界のハルヒも面倒を起こしているらしい。しかも、元の世界と同じ事をやっている様なのだが、こっちは男になっている分だけ内容がパワフルのようだ。

男版ハルヒに関してはどうしたもんかな？ と、オレは仏頂面で同じく購買で買ったCa入りコーヒー牛乳のストローをくわえ、ゆっくりと飲む。

「涼宮と言えば…ね、キョン？」
「んー？」

話を振られたのでオレはコーヒー牛乳を飲みながら気のない返事で返した。

そのまま谷口が続けようとするんだが、オレはここで昼飯を食い終わってれば良かったんだが、如何せん思ったよりも自分の口が開かせいで食べるスピードが遅かったんだよなあ。

「実際問題、アンタ達二人…もうチューぐらいしたんでしょ？」

で、分かった事はだ。

この身体は体力は無いが肺活量はスゴイらしい。

「んぶっ！？」

オレは谷口のそんな訳の分からん問い掛けに驚いてミニ紙パックの容器を破裂させたんだからな。

「きゃあっ?!」

「ひあつ?!」

結果、哀れ谷口は弁当にコーヒー牛乳が直撃と制服に飛沫が掛かり、巻き込まれてしまった国木田は袖がコーヒー牛乳塗れになってしまったわけだ。

まあ、破裂したのにはオレも驚いたが、吹き出すような事を聞いてきた谷口が全面的に悪い。

早いサイクルの因果応報だ。

「私は何も言っていないよー」

っと、確かに国木田は何も言っていないな。

「クニには謝る。すまん」

「くらあつアタシにも謝れってのー」

誰がお前に謝るか。

「ああーんもおー」

「はい、クニ。」

「あ、ありがとう」

オレが国木田にハンカチを渡していると谷口はウーツとかムーツとか非難がましく唸りながら自前のハンカチで拭いたりしていたがとりあえず無視した。

そして、

「おいっみんな！ 涼宮が学校来たぞっ！」

「！！！」

そんな声が廊下に響き渡る

オレはそんな熊が出たぞ！ みたいな叫び声を聞いた瞬間、自分の身体がビクツと強張った。

遂にこの世界でのハルヒとご対面するわけだからな、緊張するなと言う方が無理な話である。

「ああゝあ、平和もここまでか。良かったねえ、キョゝンー」

まだ言うか。

「キョン、ハンカチありがとう」

ゝん。

ハンカチを返してもらうと国木田に対しては申し訳ない気持ちで謝っておく。

「すまん、国木田」

「うー、うー」

そんな国木田に対しては優しいオレの対応を見て拗ねる唸るわな谷口だが、今のオレには男の谷口が重なって見えているのでそんな風にしてもこれっぽっちも可愛いと思わん。

流石、谷口クオリティー。

「ふん。じゃあっ、お邪魔なアタシ達は退散するとしますか」

「え、グッチ…私まだ途中」

「二人の世界を邪魔しちゃ悪いでしょっ」

うおい…仕返しのつもりかもしれんが、その誤解しかねん言い方は何だ？

半眼で見ていると谷口は国木田を引っ張って自分達の席に戻りながら、オレに向かってベーっと舌を出してきた。

「…はあ」

オレはそんな谷口から視線を外し、背もたれに身を任せて溜め息を零すのと同時に中途半端に開いていた教室のドアが力強く開かれる。

…！

「っ？」

何と言うか、一気に教室の空気は変わったね。まあ、かく言うオレもドキッとしたがな。

そうして中に入ってきたのは、男の姿だが確かにハルヒであり、顔に面影が残っている、残っているのだが…もしかして男の時のオレより背高くないか？

それに…

「マジか…？」

これもかなりの衝撃だ。

男の時の古泉とはまた違うのだが、男の意識を持ったオレが見て

もかなりカツコイイと感じる。

まあ、ハルヒも静かにしていれば可愛い、目の前に現れたこの事実は当たり前と言えは当たり前なのかもしれん。

そんな男のハルヒはと言うとシンボルマークであるカチューシャだが、リボン付きとかじゃなくてシンプルなもの。高さの都合でギリギリではあるがやはり黄色のカチューシャを確認出来た。

こう色々と確認できた頃には教室もいつの間にもやう雰囲気も普段通りになって

「
…
…っ？」

あ…ハルヒと目が合っちゃった。

向こうは何やらジツとこちらを見た後、そのままスタスタとオレの後ろの席に座ると見慣れた、いつも通りの頬杖を着いた状態をオレの方へと向けてボンヤリと見ている…って、何でオレを見る？

「
…
…」

訪れる沈黙。

この状況はまるでまな板の上の鯉、蛇に睨まれたカエル、鳶に油揚げ…は違つか。とりあえず、オレの心境は捕食者にロックオンされた獲物と言った処か。

「
…
…」

「
…
…っ」

すまん、何でもいいから話しかけてくれないか？
何と言つか予想以上に落ち着か

「髪」

「へっ？」

オレの願いが通じたのかハルヒのヤツが話しかけてきた…て、髪
？ 髪が何だ？

「ポニーテールは…もうしないのか？」

「は？」

ハルヒが後頭部の方を指差す。
ポニー…？ オレがか？

「あ」

そこでオレはハッと気付いたね。まあ、無意識だったので忘れて
いたと言った方が正しかったりする。

「妹に使った髪留めのゴムか」

「は？」

あまりに軽率な呟き。
怪訝な顔をするハルヒを見、しまったと内心で舌打った。

「妹？ キョンって弟が居るんだろ？」

「へ？ あ、あぁっあぁ、そうそう弟ね、弟。弟だった」

あれ、スルーした？ 気付いてない…助かった。

「…じゃあ、やめた訳じゃないんだな」

「へ？ え…ま、まあな」

あせりながら受け答えし、裏でオレはかなり驚いていた。
この世界のオレはオレ自身がポニーテールをしていたのだ。いや
はや、オレの好みがこんな形で反映されているとは。

「ん…」

「う…ん？」

ハルヒから不意に差し出された手にオレは思わず身を引き、その
手の中にあるシンプルなゴムの髪留めがあるのに気付くと微かに見
開いてしまった。

…これってまさか、今ここでポニーテールにしろってのか？

「な、何…今ここで付けろって？」

「そうだよ」

「……………分かった」

表向きには渋々と承諾する。

何故かと言うと、この世界のオレ自身のポニー姿つてのも興味があつたのだ。

一応にはどちらもオレだが、自分であつて自分ではないから新鮮だし、付け終わったら休み時間にでも鏡で見て確かめてみたい。と、そんな欲求があつたからだ。

オレはハルヒの手からゴム留めを摘み取ると自然とそれを口ではみ、その場で髪を結び上げようと

「
…」
「
…」

後ろ手に回した辺りで、ハルヒの視線がずっとオレの一挙手一投足を見逃さんとはかりに向いているのを感じ、動きが急停止させる。

「
…」

ハルヒが見ている…凝視と言っても過言ではない程に。

そう思つた瞬間、何でかは知らんが急に

「
っ」

ハルヒに見られながら、今ここで付けるのは何でか物凄く恥ずかしくなつた。

「悪い」

「…あ？」

思わずオレは教室を出ようと立ち上がるとハルヒが何やら驚いて、無言で返答を要求してくるが今のオレはそれどころではないっ。

「どうした？」

すぐにも教室を出ようと席から離れたオレをハルヒが呼び止めてくる、呼び止めるなつての。

…べ、別に

「何でもない、が？」

「何でもないって…何だよ、それ」

「…いや、その」

…くそ、何か調子が狂うな。

オレが女でハルヒが男だからなのか？ いや、なら逆でもそうは変わらない。調子はいつだって狂うはずだ。

「鏡無いと上手く出来ないから有るところでしてくる」

頭の中は依然として纏まらないのに口を突いて出たのはそんな尤もらしい理由だった。

「…あんま時間ないぞ」

「すぐ戻るし」

オレはそうハルヒに言い残すと素早く教室から脱出した。

今までで一番の弊害…それは、この世界のオレは元の世界の時よりもハルヒが苦手なのかもしれんと言う事。何と言うか、オレの意識に反して身体が変な反応をするのだ。

「何…なんだよ、一体」

女子トイレに逃げ込んだオレ。

思いの外、慌てていたのか、その前に危うく今の姿を忘れて間違
って男子トイレに特攻するところだったりする。

それはさて置くとして、手洗い台に手を着き、設置された鏡を睨
むとそこに面影はあるがまるで他人の自分の顔が鏡越しにオレを睨
み返してきた。

「…そんなに睨むなよ」

睨んでいるのは自身なのだが、思わず呟いてしまった。

オレはそんな気を紛らわすのも兼ねて当初の目的を終えるべく、
自分の髪をポニーテールにする事にした。

「…むー」

なんつーか自分でポニーテールにするってのは不思議なもんだな、
感慨深いと言つかさ。

…ふむ。

「こんな…もんか？」

先に断っておこう。

オレは断じてナルシストではない。

そんな嗜好ではないんだが、鏡に映っているのはオレであってオ
レではないのは事実なのである。

「ふむ…我ながら似合ってるな」

だから鼻屑目とかそんなのではなく、これは飽くまでも素直な感想だ。

もう一度言おう、

オレは断じてナルシストではない。

とりあえず、二回ほど言ってみたんだが納得してくれたかな？

「でさあ」

…っ？

入り口付近から女子の声がしてきたんでオレは咄嗟に個室の中に隠れた。

確かに身体は女に成ったが意識は男。

元の世界の記憶も無く、心身共に女子になったヤツらとこの聖域である女子トイレで一緒に居合わせて平然として居られるほどオレの神経は図太くない。

「何マジなの？ それ」

「みんな噂してるもん」

「ま、あんなナリだし？ そうじゃないかとは思ってたけどさ」

この扉を隔てた向こう側では数人の女子が噂話に花を咲かせている…つか、何だろうね。この状況は？

個室の中で盗み聞き…もとい、女子が去るのを待っているのだが、

もしもオレの今の姿が女じゃなかったら高校生活は終わる。確実に。

「知ってる？ 何か怪しげなバイトしてるって噂」

「あ、それって聞いた事ある。何かさ、若い男女数人もその部屋に入ったとか見た子居るよ？」

「うわ、何…中で何やってんのよ、それー」

ホント、皆さんその部屋で何やってんでしょうね？ つーか、早く出てってくんねーかなあ。

と、便座に座ってぼんやりと待っていたのだが、次に発せられた言葉のせいでそれも言ってられなくなった。

「で、その中にあの古泉さんも居たんでしょ？」

は？ 古泉？

何だか意外な所から古泉の名前を聞いたオレは更に息を潜め、真剣に聞き耳を立てる。

「あとさ、何か羽振りの良さそうな中年オヤジと一緒に歩いてたって」

「えー…いくら羽振り良さそうでも中年オヤジと援交なんてやだなあー」

「お金貰えたら誰でもいいんじゃないの？ 男子骨抜きにしてモテモテだし、もう入れ食いじゃん」

「だからさ、クラスの女子からは無視されてて孤立してるらしいよ

「？」

「わ…それイジメ？」

「あ、あと何か他のクラスの女子にも嫌がらせされてるって聞いた」

とまあ、そんな口くでもない会話を延々としながら女子たちは出て行った訳なんだが、

「…ヤな事聞いたな」

オレはしばらく便座から立ち上がれず、先の休み時間でのやり取りを思い出していた。

あの時の古泉の妙に疲れた表情をしていた理由はそれだったのだ。そして、

「あの時…遠巻きにオレを睨んでた女子達がそうなのか？」

オレと古泉が話していたのを見ていたのは明らかである。

…しかし、

「この世界の古泉は女子のウケは最悪だな」

確かに元の世界では女子に人気があるのは知っているが、男子についてのウケはどうなのかは知らない。

とりあえずイジメだの嫌がらせだの、そう言った噂は耳に入っ
はいなかった。

「…はあ」

オレはため息を一息つくと扉を開けて外に出るとすぐに廊下へと出た。が、その足取りは明らかに重い。

「…これがお前の望んだ世界なのか？ 何がしたいんだ、ハルヒは」

団員である古泉が陰湿なイジメを受けるってのはヤバいだろう？
違うだろう？

「…っ」

オレはポニテをやめてゴムを外し取るとそれをポケットに入れ、
重い足を何とか足早にして教室へと戻った。

戸惑 色々な相違点（前書き）

第3部分ですーっ！

……でも、これってまだ本筋に入らないんですよ…（頬をかきかき

古泉の次は団員の誰が出てくるかは見てのお楽しみと言っことで。

では、どぞー

戸惑 色々な相違点

そんな事があつて最悪の気分で教室に戻ってきたんだが、戻った
ら戻ったでハルヒのヤツは

「鏡…見に行つたんだよな？」

オレの髪型がそのままなのを見た瞬間、やっぱり言うか追及し
てきやがった。

「ん」

オレは素っ気なく言いながら椅子に座ると窓枠に凭れて軽くうな
だれる。

だが、当のハルヒはそんな今のオレの心理状態を訝しむことはな
く、ただただポニテになっているはずの髪型が何故そのままなのか
が気になって気になって仕方がないらしい。

「何でして来ないんだよ」

「混んでて出来なかった」

「じゃあ、ここで」

「上手く出来ないからイヤだ」

「…なら」

「くどい」

「……」

…うん？

「…そうかよ」

…は？ これで、終わりなのか？

もつと食い下がってくると踏んでいたのだが、それに反して早々に引き下がってしまったハルヒに今度はオレが気になり、うなだれたフリのまま何とか視線だけでハルヒを見やろうとした。

「……」

…う、ん？ ちつ、くそ。

意外に自分の髪が邪魔でイマイチ見えん。

一応、過去の経験則からどうなるか予想はしていたんだがそんなオレの予想を裏切るハルヒの沈黙。いや、アレは多分、顔に出てないだけで腹ん中で溜め込んでいるに違いない。

男の姿とは言え、これはハルヒであり、どっち側の存在だろうがハルヒ＝暴風という定義は変わらないのだから。

「……………はあああ」

これ見よがしなハルヒの壮大な溜め息にオレは冷静になって考え、それがあまりに軽率だった事に思わずイヤな汗が流れるのを感じた。

あまりに迂闊。

こんな対応、ハルヒがご機嫌を著しく損なうのは明白である。

確かに古泉の事を考えるのは良いがこんなやり取りの仕方は返って仕事を増やして負担にしているのだ。

オレは顔を上げてハルヒを見やり、

「放課後まで我慢しろ」

遅蒔きながら、とりあえずのフォローを入れてみた。が、

「もういい」

返ってきたのはハルヒの素っ気ない返事。

…ダメか。

「そら、片付けねえと先生来ちまうぞ」

「っ、を？ ん…うん」

…うーん、何か違和感あるな。

髪型への興味が薄れたのか、ハルヒは教科書やら出しながら散らかっているオレの机の上をアゴで示されて慌てて片す。

オレは早いところ、準備を済ませてもう一度後ろを向こうとしたが、間の悪い事に後ろを向くのと担当教師がドアを開くのが同時だった為、それは敢えなく終了してしまう。後ろ髪引かれる思いだが当のハルヒはもう、窓の方を見ていて此方を気にかけそうな素振りはないかった。

「…であるからして、これは」

オレの中で”空気が読めない”のレッテルを貼られた教師が教鞭を揮う中、オレの意識が黒板に向かうことは一切無く、背後の気配

を探るのに終始。

だが、オレの機嫌感知器は機嫌不機嫌が表示されずに”??”が浮かぶばかりだった。

「えと、さ」

そして授業が終わり、6限が始まるまでの休み時間に再度後ろを振り返って先ずはの会話のキャッチボールを始めようとするも、

「……」

「……」

それは向こうが会話を成立させる為にミットを構えていてくれなければ意味がなく、これではまるで相手も居ないのにボールを投げているバカでしかない。

まあ、何だ。とりあえず、ハルヒはずっと窓を見ていて話し掛けてもオレを見ないし、無反応…これは放課後になっても続き…

「今日は俺、当番だから先行っててくれ」

背を向けたままでそう告げられた。

オレには見える。こっちが投げたボールの一つを拾いはしたが、どうでもいいとばかりに背中向きにこちらにポイツと捨てるような感じのが。

せめてこっちを向いて投げてくれないか？ と思ったが、拾わん訳にはいかんだろ！

「お…おっ」

しかし、何かヤツバいなあ。

今更ながら男版ハルヒの沸点の位置がこつち側の記憶が無いオレには正しく不透明である事に気付き、昼休みのはあまりにも不用意に應對し過ぎたと焦りが出始める。

「じ、じゃあ、先に部室行ってるから」

だが、もう後の祭りだ。

オレは引きつっているであろう笑みを浮かべ、ハルヒの背中にそう告げると教室を後にし、廊下に出た。

何かもう、久しぶりの危機感から人目も気にせずに全速力で古泉がいる9組にダッシュしていた…今なら陸上部の人間を軒並み牛蒡抜き出来るぐらいの速さで。

本当なら某ヘタレ眼鏡主人公が未来型ロボットを呼ぶが如く声に出して古泉を呼びたかったが、ハルヒに聴かれるわけにはいかない。で声には出さず、心の中で、だ。

「あ」

そんな思いが通じたのか、向こうから歩いてくる我らが副団長。予定よりも早くに古泉と合流した事で気が焦り、

「おや、どうしまし…」

直ぐ様、古泉の手をキュッと握り締めていた。

いつもはム力つくエコなスマイルが慈愛に満ちた菩薩の類のような笑みに見えたので内心、完全に末期だなあとか思わなくもなかったが、とりあえずは古泉がこっちに向かってきていたので早く合流出来たのは有り難い。

「え？ あ、あの…ちよつ」

…話は後つ。来い！

オレは古泉の手を強引に引くと手身近な女子トイレに引き込み、
妙に顔が紅潮した古泉に

…何を顔紅くしてんだ？ まあいつか。

とりあえず事のあらましを説明していく。そして説明し終えた後、
紅みが引いた古泉が携帯で”機関”に確認をとってくれた。

「解りました」

…どうだった？

「…安心して下さい。閉鎖空間が発生したという連絡はありません」

「そ…それホントか？」

肩で息をするオレに古泉は携帯を閉じつつ、いつもの笑みを浮か
べている。

「僕がまだここに居るのが何よりの証拠です」

「そ…そか」

…あ、焦ったあつ。

オレはため息をつく為に大きく息を吸おうとするが、此処がトイ
レの中だという事を思い出して顔を思いつきり顰める。

「……」

「？」

と、古泉が何やらオレの事をジッと見つめている事に気付いた。
…どした？

「オレの顔に何か付いてるか？」

「いえ……まあ、少し思うところがあっただけです」

「思うところ？」

…あ。

古泉の言う、思うところという言葉にオレは訊かなければいけない事を思い出した。

「どうかしましたか？」

「お前、今日一日大丈夫だったか？」

「……大丈夫、だったかとは何でしょう？」

…ああくそ、やっぱりか。

平静を装っているように見えてその実、かなり参っているのを隠そうとしたのをオレの目が逃さなかった。伊達に毎日長門を気に掛ける訳じゃあない…オレの観察眼を甘く見たなつ。

そしてオレは昼休みでのトイレで聞いた会話をそのまま聴かせる…古泉の表情が曇るには全部の内容も要らなかった。

…やっぱり、

「そう、なのか？」

「…」

本来、こんな事を受けている本人に訊かない方がよかったかもしれない…そう頭の中で過ぎり掛けた時、古泉は口を開いた。

「…ええ。お察しの通り、この世界での僕は女子に煙たがられていきますよ……その話は事実です」

その表情はどうにも一介の高校生が出せるモノではなかった。

古泉が言うには女子が持つ特有の同性に關しての情報網で、その出所も断片的ではあるが自身の《機関》での活動を目撃されてのモノだという。

「って、直に見られたとかはないんだろ？」

初めて閉鎖空間に入った時の事を思い出す。

あの雑踏の中で忽然と消えたオレ達を知覚していた周りの人間はどれたけ居ただろう？ 現に、少年二人が忽然と消えたそういつた騒ぎは起きていない。なら、大多数はただ普通に見失ったとかそう思うだろ？

何故そこまで？ とオレが訝しんでいると古泉が苦笑いを浮かべ始める。

「アレの発生場所は完全にランダムです。大きいモノも在れ、中にはビルに収まる極小、その中に入った乃至個室に入ったりと言った風にこちらは場所を選ばませんから」

肩を竦めて見慣れてしまっているポーズ。だが、古泉の語りは止まらなかった。

「僕と同じ能力を持った人間は性別も年齢もバラバラで不特定多数の男女達。数時間中に入ったきりで一向に出て来なければ、人は一体何をしているか？ 何なのか？ と気になる。その情報を集めようと見たことを告げ、告げられて、そんな事を知らなかった人間が他に聴けばその連鎖は更に外へ広がり、結果それは噂になります。そして噂というものは証拠なんか無くても良い…後は尾鰭が付いて一人歩きする。それを心無い者が耳にして悪用すれば、それは格好のエサになり該当者は…」

イジメの対象になる。

「…」

「僕は真実を言えない。イジメる側は何かあると確信し、それを笠に増長していく…イジメへと至るプロセスとはそういうものです」

まるで他人事のように締め括った。

…何だよ、それ。

「甘んじて受けてんのかよ？」

「…」

「古泉…その該当者ってお前なんだぞ」

「…女性に手を上げるわけにもいきませんから」

らしいちゃらしい、が。

…だったら、

「せめて、いつものムカつく笑みで何かこう、もっと余裕見せて言えよ…っ」

「…」

その言葉に古泉は何も言わず、オレに背を向けたかと思うと少し俯いた。

「何でお前だけ、扱いがこんな…なあっ？」

その背中に掛ける言葉が見つからない。

オレはそんな事情も知らず、身体的な特徴なんかで一喜一憂して浮かれていた。

気付きもしなかった自分が嫌にな

「それよりも…」

…それよりもって、

「他に何かあるんだ?!」

待て、何か語気が変わったような気がしてオレは顔を上げて古泉の背中を見やる。

「今回は大事に至らなかったので良いとして、貴方の涼宮さんに対する先の対応は軽率過ぎましたね」

…は？

「…状況変化に慣れていた貴方らしくない」

「あ、あれは……」

仕方ないだろ？ お前の話を聞いてそれどころじゃなかったんだから。

「何においても最優先されるのは涼宮さんです。元の世界に戻すにしろ、世界が滅びては元も子もないんですよ？」

「確かに、そうだが…」

尤もだ…確かに。けど、だからって

「この際、僕が置かれているこの現状は全く無視しても構いません」

「…なっ？」

「気になると仰るなら…」

「おい」

「…っ？」

待てっ。今、ああつくそ！ 言っに事欠いて今のは何か頭に来たぞっ。

そんな言い種にオレは気付けば、古泉の肩を持って無理矢理真っ正面に振り向かせていた。

「んな事出来つかよ！」

「っ?!」

「確かに世界が滅びちまったら元も子もないが、お前が置かれてる状況を無視するってのは違うだろっ？」

「…」

「いいか、古泉。もし何かあったらオレに言えっ…っか、言う前にやられてるの見たら助ける…違うな、とにかく確定だ。確かにオレは頼りないかも知れないけど味方がいないよりはマシだろ？」

「…それでは…迷惑が」

…それがどうした。

そんなの言ったところで迷惑かどうかの基準を決めるのは結局はオレだ。

「知っちまったオレが自分の意思で首突っ込むんだよ。んな事は気にすんな…それに」

きちんと断りたいんなら、ちゃんとこっちの目を見て断りやがれ…伏し目で視線を逸らすなっつての。

オレは古泉を安心させるようにニッと笑って掴んでいた肩を解放し、代わりに手をグッと握ってやる。

「ほらっ、行くぞ」

「っ?」

古泉の手を握り、多少強引に引つ張りながらトイレから出ると真っ直ぐにSOS団の部室へと向かう。

女子トイレの入り口で誰かに肩がぶつかったような気がするが敢えて無視。周囲の目：主に女子からの視線が背中とかに鋭利な感じで突き刺さって来るが関係ない。

「あのっ」

「気にすんなっ」

古泉は何かを言おうとしたがオレがピシヤリと遮る。
しばらく無言で廊下を駆けていると、

「…？」

代わりに引つ張っているオレの手をちゃんと握り返してくるのが分かった。

何と言いましようか…内心、頼られていると思うと知らずに握る手に力が入ってしまう。

そのまま手を繋いでいたが、部室へと向かう階段に差し掛かる頃には気を取り直した古泉のヤツは既にオレと肩を並べて歩いており、繋いで引つ張っていた手も向かう途中で自然と離れている。

「…何だか嬉しそうですね」

…そうか？

「おや、違いましたか？」

「うーん…」

…いや、違わないか。

思えば何かって言えば古泉にも世話になりっぱなしだった。

これで少しでも恩が返せると思ったも事実であり、現に握り返してきたのを感じた時なんかは、な。

それが顔に出てたかもしれない。

「むー…？」

オレがどう言おうか迷っていると古泉の方から視線を感じたので振り向く。

振り向いたのだがそこには妙な現象が起きていた。

…んん？

「どうかしましたか？」

「いや…」

視線を感じたにも関わらず、見やってみたら古泉は前向いてを方向の先を見ていたのだ。結果、これはオレが古泉を見ていたという事になり視線に気付いた古泉がオレに訊いてくるという形になっていた…気のせい、なのか？

「変…ですか、今の僕の姿は？」

「は？」

変ですかって、お前なあ？

思案顔をしていたオレに何やら訳の分からない事を訊いてきた。

古泉の姿は変などではなく、ハッキリ言わせて貰えばイヤミにしか聞こえん…つか、むしろ驚きだ。

面影を残した上での美形…背は今のオレより少し高いぐらいか？
髪はセミロングで胸に至ってはかの朝比奈さん級ときてる。正直、
溜め息モノだ。

「お前は良いな…綺麗だし」
「っえ」

…オレを試してみる。
多少の補正が入っちゃいるが元が並だからこんなだし、髪は…ま
あ長くて綺麗でポニテ出来るから良いとして

「こっちの胸ときたら…」

…泣けてくるぜ。

「綺麗…そ、そうですか？ あなたから見ても」

妙に上擦った声で尚も訊き返す古泉にオレは天井を見上げながら
素直な感想を言っただけ。

「ああ…もしオレが今、男で？ 何も知らないで普通に、こんな風
に二人きりで歩けたら光栄だよ」

「…」

この時、オレが古泉の方を見ながら感想を述べていれば顔を赤ら
めながら俯いてしまう美少女というのを見れたんだが…とは言っ
ても中身は古泉だし。

ま、いっか。

「さて…」

そんな徐々に遅れだした古泉に気付かず、オレは階段を登りきって廊下に出てみる。

目的地はすぐ其処、目と鼻の先に我がSOS団の部屋である文芸部があるわけだが、

「朝比奈さんに長門…どんな風だろうな」

ふと呟く。

足を止めているオレに何故か少し遅れてきた古泉が追い付き、オレのその呟きを拾ったのか訊いてきた。

「涼宮さんはどうでした？」

「ハルヒか？ そうだな…」

顔は男前、背はそだな…男版のお前より少し高いか。髪とかはそのまま小物がシンプルな普通の黄色のカチューシャに変わったぐらいか。

「ある程度は心の準備が必要…ですか？」

やけに神妙な声色で訊いてくるな？

普段は面に出さないクセに三人の容姿は古泉なりに思っ所があるって事か。

…いや、

「いくら何でもそこまでは行かんだろ？」

あの二人の事だし…。

朝比奈さんにしろ長門にしろ確実に前の世界とあまり変わっていないとオレは思う。

「…では、賭けをしましょうか？」

何処らへんで、では…とかが入る余地があんだよ。

…いや、待て古泉。

「お前はデカくなった長門や朝比奈さんをみたいのか？」

「見たいわけではありませんが…部室で行うゲームも少々マンネリ気味ですからね。ここは一つ」

人差し指を立てながらいつもの0円スマイルを浮かべる古泉…立ち直ったようでは何よりだ。

…分かった。

「あー…俺からでもいいか？」

「ええ。お先にどうぞ」

…ふむ。

オレは腕を組むと瞳を閉じて思索する、と言っても形だけだ。デツ力くなった二人なんて想像でも見たかあない。

「長門は何だ、良い意味であのまんまだろ」

「…では朝比奈さんは？」

「朝比奈さん……は、んー」

「どうしました？」

朝比奈さんの所で詰まるオレに古泉が先を促す。

…急かすなっ。

「シヨ……小学生？」

「良いところ突いてきましたね」

すみません、朝比奈さん。普段の貴女からイケメンを想像するのはあまりに無理があります…ん？ 何やら違う事を口走りかけた？ 気のせいだ無視してくれ。

「僕は……そうですね。とりあえず差を明確化するためにその逆で行きましょうか」

「逆……」

…じゃあ、何か？

ゴツい長門とゴツい朝比奈さん…うわぁ。

ゴツい筋肉質な二人を律儀に想像したオレは寒気に身震いする。だから考えなくなかったのに…実際にそうだったらオレは絶望するっ。

「ふふっ……」

言った当人はいつもの爽やかな笑みを浮かべて何処吹く風といった感じだ。

こいつ。オレの反応見て楽しみやがって。
…ホント趣味の悪い。

「心外です。そこは現実を見ていってほしいですね、涼宮さんに起きた傾向から考えれば容易に答えは出てきます」

「あつそ…」

んじゃま、どちらの答えが正しいか見に行きますか。
オレ達は以降、途中変更は無しと互いに取り決めると連れ立って歩き始めた。

「負けた方の罰ゲームはどうします？」

「罰ゲーム…なあ」

…残り約20m

「勝った方の言う事を一つ聞くと言うのはどうです？」

「物理的・精神的か金銭的・即物的か…まあ要求にも依る」

…残り約10m

「僕の場合は…ちょっとした、小さなお願いでいいんですけどね」

…ん？

何か含むモノを感じてオレは古泉を横目に見るが表情に変化は無く、ただ前を見ている。
…まあ直ぐに判るか。

「あと残り約5メー」

「っ、誰か出てきます」

…マジかつ？

前を見ていた古泉の言葉にオレは前を見据えて部室のドアが開くのを確認すると、

「誰だ？」

我が部室から出てきたのは…

「ふう…」

髪をツインテールにした女子生徒だった。

「…」

「…」

「うん？　っ！？」

何やらこちらを見てビクツとたじろぐツインテールの女子生徒。

そりゃ、予想外な外見の人間が出て来るとは思ってたワケだし、こっちも啞然とするわな。

「これは…予想外ですね」

つか、高速スライダーも真っ青な変化球も良いトコだ。つか、ホント誰？

「何の話よっ！」

その女子は部室のドアを締め切ると何やら顔を赤らめて悪態をつきつつ、そそくさと隣の部室のドアを開け放ち…って、

「アンタまさか…コンピ研」

「ったく、仮にもアタシの方が上級生なんだから敬語くらい使って欲しいわね」

と、ぶつくさと呟きながら早々に中へと消えていく…あれは、あれか？

「…コンピ研の部長さんか」

「みたい…ですね」

オレの呟きに肩を竦めて答える古泉。

確かに改めて顔を思い出してみる。髪を長くし、ツインテールにして部長さん（男）と並べ見て、やっと合点が行く。

「…なるほどなあ」

「はい。特に変化球でもありませんね」

ま、この際あのタイミングで出て来た部長さんが悪いと言っことで。

「気を取り直して…開けましょうか」

ドアの前に二人して陣取るとオレがドアノブを握り、古泉がドア

を数回ノックする。

まあ、何だ。頼むぞ長門。

「開いてる」

中から聞こえてくる抑揚のない短い声。

「っ」

ガバツとオレがドアノブを回してドアを開ききるとすぐ様、長門がいつも座っている定位置に居ることを確認し、特徴を見ていく。

「ボブのショートカット、白い肌にポーカークーフェイス、機械のように動く指………」

オレは思わず特徴を確認していく点呼を止めっちまったね。

ん？ 何故かって？ いや、それは無いだろ、長門……って思ったからさ。

「男の時の僕たちよりも高い身長……ですね」

何故に古泉がそう確信的に呟いたかと言うと、長門は立ち上がった本棚から次に読む本を取りだそうとしていたのだ。

その立ち上がった佇まいと本棚の高さと頭の位置の目測から身長が算出されたのだ。それは少なくとも、オレの頭の位置がソコに来たことはないね。

「なに？」

驚いているオレ達が気になったのか長門がこちらをジッと見つめ

ている。

…輪郭は多少違うがやはり長門だ。

「これは僕の勝ちですね」

「っぐ」

…朝比奈さんは何処だっ？

中を見回すが他には誰も居ない。

「まだ来てない」

「…そっか」

そして長門はいつもの様にパイプ椅子に座ると持ってきた本を静かに読み始める。

小さく聞こえてくる一枚また一枚とページを捲っていく音は本当に性別が逆転したこと以外は変わってないと実感できる。

「…」

「…」

妙な置いてけぼりを食ったオレ達二人は互いに顔を見合わせるとその音に導かれるようにいつもの席へと移動し、カバンを置くとパイプ椅子に座り込む。

何と言うか、しばらくの間はページを捲る音をBGMにボーっとしてた。

「…長門」

「？」

オレが名前を呼ぶと長門が顔を上げてこちらを見る。
とりあえず結論から聞くことにする。

「戻せるのか？」

長門はしばらくオレを見た後、コクンと小さく頷いた。が、

「でも、今すぐには無理」

そんなに甘くはなかった。

「つ、今すぐは無理って」

「何故です？」

「わたしの中にある混ざり合った二つの記憶と異なった身体が原因」

「身体と」

記憶、この世界の記憶の事。

…長門もこの世界の記憶があるのか？

「ある。でも、完全に混ざり合った為、二つに分けて整理をするのには時間が掛かる。原因を探るにはそれから」

「記憶の整理にどれくらい要しますか？」

「正確な所要時間は分からない。少なくとも48〜72時間は必要と思われる」

古泉の問いに答えた後、再度オレを見やった。

…それが終わってから原因を探さないと無理なのか。

「身体も原因と言いましたが…一体」

「わたしのシステムは飽くまでも長門有希という身体を使役するためのモノ。この世界の長門有希とは多少異なる為、慣れるのに少し時間が掛かっている」

…そうなのか。ん？

ふと名前の所で微妙な発音の違いがあるのに気付く。

「？ ゆき… ゆうき？」

…その有希^{ゆうき}って名が男の長門の名前か？

「そう。この世界でのわたしの名はナガト ユウキ」

「ちなみに僕は読みは同じですがーに姫でイツキになっています」

姫ってか？ オレだけ呼び名変わってないなあ。

「あー、いえ…そう言う訳では」

「…ヨン子」

「は？」

…今、何て言った？ 長門よ。

聞き逃してしまったオレは長門の目をジッと見つめる。

そして、長門の口から出た言葉は、

「キョン子」

だった。

…は？

「キョン子とあなたは呼ばれている」

不幸にもオレの耳は正常だった。

ああそうさ、聞こえてたとも。それでも、何度も聞き返したのは偏に聞き間違いだと思いたかったんだ。だが、結局の所は再度聞き直しても意味はなく、ああ…オレの耳はやっぱり正常だった聞き間違いなんかではなかったんだと再確認が取れただけ…すまん、泣いていいか？

「待つて下さい。フォローを入れますと基本的にその呼び名ですが、親しい者には向こうと同じ、貴方の事を”キョン”と」

「…もついい」

そんな古泉のフォローになっっているのか分からないフォローをオレは遮る。

「はあ…」

この世界でもオレはこのあだ名の呪縛から逃れられんらしい。オレは妙に悟ったような達観した表情で遠い目を見ると深い深い溜め息をつく…あ、何でか知らんが下向いてたら視界が揺らいできたぞ。

「…大丈夫ですか？」

…ああ。

「いつまでもんな事気にする程繊細じゃねーし」

「…そう、ですか」

なんて、裏腹に端から見ても平気とは思えない渴いた笑いを発しているオレに古泉は微苦笑している。

気を取り直すために長門を見やると他のメンツがどうなのかを聞くことにした。

ま、単純な好奇心だ。

「他のも分かるか？」

「解る。まず、この世界での涼宮ハルヒは涼宮ハルヒコとなっている」

…へえ、案外…安直だな？

「て、それはオレもか」

長門の説明は続く。

「朝比奈みくるは朝比奈みつる、喜緑江美里は喜緑エミリオ…」

…朝比奈さんは良いとして、エミリオって。

「あの人はハーフか何かになったのか？」

訝しむオレに長門が小さく頭を振る。

「詳しくは不明。ただそうなっている」

「……まあ、主要メンツはそんな感じな訳か」

「そう」

何度目かの長門のコクンとする小さい動作の頷き。
それを見ていたオレなんだが…

「…？」

何か変な感じだな？

違和感…というか。オレは今意識は男だしノンケだ。特殊な趣味はない。

だが、無性に今の長門の頭を撫でたくなっている。

「…どうしました？」

「な、何がだっ？」

いきなり話しかけるな古泉っ。

ヒドくビクついたオレに古泉は怪訝な顔をしている。

「いえ…何をそんなに堪えているのかと思ひまして」

「は、は？」

何か顔にでも出てたらしい。

だが、目に覚えがないオレは慌てて自分の顔をペタペタと触ってみるが、鏡がなくては自分で分かるはずもない。

「…大丈夫ですか？」

…オレが知るかつ。

「つか、オレにも分からん！」

オレの焦りを含んだ言葉に古泉は益々怪訝な顔をしている。が、今は本当にそれどころじゃないつ。

「な、長門っ？」

「なに？」

「今もそうだが…意識に反して身体っか、な？ とりあえず変なんだ。理由分かるか！？」

「それは…恐らく」

流石は長門だ。答えを持っているらしい…でっ？

「どうなってんだ？」

「…この世界のあなたが原因」

「それは……この身体がか？」

言ってオレは自分の身体を見下ろす。

カーディガンの下には女子の制服、この世界ではオレは女として過ごしていた…それが原因なのか。

「そう。記憶との接合性が無い為、ある意味混乱していると思われる」

「じゃあ、ここ最近の記憶が有れば」

「身体をコントロール出来ると推測する」

…上手く自制出来るって事か。

「しかし、長門はともかく…見た感じでは妹には有って、オレ達には記憶がないって何でだ？」

「それには語弊がある」

は？ 何でだ？

「部分的にはあるが古泉一樹には古泉一姫の記憶がある」

「…」

古泉のヤツが何やら無言なのが気になるが後回しだ。

…じゃあ、

「朝比奈さんや鶴屋さんもか」

「そう。そして喜緑江美里もわたしと同じ事態に陥っているものと

推測される」

「なら…」

何でオレだけはこの世界での記憶を一部でも持ち合わせていないんだ？

もう今日で何度目かの不公平を感じ、オレはいつその事ガシッと腕を組んで固定すると首を傾いだ。

「理由は分からない。だが、涼宮ハルヒが原因かあなた自身が原因かのどちらかなのは確実」

「オレにも原因が、か。それは…」

選択肢になかった…参ったとしか言いようがない。
つと、嘆いてる前に今のこの衝動を抑える策が記憶の復活ならさつさと思ひ出さないとな。

…長門、

「頼めるか？」

「待つて…」

長門は言つと暫し目を閉じた後、

「…可能になった」

呟いて目を開いた…って、今出来るようになったのかよっ？

「以降の作業で並行作業中の記憶の整理終了までの期間が2〜30

分の超過誤差が出る…どっちがいい？」

ど…どっちがいいって、何だ？

色々と焦りながら見つめるオレに、

「ちょっとしたジョーク」

長門が笑みを向けた…と、オレには見えだが正直自信がない。

「まあ、何だ…？」

ガシガシと頭を掻くと気を取り直して再度、長門を見る。

「ここ最近のいい…一つ頼む」

「分かった」

言って長門は立ち上がると、ゆっくりとした動作でオレの傍にまで来るとその場で片膝を着き、ソツと見上げてくる。
いかんっまた衝動が来た！

「落ち着いて？」

「っ、お、おう」

長門が腕をゆっくりと上げると指…人差し指をオレの額に軽く触れさせた。

そして、

「…」

長門の口から例の意味不明な言葉が紡がれた瞬間、頭の中でこの世界で女のオレが経験した出来事が次々と湧き上がるように浮かび上がり、オレが入学してから今この日に至るまでの一部分を思い出した。

追憶　夕暮れの教室（前書き）

第4部分です！。

とりあえず何も考えずにただ走るのみですよ（ぐっ

では、どぞー

追憶 夕暮れの教室

とりあえずは、だ。今、この世界での女のオレが経験した出来事を思い出しているんだが、照らし合わせて見ると何か微妙に異なるんだよな。

例えば、確かにハルヒのヤツがSOS団を立ち上げたキツカケを作ったのはオレであり、SOS団の中であいつがバカな計画を立て、それに付き合わされるオレ達はひたすらに振り回されるという位置関係は全く変わらない…変わらないんだが、

「じゃあ、お前の目の前に証拠を持ってきて見せてやるよ！」

「ま、見つかるわけないけど。せいぜいあたしがビックリするような頑張って見つけてきてねー」

「つく、絶対、ぎゃふんって言わせてやるからなっ」

ふむ。この世界の女のオレは一人称が”あたし”か？ 何と云うか、つくづく…っと、話が逸れたな。まあ、何と云うかSOS団の存在意義がこの世界では違っている…いや、基本的には同じか。

宇宙人や未来人、超能力者や超常現象を信じているハルヒもといハルヒコ、対して全くもって信じていなかった女のオレだ。

見つけた証拠を突き付けてギャフンと言わせる為にSOS団を立ち上げたと言っても過言ではないようなのだ。となると、だ。皆のお察しの通り、女のオレは早々に都合三回ギャフンと言わされる事に相成ったわけだ。

「涼宮ハルヒと私は普通の人間ではない」

「この銀河を統括する情報統合思念体によって造られた対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェース。それが私」

「…ギャフン」

「大丈夫？」

「あ、いや…ごめん。こつちの話…はははっ」

「そう」

うわあ、誤魔化してる時の顔がかなり引き吊ってるなあ、この世界のあの時のオレは。まあ、いきなり

私は宇宙人です…だもんな。

つか、一人暮らしの男の家にホイホイ上がるなよな、女のオレ？
いくら長門とは言え、知り合ったばかりで何の疑いもなく付いて
行ってくてどうよ？ 危機感というものがないのか？ 物怖じしない
と言つか…っと、また逸れたな。すまん。

まあ何だ？ あの通り、全く信用はしてなかったんだあの時のオ
レと同様に。でも、

「僕はこの時代の人間ではありません。もっと、未来からきました」
「いつ、どの時間平面からここに来たのかは言えません。言いたく
ても言えないんです。過去人に未来のことを伝えるのは嚴重に制限
されていて、航時機に乗る前に精神操作を受けて強制暗示にかから
なくてはなりませんから。だから必要以上のことを言おうとすると
自動プロテクトが掛かります。そのつもりで聞いて下さい」

「…」

「いいですか？」

「……」

「？ あ、あの…」

「ギャフン」

「え？ えええつ、あ…あの大丈夫ですかっ!？」

おお…っ、この姿が男子版の朝比奈さんか？

オレの予想通り、見た目はまるつきり中学…いや、小学生だ。ふむ、これで古泉との賭けは引き分けか。で、だ。これで都合二回目のギャフンを言われた訳である。

一回目の長門の時は冗談かと思ってたんだが、流石に続けざまにこんな説明を受けた後だと半信半疑までにはなってたな。

何度か女のオレは二人はグルでは？ とも思ってたみたいだが、朝比奈さんの長門への苦手意識は見てたわけで、ここでも健在だったから自然と信憑性の方もそうになっていた。そして最後に、

「実はね、」

「まさか、わたしは超能力者です…とか言わないよね？」

「ああー…先に言わないで欲しいなあ」

「…」

「？」

「はあゝ…」

「あ、溜め息なんかヒドーい」

「ギャフン」

「？ 何それ？」

な、何だ？ 何か、この世界の古泉は思ってたのとエラい違うな。
あ…だから、か。

と、すまん。まあ、ここで古泉から説明を受けたんだが、この世界では納得しなかった女のオレを古泉は引っ張ってってその日の内に証拠まで見せたんだよ。

閉鎖空間と自分の能力を。

「うわっ何、これ？ さっきまであんな…人混みの中だったのに」

「次元断層の隙間、世界と隔絶された場所。わたしたちは閉鎖空間
って呼んでるんだけどね」

「…へいさ…くうかん」

「あ、後ろ触ってみて。面白いわよ？」

「？ つ…うわ！？ 何っ？ 何か気持ち悪い感触っ」

「ふふっ…ほらっ、こっちこっち」

「あ、えっ？ ちよっ?!」

女版古泉に手を引かれたこの後、神人と超能力者達による戦いを

目撃し、閉鎖空間が無くなる瞬間も目の当たりにした女のオレはこれまたギャフンって言っちゃったんだよな。

あ、4回ギャフンって言ってるなオレ。ま、そんな事があって正直、気疲れやら何やらで頭が全っ然回らなかったんだろうな。そうじゃなかったら、翌日のげた箱の中に入ってた例の切れ端に書かれたのも何の警戒感無しに行かんذار？

…それにしても。この過程は、なあ。

…

あたしの視線の先に目的地の標示が見えてくる。

「み、見えてきた…」

目的地である、5組の教室。

近付くにつれて足音を忍ばせていくと、あたしは手前のドアで一旦立ち止まると静かに深呼吸をする。

「一体、誰だろ？」

字体から男子という事は分かっている。5組を指定している時点で自分の級友の可能性が高いけど…まさか、

涼宮？

いや、無いか。

あとは朝比奈さんや長門くん…は、前回会ったからその線も無しだよ。

とりあえず、覗いてみる。誰も居なかったら来なかった事にして帰る…ドッキリだった場合、長居は無用っ。

「んっ」

グツと意を決すると、あたしは音が立たないように注意しながらソツと引き戸を数センチだけ開け、中を覗き込んでザッと適当に見回していき、

「…はあ…」

誰も居ないと見て溜め息を吐いて閉じようとした時、視界の隅にそれを捉えた。

「…え？」

いや、見落としていた。

居ないと決めつけていたあたしは無意識に教壇の方にあつた人影を失念していたのだ。そして、見つけた。

「…嘘」

…何で？

慌てて誰かかを確認したあたしは自分の目を疑った。

あの切れ端を入れた本人がこの教室に居たのだ。無人の教室にただ一人佇んでいた男子生徒…委員長の朝倉 涼、その人が。

「……朝倉、くん？」

…え。何、まさかマジでドッキリとか？

あたしはキツと睨んで左右を確認してみる。が、廊下にはプラカードを担いだクニこと国木田やカメラを持ってニヤニヤしてる…最近、グッチと向こうから提示された愛称で呼ばないとすぐ拗ねる谷口は居ないし、他組の教室の中にも人が居る気配は全くない。

状況を即座に理解した瞬間、顔がボツと音を立てて紅潮していくのが判る。

…ヤバい。心臓バクバク言ってる。

慣れない状況に焦りが出てくる。

あまり自分を悪く言いたくはないけど、何故ならここだけの話、

あたしは男子にモテた事がなく告白とか未経験であり、何もかもが未だなのです。

でも、

何で、あたしっ？

胸ないし目つき良くないし、がさつだし、男っぽい口調だし料理も出来ない…あ、何だろ、自分で言ってる泣きたくなってきた。

そして、物事にあんまり動じないからクールとかって言われては同性から好かれたりするけど、あたしにそんな趣味ないってのっ。

それにしても、

初告られで、しかも夕焼けに染まった教室で二人きり。

というシチュ。

え、これ何て言う乙女ゲー…って、違うっ。

あたしはテンパリ始めた頭の中を元に戻そうと激しく頭を振り、

気持ち悪くなりかけると振ってしまい慌てて止める。

落ちて着いて落ち着くんだ、あたし。あたしはいつも通りに朝く…
委員長に話し掛ける。普通に、いつも通りに！ be cool、
be cool…

「…っし！」

もつまともに朝倉くんと言えず、委員長と言い直した時点で色々
と意識してしまっているのだがそんな冷静な判断はもうあたしは出
来ず、飢えた虎の檻に生ハム携えて入る決意で以て意を決すると、
奥のドアへと移動して引き戸をゆっくりと開けた。

…委員長？

「あ、遅かったね」

引き戸が開くのに併せて朝倉くんがあたしを見て、その最大の武
器である笑みを浮かべて声を掛けてきた。

清潔で綺麗な髪に優しそうで人懐っこい笑みと白く光る歯。

総評 A A + byグッチ

うう、本当に朝倉くんだし。

「入らないの？」

「こ、ここで良いっ」

…て言うか、無理です。

朝倉くんが教壇から降りて教室の中程へと行こうとしながら、教
室の中へと誘ってくれたけどあたしは声を上擦らせながらもそれを

断ると腕を組み、引き戸の金棒の方へと背中を預けた。

向こうもそんなあたしを見て諦めたのか、クスツと笑うと元の立ち位置に戻ってきた。

「…朝倉くんだったんだ」

下駄箱のアレ。

「そ。意外だった？」

「…かもね」

嘘です。

意外も意外。意外過ぎて今にも倒れかねないよ、今のあたしはっ！

表向きは何とか平静を装ってはいるが内心ではもう上や下への大騒ぎ状態で、あたしは今にも崩れそうなのを必死に抑える。

「で、何の用？」

っし、言えたっ！

と、内心で拳を握る。が、

「用があるのは確かなんだけど、ちょっと訊きたいことがあってさ」

…訊きたい、こと？

何だか妙な方向に…何やら念願の告白されるのとは違うんだよ的な雰囲気思わず、肩がずり落ちそうになるのを必死に堪える。

「…き、訊きたいことって？」

何とか気を取り直し、なるべく感情を乗せないよう一体、それが何なのかを朝倉くんに見つけてみる。

「人間っていうのはさ、よく『やらなくて後悔するよりも、やっってから後悔したほうがいい』って言うよね？ これってどう思う？」

「…」

それが”あたし”に訊きたかったこと、なのだろうか？

どんどん気持ち冷めていく…答えられなくてもいい。が、正直、あたしなんかの答えでいいのか？ と思う。

「…さあ…そのまんまじゃないかな？」

我ながら何とも学の無い答えだろう。

「じゃあさ？ 例え話なんだけど、現状を維持するままではギリ貧になることは解ってるんだけど、どうすれば良い方向に向かうことが出来るのか解らないとき…きみならどうする？」

「…えと、何の話が分かんないんだけど…？」

あたしへの問い掛けは続く。

答えられず、質問に質問で返したんだけど朝倉くんは変わらない笑顔で無視した…これは地味に傷付く。

「とりあえず何でも良いから変えてみようと思うでしょ？ どうせ今のままだと何も変わらないんだし」

朝倉くんの自ら導き出した答えはあたしと似たようなモノだった。
…何だ、そんな答えて良かったんだ。

「確かにそういうこともね」

「きみもそう思うよね？」

そう言つて朝倉くんは例の人懐っこい笑みを向けてくる。

お願いだから、出来ればそれをこっちに向けなくて欲しい…正直、眩しいです。

「でもさ、上の方にいる人は頭が固くつて、急激な変化にはついていけないんだ。でも、現場はそうは言つてられない。手を拱いていたら確実に良くないことになりそうだから。だったらもう現場の独断で強硬に変革を進めちゃってもいいよね？」

自分に向けられている微笑みに対し、眩しさからずっと顔を逸らしていたあたし。

だからそれは、

「何も変化しない観察対象にオレはね、もう飽き飽きなんだ。だから…」

天啓、だった。

天からの啓示…恐らく生きてる内に一回あるか無いか、運命なり九死に一生を決定づけるその不確かなる声が頭に響かせたのはたった一言、

” 危険 ”

だった。

ここ最近、何度も聴かされた”観察対象”という言葉に未だに半ばばかり浮かれていたあたしの心を一気に引き戻す。

その結果、あたしは朝倉くんの言葉を聞き漏らさずに済んだ。

「きみを殺して涼宮ハルヒコの出方を見る」

あたしを殺し…の辺りであたしの身体は勝手に動き、全てを聞き終わる前には既にあたしの身体は逃げようと反応してはいた。けど、

「逃がさないよ」

「っ！ あうっ！？」

髪を掴まれたと思った瞬間、あたしは物凄い力で教室の中へと引き込まれ、教卓にそのまま激突していた。

「痛っあ…朝倉っ…待」

て…と言おうとした瞬間、夕日が朝倉くんが持つ”何か”を照り返したと思った時には生物としての生存本能か、あたしは無我夢中で手は教卓を掴み、もう片方は教壇に爪を立て、力一杯に自分の身体を黒板の側へと投げ出していた。

壁にぶち当たって痛む背中、首筋や後頭部。

そして、倒れるほど傾いているのに一向に倒れない教卓と何故倒れないかの理由である、それを支えるように刺し貫いている日本刀…が、え？

「…さ、さっき、そんなの…も、持って」

…持つて無かった、の…に？

そんなあたしを後目に朝倉くんは音もなく、教卓から日本刀を引き抜くと支えを失った教卓が大響音を立てて倒れる。

そして、

「よく避けたね」

あたしに向けられるさつき見た、優しそうで人懐っこい笑顔。何で、何でそんな、変わらない笑顔なの？

「じょ…冗談、だよね？」

…ワケが解らないつ。

非日常的な出来事にあたしの頭の中は許容量を超えていてパニックになっていた。なのに、朝倉くんは…

「冗談だと思う？」

本当に変わらない、いつもと同じ笑み。

それを見てると何もかもが本気には見えない。だが、痛む背中が現実だと主張し、自分がさつきまで居た場所を刺し貫いた刃は今も朝倉くんの手の中にある。

日本刀の冷たい光が相手は本気なんだと告げている。

「…ふーん？」

あたしの瞳が彩るその恐怖を感じ取ったのか、朝倉くんは刀の背を肩で担いだ。

「死ぬのって嫌？ 殺されたくない？ オレには有機生命体の死の

概念つてのはあんまり理解できないんだよね」

朝倉くんが肩を竦めるのを呆然と見上げながらもあたしは何とか身体を動かそうとしたんだけど、恐怖が勝っているせいか全然全く言うことを聞かない。

「あ、逃げようとしても無駄だよ？ ドアは壁にしたから」

「？ つ！？」

その言葉に自分が居たドアを見た。

そこにはドアの代わりに乳白色の壁が埋まっていて、元からドアなど無かったかのように教室一面がコンクリートの壁に覆われている。

「…何で？」

あたしは、ついさっき、今し方まで、あのドアの金枠に凭れかかってたのにっ！？

「これで無駄なのが解ったかな。この空間はオレの情報制御下にある。脱出路は封鎖した…簡単なことさ。この惑星の建造物なんてちよつと分子の結合情報をいじってやればすぐに改変できる」

窓もいつの間にかコンクリートのそれに変わって一切無くなり、そして知らない内に点灯していた蛍光灯が狂ったように爛々と、あたしと朝倉くんしか居ないこの無人の教室を照らしている。

「今のこの教室は完全な密室。出ることも入ることも出来ない」

「あ…朝」

倉くん…と続けようとした、あたしの言葉は目の前を走った刃の光が遮られる。

「…？」

何が起きたのか。

油切れを起こしている首を何とか動かして刃が走った先を、下を見やり、一気に血の気が引いた。

…刃が、あたしの…スカートを、貫いて？

「もう諦めなよ？ 解つてると思うけど今のは刺そうと思えば刺せたよ？」

「…っあ…っは…っ？」

その布越しから感じる凶気の刃と紙一重に伝わってくる鋭い冷たさがあたしに罅を入れたのは間違いなかった。

「っ？ …っ？！」

「？ ふーん…」

それが相手にも気付かれた。

「… 案外、はしたないんだね？ いつものクールさは何処に行ったのかな？」

「っ！ ……っ…っ」

…ム力つく…ム力つくム力つく。くそつくそつくそおっ！止まれ止まってよっ！

朝倉くんが何か言っただけ、あたしは心の中で情けない自分を罵倒し続けて。でも、ショーツやスカートが濡れていくの止めたくても止められなかった。

「なるほど…涼宮ハルヒコが気に掛けるのも少しは分かるかな。力ワイイよ、きみは」
「っ！」

あたしはキツと朝倉を睨んだ。
涙とか鼻水が出て、全く様になってないけどこのまま屈服するのは真っ平だった。

「往生際が悪いね」

「つつ！」

顔を近付けてきた瞬間、あたしは朝倉…こんな女の敵に敬称なんかいらないう…その顔を力の限りに拳で殴ろうとしたが、

「！？ えっ……な、何で…何でっ！？」

変わりなく微笑むム力つく横っ面に当たるはずの拳がその直前、身体に急制動が掛かったように止まった。

意思に反して止まった拳は相手を殴ることも引くことも叶わなくなり、逆の腕も身体全てが同じく言うことを聞かず全く動かない事に気付く。

「か、身体っ…動かっ」

「本当に…往生際が悪い」

言って朝倉があたしの頬に触れてくる。

…あたしに触るなっ！

「はあ…言つとくけど、あんまり手を煩わせると殺すよりも先に」
噛みつかんばかりのあたしの目の前でまたあの光が翻る。

…？

「きみに悪戯してる写真、涼宮ハルヒコに送っちゃうよ？」

「っな…」

身体が動かないから首も動かせず、何が起きたのかは解らない。
でも、突然良くなった素肌への風通しの良さで察したあたしの顔は
羞恥心で染まっていく。

「まあ、言っても別に生殖行動に興味無いし…」

翻った刃の切っ先がそのままあたしの心臓へと向けられる。
くそっ恐いのにも目も瞑れないっ。

「じゃ、死んで」

切っ先が降りてくる。
その瞬間、

「っ！」
「っ？」

横からの爆音と共に目の前に居た朝倉が視界の外へと吹っ飛んでいく。

そして朝倉の代わりにあたしの目の前に現れたのは…

「…な…がと？」

自分は宇宙人だ、とあたしに告げた長門 有希だった。

「一つ一つのプログラムが甘い」

普段と変わらない無感動な声。でも、今はそれが何よりも安心感を与える。

「壁面部分の空間閉鎖も、情報封鎖も甘い。だから私に気付かれる。簡単に侵入を許す」

「邪魔するのか？」

先の攻撃のダメージなど無かったのか、立ち上がって対峙する朝倉は平然たるものだった。が、

「この人間を殺せば、涼宮ハルヒは間違いなく動く。これ以上の過去に起きた以上の情報の爆発を得るにはこの方法しかないんだよっ」

「お前は私のバックアップのはず」

そう、感情をさらけ出して話す姿はあたし…クラス全員も含めて…は見たことがなかった。

そんな朝倉に対して、長門は平坦な声で淡々と告げていく。

「独断専行は許可されていない。私に従うべき」

「…イヤだと言ったら？」

「情報結合を解除する」

長門の言葉に朝倉がまたいつもの笑みを零す。

「ながと…くん」

思わず呼ぶあたしに長門が止まったままだった拳に触れると、急に腕の重さが戻ってあたしは慌てて引き戻した。

「やってみるよ？ 言つとくけど、ここではオレのほうが有利だよ？ この教室はオレの情報制御空」

「情報結合の解除を申請する」

朝倉が言い終わらない内に突如として彼の目の前に姿を現した長門。

迎える突き出された日本刀は長門の手で防がれ、砂塵の如く消え行くのを見てとると朝倉は刀を捨てて間合いを取った。

その攻防も瞬きほどの一瞬の出来事で、あたしは本当に二人は人間ではないのだと知らされる。

「危ない、危ない」

教室の中程に降りた朝倉。そして、それから隠すようにあたしの前に立つ長門。

「離れないで」

そうあたしに呟いてくれた瞬間、朝倉が動いた。

彼の周りが突如として歪みだし、そこに手を翳すと歪みのそれが凝縮していく。まるで空間そのものが槍の結晶のようになったと思った時にはそれは爆発四散し、襲ってきた。

「っ……？」

無駄だとは知りつつも目を閉じて腕で自分を防御する。が、いつまで経っても来ない痛みにもソツと目を開ける。

「？」

間髪入れずにあたし達を襲い続ける空間の槍。その全てを長門が迎撃し、砂の結晶に帰しているというのに気付いたのは暫くしてからだった。

「こつち」

「っひあ？」

長門が朝倉の攻撃を弾きながら空いてる手で未だに下げ忘れていた腕を掴むと床に伏せさせられる。

しかも、ここ最近では上げたこともない悲鳴をあたしは上げて。

「ながとわっ?!」

余裕が出来て毒づきかけた瞬間、ついさっきまで頭があった所が爆撒し、破片を飛び散らせる。

長門がサツと上を見上げると瞬く間に朝倉の頭上に氷柱が生まれ、標的を射抜かんと降り注ぐ。が、貫かれた朝倉は全てが残像だけで捉えきれず、結果として床には標的を貫き損ねた氷柱が林のように乱立していた。

「この空間ではオレには勝てない」

まったくの余裕の表情を浮かべて佇む朝倉は数メートルの間を挟んで長門と対峙している。

あたしはと言うと、うつ伏せに床にへばりつき、長門に跨がれて立たれている。

視界に入った上履きの横には生真面目にも小さく名前を書いてある…不謹慎だが、それが妙に笑えた。

「select シリアルコード…」

長門が何かを呟く。

「…om データベース where コードデータ order by 攻性情報戦闘 having ターミネートモード。パーソナルネーム朝倉 涼を敵性と判定。当該対象の有機情報連結を解除する」

長門が言い終わると向こうも準備が整ったのか、空間全てが湾曲し、幾何学模様の渦が踊り狂っている。

いつの間にか朝倉の姿が見えない。

「うつ」

そしてその模様は床でも踊っており間近でそれを直視した瞬間、酔いそうになる。

まるで遊園地にあるビックリハウスのような視覚効果…吐きそう。

「無理だよ。オレよりもお前の機能停止のほうが早い」

姿が見えないためか四方八方から声がしているように聞こえ

「ぶっ」

長門の蹴り上げられた踵の所為であたしの思考が一時中断する。

「なにす」

る、と言いかけたあたしの鼻先を見えない槍が通過し、床をめくり返していく。

「へえ…上手く避けたね。でも、そいつを守りながらいつまで持つか…ほらっ、これなんかどうだい？」

「…？」

次の瞬間、あたしの前に立ちはだかった長門の身体が1ダースほどの茶色の槍に貫かれていた。

「あ…あ…」

長門は、朝倉が放った多方向からの攻撃を無効化するも迎撃しきれなかった槍が再度、あたし達…あたしに襲いかかってきて、それ

らから守るために自分の身体を使っただ。

長門の顔から眼鏡が落ちると床で小さく跳ねた。

「な、長門くんっ！」

全てを理解した時にはあたしは叫んでいた。

「きみは動かなくていい」

胸から腹にかけて隙間無くびっしりと突き刺さった槍を一瞥して
長門は平然と言った。

「へいき」

…へ、平気…で。

目の前の惨状のどれを取って平気なんて言葉が出てくんのよっ。

そんなあたしを後目に長門は眉一つ動かさずに身体に生えた槍を
引き抜いては床に落としていく。

「っ……っっ」

抜かれる度に発する痛みを想像して息を呑むあたしの目の前で、
乾いた音を立てて転がって行く血塗れの槍は暫くして生徒机へと姿
を変えていく。

茶色は机部分の色だったのだ。

「さて…それだけダメージが蓄積されれば他の情報に干渉するよう
な余裕ないよね？」

揺らぐ空間の向こう、朝倉が静かに両手をこちらへと突き出して

いた。

「じゃ、これでとどめた」

あたしの見間違いないかなければ指先から二の腕までがまばゆい光に包まれて二倍ほどに伸び…

「死ね」

あたし達への死の宣告を行った瞬間、光に包まれていた朝倉の腕が触手のように小さくのとくとくと突出し、物凄いスピードで伸びたかと思えば、あたしの視界がいきなり赤く染まった。

「え…？」

顔に鮮血が着いたのだ。

揺れる長門の身体…右の脇腹に突き立った朝倉の左腕だったモノと左胸を貫いた右腕だったモノは長門の背中を突き破って教室の壁をもぶち抜いてようやく止まっていた。

また長門の身体からは吹き出した血が見上げるあたしの顔、自分の足を伝って床に大きな血溜まりの池を作っていく。

「終わった」

そうポツリと呟いて長門は触手を握る。

「終わったって何の事？」

何も起きない事に朝倉は勝ちを確信した口調で語りかける。

「お前の三年あまりの人生がか？」

「違う」

致命傷と言える重傷を負いながらも長門は何もなかったかのように平坦な声で言った。

「情報連結解除、開始」

それはあまりにも唐突でいきなりだった。
教室のすべてのものが輝いたかと思うと、その1秒後にはキラキラとした砂となって崩れ落ちていく。

「そんな……」

天井から降る結晶の粒を浴びながら、今度こそ朝倉は驚愕の様子だった。

「お前はとても優秀」

長門の体中に刺さっていた槍も砂になる。

「だからこの空間にプログラムを割り込ませるのに今まで掛かった。
でも、もう終わり」

「…侵入する前に崩壊因子を仕込んでおいたって訳か、道理で弱い
はずだ。予め攻性情報使い果たしてたんだな…」

結晶化し始めた己が両腕を眺めながら朝倉は観念したように呟く。

「あーあ、残念。所詮…オレはバックアップだったんだな。膠着状態をどうにかする良いチャンスだと思ったのに」

そう口にする朝倉は呆然とするあたしを見てクラスメートとしての顔に戻った。

「オレの負け。良かったね、延命出来て。でも気を付けなよ？ 統合思念体は見ての通り一枚岩じゃない。相反する意識をいくつも持つてる。ま、これは人間も同じだけど。いつかまた、オレみたいな急進派が来るかもしれない…それが、長門さんの操り主が意見を変えられるかもしれない」

朝倉の胸から足はすでに光る結晶に覆われている。

「それまで涼宮くんとお幸せに……じゃあね」

そう言い終えると朝倉は音もなく小さな砂場となった。一粒一粒の結晶はさらに細かく分解していき、やがて目に見えなくなるまでになる。

朝倉 涼という男子生徒はこの学校から存在ごと消滅した。

「…」

そう、消えたのだ。跡形もなく。

「長門…」

「…」

長門がこつちを振り向く。

見せた顔はいつもと変わらない無表情。会話の内容から朝倉とは

仲間だったのはあたしにも分かる…なのに、長門は変わらず無表情だった。

「着ている物を再構成する」

「…」

長門が自分を見ている。

無表情で淡々と作業を行っていく。刀で斬られてはだけてしまった制服に穴が開いたスカート…切れたり濡れたりした下着も…何も無かったかの様に元の姿に戻った。

「衣服の再構成終了…教室の再構成に移行する」

「…」

砂の崩落が止まる。

見る間に教室が、いつもの見慣れた一年五組の教室へと戻っていく…まるでビデオの逆回しを見ているかのように。

白い砂が黒板や床、教室、机…と形が元に戻っていく。放課後教室を出た時と同じ場所に並んでいく。

壁になっていたところには窓枠が現れ、透明化していき窓ガラスになる。そして、窓から差し込むオレンジ色の西日が視界に入るのを合図に何もかもが元に戻った。

「…」

あたしはヨロヨロと立ち上がると自分の席へと向かい、中を調べてみたが中身に変化はない…ちゃんと入れたままにしておいたものがそのまま変わらずに入っている。

「…は、ははっ」

窓ガラスに微かに映る自分を見る。あたしの身体に散った長門の血もいつの間にか消えている。

…本当に魔法が何かなんだ。

「全ての再構成が終了した」

彼も朝倉と同じ存在。

「…」

「すまない…」

「何？」

…何で謝んの？

「朝倉 涼の異常動作はこっちの責任。不手際」

…別にいいよ、

「生きてるし、気にして…ないから」

あたしは長門を振り返ると安心させる為に笑い掛けてやる。が、特に表情の変わらない長門に掛け甲斐のない相手に対して笑みを向ける自分はヒドく滑稽…ああ、駄目もう限界みたい。

無表情でこちらを見つめている長門の姿、その視界が一気に歪む。

「…っ」

もう堰止めようとする意識や気力なんてない。
そんなものよりも安堵や解けてしまった緊張感…消せない、刻み
込まれた死の予感、死の恐怖が勝ってしまったている。
止め様が無かった。

「うつ、あ…あああ」

あたしはその場にへたり込むと大声になりそうな嗚咽をそうなら
ないよう、出さないように無理矢理に押し殺し、咽び零しながら泣
いた。

最後に泣いたのはいつだったかは覚えていない。だけど、どれも
が大した理由でもない内容で泣いていたのは間違いない。

このキズと比べたら、そんなもの…っ。

「っぐ…っぐ」

しばらくはただただ泣いていた。でも、そんな状態のあたしがそ
れに気付いたのは十何回目かの裾で拭っている時だった。

「…？ あ…」

長門がへたり込んで泣いているあたしの傍らにいつの間にか座っ
ていた。何も言わず、ただ直ぐ傍に。

いつから座っていたのかは知らない。朝倉はあたし達の行動原理
とか知らないと言ってた。だから唯単に座ってあるだけかもしれ
ない、意味なんか無いかもしれない…けど…だけどっ。

「…っ、う…うあ…ああ」

… ああ、もう、本当に駄目だ。
それがトドメになった。あたしは押し殺していたはずの嗚咽も押し殺せなくなって本格的に泣いた。
無人の教室で自分の嗚咽だけが響いていく。

「… つく… うつ、いくつ」

「…」

あたしはそれからどれくらい泣いていたのかは覚えていない。今も泣き止んだわけではないが余韻が後を引いているだけだった。
まあ結果として言うなら一応は泣き終わっていた。だから、その時点で早々にこの教室から立ち去るべきだったのだ。

「いっえーい」

突如として景気良く開け放たれる教室の引き戸。

「らんらららん、っと わっすれゝ物、わっすれ物ゝん♪」

と、聴き知ったる声とその声で”らしさ”を感じさせる歌。

軽快なステップで自分の席へと向かう、日常の象徴…グッチの姿が机との間から見えた以上、思わず声を漏らしてしまうのはもう必然だった。

… あ。

「？ うーん？」

あたしが漏らしてしまった声を拾ってこちらに気付いたグッチが

こつちをフツと振り向くと、

「え、キヨっはうわぁっ!?!」

あたしの姿を見つけて声をかけようとしたが、隣に誰か居たのに
気付き、それが長門だったという構成に盛大に驚いて周りの机にぶ
つかりながら後退った。

…えと、

「あの…えと、これはさ…」

「お」

…お?

「お構いなくーっ!」

って、何か使い所間違ってるっていうか何を誤解してっ…と言
い
たかったんだが、

「…っ? お、あら?」

ああくそ、緊張が解けたら腰まで抜けてたか。

誤解を解くにも追い掛けることも出来ず、かと言って叫んだとこ
ろでのバカは階段を駆け降りているころだろう。

…ぬうう、しくじったあ。

「大丈夫?」

「っ?」

手に当たる意外な温もり… って、あたし知らない内に長門の袖握ったのか？

その温もりは長門は袖をキュッと掴むあたしの手に手を重ねたモノだった。

「大丈夫、じゃないかも…」

…これはグッチじゃなくて傍目からは誤解する、か。

そんなこんなであたしが心を落ち着かせ、動けるようになるまでの十数分を確定された翌日のグッチからの質問攻めに一体どうしたものかと悩んだり、その悩みに長門が提案してくれた記憶操作による消去という方法を承諾するか？ などなど、時折に長門から変な決断を迫られたりとでなかなか思うように安らげなかった。

「はあ」

未だに残るささくれ立った感覚。

この感覚は動けるようになって帰路についた今も解けない。事後処理があるからと長門と学校で別れて、家に帰って、玄関開けたら、

「あ、キヨンちゃんおかえりー」

「げふっ」

玄関で弟の突撃を食らった。

「？ 何か疲れてる？」

…うん、疲れてる。

気付いたんなら腰から離れてよ、弟よ。お姉ちゃんは疲れてるか

ら今日は遊んだり勘弁して。

「はい」

うんうん、聞き分けがよろしい。

出来ればいつもそれで居てほしい。が…簡単に離れたってことは余程にあたしは弟から見てもヤバいらしいという証拠だ。

あたしは食欲がないことを母親に言つとそのまま風呂に入り、部屋に戻るとのそのそと着替えてベッドに倒れるこんだ。

「はあ」

…瞼、重いなあ。

身体にのし掛かる妙な倦怠感…今、目を閉じれば夢も見れない深い眠りに入れるだろう、有り難いコトに。でなければ、まず間違はなく今夜の夢は悪夢だ。

長門が現れないという状況の。

「…」

…本当に瞼が重い。

次に目を覚ませば今までの日常は非日常へと変わっていくだろう。それは間を置かずに一変するの、段階的なのかは知らない。が、今のあたしは多分、心境とは裏腹に顔が笑っているかもしれない…何故かそう確信を持ちながらあたしは意識を手放し、そのまま眠りに就いた。

あと思った通り、悪夢は見ずに済んだことを言っておくね。

不変 団の日常（前書き）

第5部部分です。

ややペース落ち気味です。でも、頑張って更新しますっ。
では、どぞー！。

不変 団の日常

…

瞼を開く…いつの間にか閉じてたみたいだな…と、オレの額に指を当てながらこちらをジッと見据えていた長門と目が合う。

「何？」

「…何も」

しかし、えらい違いだな。

朝倉涼子…朝倉涼か？ …に襲撃された時の記憶を追体験した感想は一言で言えばそうだった。

「ふう…」

「何か気になる点でも？」

溜め息をつく、また長門が訊いてくる。

女の時の記憶が蘇ったおかげか、今の長門を見ても先程まで湧き上がったいた可笑しい衝動はもうない…いや、そんな事よりもあの…朝倉との事件は問題だ。

「有りすぎだ。地味に貞操の危機があつたぞ」

「貞操…ですか？」

貞操の危機という言葉に古泉がやたらと不思議そうに訊いてくる。長門に関してはいつもと変わらん無表情っぷり。

その辺は助けてもらっというてなんだが長門…いや、本元の情報なるとかには貞操観念やらは無いんだろうな、やっぱり。

「…朝倉のヤツにちよつと、な」

「ああ、あの時の…ですか？」

「…ああ」

なんつーか、終わった事とはいえ何とも形容しがたい。単に生き死にだけかと思えば余計なモノまで奪われかけたんだからな。性別が襲う側の絶対的な優位性からか、あれは妙な…必要な遊びだ。悪趣味な、な。

オレが肩で大きく溜め息をつくとき、長門がスッと立ち上がる。動きを追って見上げるが…首が痛むな。この角度は。

「…今日はここまでにする」

「？ 何でだ？」

こんなんに時間食ったら迷惑が掛かるというのに。そんな面食らうオレに長門が静かに理由を告げてくる。

「強制的に記憶を発掘する以上、リスクが伴う。でも、安心して一度行えば、以降で私がアプローチを起こさなくても記憶はゆっくりと思ひ出す」

いや、だからそれじゃ遅いし長門に迷惑が掛かって…

「…あなたの負担には代えられない」

「…」

そう言われるとオレは何も言えない。しかも元の世界でもあまり見せない長門の気遣うような笑み…と言ってもそれはオレにしか解らん、ミリ単位の変化だが…を付けられると尚一層に、な。

…ふむ。今の長門の姿が男なのが非常に悔やまれるよ。

「そんなにリスクーなのか？ この作業は」

「かなりの頭痛に見舞われる。だから回数もあまり重ねられない…
…夜は覚悟して」

…覚悟してって脅すなよ。

「事実」

…確定かよ。

「まあ、重要視するのは長門さんの記憶…だけという結論でいいんじゃないですか？」

そうは言うがな古泉よ？ オレが不憫なんだよ、それだと。

「あ…つか、古泉は記憶があるって言ってたな」

「…ええ、まあ」

そのまま聞き流されちゃうと思ってたのか古泉は少し取り乱したかのように見える。

何を慌ててるのか知らんが、他のメンツの状態を気にしない筈は無かるうが。

「で、どうなんだ？」

オレは確認を取るために長門を見上げてみる。

「一部分だけ」

こくんと長門が首肯する。

「…で、何覚えてんだ？」

「…」

オレは長門のお墨付きを貰うと改めて向きを変えて古泉に対峙し、頬杖を着いてジッと見てやる。

古泉のヤツ、オレに見られて暫くは所在なさげにしてたんだが、途端にアゴに手を当てて何やら考え始めている。

…オレは別に考えるほど難しい事は何も言っとらんと思うんだが……大丈夫か？

「…そう言うワケではないんですが」

「だったら、思わせ振りの態度を取るなよ」

強硬姿勢なオレにとつとつと肩を竦める。

…話す気になったか？

「仕方ないですね。正直に言いましょう…」

と、古泉は深い溜め息をつくと何やら席を外す。
て…どしたよ？

「いえ、お茶でも入れようかと。あ、玉露で宜しいですか？」

「おう」

どっちかつーと、朝比奈さんに入れてもらいたいんだがな…居ら
っしゃらないんじゃない？仕方がない。古泉のつてのは引つ掛かるが、経験
則から自分で煎れるモンじゃないと解ったからな。

今のところ、朝比奈さんが入れて下さったモノならどんな出廻ら
しだろうが甘露となり、長門が入れば普通に美味く感じる。ハル
とは……………まあ、この際アイツはノーコメントで。

「どうぞ。長門さんも」

「おう」

「ありがとう」

んな事を考えてる内に古泉は皆の分を配り終わると席に戻り、誰
よりも先に飲み始める。

ふむ、毒はないな。

「それは…ちよつとヒドいですよ？」

「ははっ…ま、気にすんな」

と、少しムツとする古泉をあしらいつつオレも後に続いて一口飲んでんだが、

「…」

「…どうしました？」

一口含んで止まっているオレに笑顔な古泉がわざとらしく訊いてくる。

くそ…。

「いや…まあ、不覚にも普通に美味いって思っ」

「おうっ、みんな揃ってるなっ？」

突然の割り込みに振り返るとハルヒが音もなく部室のドアを開けていた…って、無音かよっ？

「ハル」

「涼宮くん、今日は遅かったね」

「あ？ 掃除当番だよ、掃除当番」

「なら、割に結構早かったね」

「そっか？」

オレが声を掛ける前に古泉のヤツが割り込んでそのまま会話が始まる。

つか、古泉、お前口調がまるつきり変わってるぞ？ まるで見るとからに女子のような？ て、身は女なんだが…

「おっ？ 良いの飲んでんじゃん」

オレが顔をしかめている間にハルヒが長机の上に仲良く三つ並んだ湯呑みを目敏く見つけ、オレのを勝手にかつ攫っていく…って、おいっ？

「ちよっ…あ」

飲みやがった。

小競り合いになる前に中身が零れる前に素早く奪い返したかったのだが、ハルヒの方が早かった。

「……うーん、これは古泉さんが煎れた？」

「あ、良く判りましたね」

「みつるちゃんか古泉さんしか煎れないし簡単、簡単」

言ってハルヒはオレの所に湯呑みを戻すと定位置にカバンを放り投げてそのまま古泉と会話を続けている。

さっきまで静かだったクセに何なんだよ今のこのテンションは？

「…ああ、もう」

ぶつくさと言いながらオレは席を立つと仕方なしに自分で茶を注ぎに行く。

「そう言えば、さっきみんな揃ってるなって言いましたけど朝比奈先輩がまだですよ？」

「ああ、さっき電話あつて気分が優れないからって今日は来れないつてよ」

ホント根性ないのなアイツ…と、何やらご立腹な男のハルヒ。いや、ハルヒ…コ…ハルヒコ、ね。

「…」

オレは並々と茶を注いだ湯呑みを持つと皆の方に向き直り、机に凭れながら古泉と話してるハルヒコの顔をぼんやりと眺める。
…教室でのダウン―状態は何処行つたんだか。

「ん？ 何だよキョン？」

「…」

視線に気付いたハルヒ…違う…ハルヒコだが、何用かを訊いてくるがオレはフツと軽く目を伏せると、

「別に」

素っ気なく返すと自分で煎れ直したお茶を一口含んだ。
はああ…やっぱりな。ま、分かってたんだ普通に不味いつて。

「あ」

「…」

「おやおや」

何か三人が口々に声を漏らしたみたいだが、オレは古泉が煎れた

のよりも不味いという認めたくないモノを再確認していた為、気にすることもなく溜め息なんかをつきながら席に戻った。

「ん？」

だからオレがそれに気付いたのは、暫く一氣に不味くなってしまったお茶をちびちびと飲んだ時で、先程まで弾んでいた古泉とハルヒコの会話が何やら停滞している事にやっと気付けたわけだ。

「？」

「……」

どした？ 二人とも？

オレは湯呑みを傾けながら、まずハルヒを見たんだが……

「？」

「……」

オレが顔上げた瞬間、何か顔を赤らめて向こう向いちまいやる。

（あん？）

んで、次に古泉のヤツを見たら見たで何かこっちに何かニヤニヤした顔を向けて来やがる。

……つか、何なんだよ？

「……いえ、別に」

問い掛けてもはぐらかされる。とりあえず未だニヤけ顔の古泉は訳が分からないので、それに対しては怪訝な表情を見せて応えるとオレは最後に長門に視線を送ってみたんだ。が…

「…っ？」

「…」

その長門さんが何やら突き刺すような視線をオレに向けてらっしやって…えーと、長門さん？ その…無言で思いつき見つめられると落ち着かないんですが？

「…」

「？」

「…」

「??？」

うーむ…。

何分経ったか。本当にいい加減に無言の三点リーダーで居心地悪くなり掛け始めた所で長門が動き、スッと何かを指差した…って、湯呑み？

「湯呑み」

オレの湯呑み…が、何だ？

「か」

「そんな事よりもよっ！」

うおっ？

沈黙していた長門がやっと何かを言いかけたんだが、その顔が急にハルヒの顔に入れ変わって思わず仰け反りかけたよ。

オレと長門の間にいきなり血相をかいだハルヒコの顔が横から割り込んできたんだからさ。

「新しい衣装持ってきたんだけど二人とも着てみてくれっ」

「は？ 衣装？」

不意打ちな顔出しに不意打ちな提案だな？　つか、待て、二人って何だ？　オレと古泉がか？　何か突拍子ないぞ、ハルヒコ？

「何で着なきゃならん？」

仏頂面なオレにハルヒコが理由を説明する。

「イヤな。みつるちゃん居ないから持ってきたヤツ無駄にしたいくないワケよ」

あっ？　だったら無駄にすりゃあいいでしょうよ？

これは意識が男だからというのではない。女のオレでも絶対にこう言うだろう。

「だから、何で、そこで、オレなんだ？」

オレは静かながら強い語気で一つ一つ区切ってハルヒコに聞く。

自分で言つのも何だが今、絶対に目つきが最悪に悪いだろうな。

「っな、一人称変えてまで拒否しなくてもいいだろうっ？」

「キョンちゃんはいつも”あたし”なのに今、何か怖いよ？」

と、ここでの古泉の密かなフオーで一瞬で冷静になる。
つと…そうだ。この世界は”オレ”じゃなくて”あたし”だったな。

「……くどい。何と言おうと…あ…あた…しは、着ないからなっ？」

オレは冷静を保ちながら己の失態に内心では舌打ちつつ、勢いはそのままに言い直す。

…何か言い慣れてないのが丸出しで不自然だが。とは言え、ハルヒコにはそれはそれで逆に効いたのか、珍しく少し及び腰になっていた…そう、なっていたってのに、

「でも…今回は何を着させるのか興味はあるなあ」

古泉が食いついた…って、てめえ何食いついてんだっ？

変に食い付いた古泉にオレは愕然…とまでは行かないまでも、とりあえずはと古泉の不用意な好奇心にキツと睨みを効かそうとしたんだが、あの野郎何か知らんが瞳を輝かせている。

それを見てオレはハッと朝のやり取りを思い出した。

（そう言えばコイツ…朝っぱらから男の尊厳捨て去ってたよなっ？）

正直な所、コレは思い出さなくなかった。が、だからと言ってこ
うも安易にコスプレに手を出すのというは何かが間違っていると思

わんか、古泉よ？

ん？ 朝比奈さん？ いや、あの方は次元が違うからいいのだよ。

「つか、古泉いつ？」

「よしっ見て驚け！ まずは修道女…シスターの服」

そんな古泉にハルヒコが内容を公開していく…って尼さんかいつ。

「バドガール」

…チューブトップ？ ンなの誰が付けんだよ？

と、次々と袋から出して長机に並べていき…

「CDとか貝殻てのも有るぞ？」

…勢いに任せての最後の適当な並べ出しに危つくそのまま流しそうになる。

「…」

「どうよっ？」

どうよ？ ってオレはお前の頭ん中が”どうよ？”と言いたいぞ。
何だよ…最後の二点は？

「ハルヒコ…お前はこんなのを朝比奈さんに着させようとしてたのか？」

流石のオレでもこれはどん引きしてしまう。
いくらシヨタっぽくも愛らしい可愛さを持つこの世界での朝比奈

さんでもこれは男の領域外だろ？　つか、お前は一体何処から仕入れてくるんだよ？

「ふふっ…ここは企業秘密と言う奴だ。な？　だから、これをキョンと古泉さんにだな」

いや、待て…何故そうなる？　何か結果と過程がおかしくないか？　これじゃあ最初っから朝比奈さんへのコスプレ目的じゃなくて、矛先がオレ達二人に向いてるって事だぞ？

「何だよ、ごちゃごちゃと。結局は着ちやうんだから四の五の言うなよな」

オレは耳を疑った。

は？　結局って何だ…？！

「こ、ハ、ハル…ハルヒコ？　オ、あ、あた…あたしがいつんなの着たよ？」

「あん？」

オレの詰問にハルヒコがスッと視線を横に逸らし、

「そりゃあ」

「あ、それ、わたしが結構強引に」

視線の先、私の席の向かいから軽い口調で古泉がにこやかに…いや、ハルヒコ睨んでるからオレには見えない…が、絶対にあのム力つく笑顔で言ってるやがるに違いないっ。

「て、てめっ…」

…過去、女のオレに今まで何しやがったコノヤロウあっ?!

「あう…キヨンちゃん怒った」

「つつ、ぐお…」

オレにも古泉の野郎は女の子の演技で対応。

っ…ハルヒコが居るから仕方ないとは言え、あの演技は何と言うか…中身が男だとこっちは知っているから、身体がこう…カユくなるなあ。

ああもう至る所をツッコミまくりたいのにハルヒコの前では何も出来んとは…ジレンマだっストレスだっ。

「キヨ…ンちゃん」

…今、話しかけんな古泉っ。

しかし、どうしたものか? このままだと結果はオレのコスプレに…付き合っしかないのかっ?

「もお…キヨンちゃん覚悟決めちゃおうよ?」

「ぐぬ…ぬ」

イヤだっ絶対に断固拒否っ。着ちまったら絶対何か男としての大
事なモノが無くなるっ。

と、オレが固く目を瞑り、俯いて唸っているとパイプ椅子が二つ
なり部室の扉が開く。

「へ…？」

「んじゃ、俺らは外に居るから」

「え?! あ、おいつ」

「はい、任されたました」

着るとも何も決まってもいないのにハルヒコはこれから着替えるんだろ? 的な感じに席を立つとハルヒコと長門は古泉の声に送られて外に出ちまった…って、おい古泉??

「涼宮さんは期待しているわけですし、ここはお願いできませんか?」

居なくなるや元の口調で話す古泉。

よくもまあ、こころこり切り替われるのな。

「その辺りは日頃の賜物です。それよりも」

「お願いもくそもあるかつ。オレは絶対に着ないぞっ」

「そこを曲げて」

「くどいつ」

「…」

「…」

と、まあ…一向に折れないオレに古泉は顔色を変えるかと思っただが、飽くまでも依然としてニコニコとした笑顔を向けている…

「なら、仕方ありませんね」

「あ？ 何が仕方ないだ？」

…おい、何で滲り寄って来んだよ？

「いえ……とりあえず」

行動の意図が読めないオレはそのまま既に古泉の射程圏に入っていた。

「記憶に従ってあなたをひん剥きますね」

「はあ！？ んなっ？！」

あ、肩捕まれた。

ま、いくらなんでも我ながら気付いたのが遅すぎだよな。

「よせ待てっ脱がすな脱がすなあっ！？」

「まあまあ、捕まったワケですし、ここは大人しく観念して下さい」

「だ、誰がするっひゃあっ？！ 古泉てめっ変なトコ触るなっ変な悲鳴上げちまったじゃねえかっ！」

「いやいや、今のは不可抗力ですから。そう仰るならせめて動かないで下さい」

「イヤだ断るっ！ されるがままになったら絶対調子に乗るだろっ？」

「……」

「な、何だよ？ そのム力つくニヤケ笑いをやめろ、このつつあつま、待てっ古泉？ 後生だっ話せば分かるから、な？ その手に持ったホタテCDは勘弁してくれええつつっ」

…

「…」

さて。今、目の前にある鏡には恥ずかしげに頬を染め、首から下げた口ザリオを縫るように握っている、可愛いシスター映っているんだが…

「…」

しかも、髪型はポニーテールと好みの装備ときている。ふむ、これは男の谷口が見たらいい評価が貰えますな。

「なかなか似合ってますよ」

はっはっはっ……喜べ。古泉のお墨付きを貰ったぞ？

良かったな、オレ。

「…大丈夫ですか？」

ん？ そんな顔をするな。オレは至って大丈夫だぞ、うん。いや、待て何だろな？ すまん古泉。今、無性に空を…澄み切った青空を

見上げてみたい気分なんだが、どうしたもんかな？

「……まあ、それは終わった後にでもお供します」

「ホントか？」

「ええ」

言っただな？　いったぞ？　約束だぞ？

姿見に映ったオレは軽く涙目になっている。

「勿論です」

言つて、古泉が姿見から外れていく。

それを見送ったあとしばらくの間、オレは身に降りかかった末代にまで恥を遺しかねないこの仕打ちに対して、天井をなんとなく見上げては自分の日頃の行いの内容に良し悪しを付けながら振り返ってみる。

………あ。今なんかこの姿は端から見たら、まるでシスターが現状を憂いて神に問うている風に見えるだろうな。

「…あ、でも神って言ってもこの場合はハルヒか？」

…うわ………神も仏も無えーな。つか、もし本当に居るならこんな状況になった時点でヤツらは確実に全員オレの敵だつ。

とりあえず鎖を引きちぎってロザリオを床に叩き付ける。

軽い金属音が部屋に響いた。

「…はあ」

転々と跳ねていくロザリオを後目に、オレはもう色んな意味で諦めたよ。

うん。諦めたのでオレは手始めに現実逃避として鏡に映る女の才を鑑賞する事にする。

おっと、疲れた表情なんかしたら勿体無いな…よし。

「ふう。……………ん」

とりあえず気持ちを切り替え、表情をはにかみながらも柔らかい笑みへとゆっくり変えてみる…て、おおっ？ オレ自身とはいえ意外に良くないか？ 少し気の強そうな固い表情が鼻につくが…まあこれはこれで良いなっ。

うん、ポニーテールという+αがあるかもだがそれを抜いても及第で…

「？」

と、姿見に映る女のオレを鑑賞する男意識のオレというアホなコトをしていたのだが、視界の隅に何かを捉える。

「っ？！」

そして、何を捉えたのかを確認するために姿見の隅に映っているそれを見て、それが一体何なのかと気付いた。

そんな現実逃避してくだらん事をする前に部屋から出るべきだったと後悔し、すぐに絶句してしまう。

今更ながら、耳に入ってくる布擦れの音…つか、まてまてまてっ何顔を赤くしてんだオレはっ？

「はぁ……………っ？ いやはや何というか、流石にコレは……………勇気が入

りますね」

聞こえてくる古泉の呟き。

そう。今まさに古泉が下着姿でホタテとCDを摘まんでしげしげと眺めているのだ…っ、ついでに言つと、だな？ いや、誤解が無いように言つが、姿見の隅に映っているのは…まあ、何だ？ 背中というか…その、お尻がみ、見えるかな？ うん。だから全部じゃない。

「やはりここは…この発泡酒の絵のヤツですね」

と言つてチューブトップに袋を弄つて対らしきホットパンツらしきものを取り出している…まあ、この時点なら…その、古泉の背中が見えるか、な？ うん。

そう。今まさに朝比奈級ボディの古泉がオレの後ろで絶賛生着替え中っ！ いや、まて。ヤバいねコレ？ 中身があの中古泉でなかったらやばかったねっ？ ってアホかオレはっ！？

「っっ」

ぬおおおっつ。

オレはギョツと瞼を瞑り、耳朵を刺激する布擦れに必死に耐えた。そりゃあもう、着替えが終わるまであれは男の古泉あれば男の古泉って早口言葉な速さで念仏みたく唱えてな。

「おーい、まだかー？」

一体どれくらい念仏を唱えてたかは覚えていない。この際どうでもいい。

オレは周りに一切意識を向けず一心不乱に念仏を唱えていた…そ

のため、ハルヒ…ハルヒコの声が廊下から聞こえるまでずっと続いていたのだ。

「あ、いいですよー」

「っしやあっ」

古泉の入室許可にハルヒコの嬉々とした声が返ってくる。

…この世界のハルヒは頼だスケベ野郎だと疲弊しきった頭で思った。

「おやおや……よくそんな事が言えますね」

「…何だよ」

ええいつ勝手に心を読むなよな。

オレの仏頂面に古泉は、別に…と返していつものニヤケスマイル…

「…？」

じゃあないな…いや、何だろうな？

と、思う間もなく扉が開け放たれる。

「二人とも何をチヨイスしたかな？ おおっ！」

乱暴に開かれた扉からハルヒコは古泉に視線をやってスケベ面が顔を見せ、後ろから覗き込む長門はオレに無感想、無表情な視線を向け…うん？

「？ …長門？」

「なに？」

いやあ…なに？　って程じゃあ…無いんだが…

「…途中で言い淀むのは相手に対して不安を与える。言わなければならぬ事柄なら、余計な気遣いは控えるべき」

「う…うん」

何か…やけに饒舌だな長門。　じゃあ…

「気のせいかもしれんが…お前、顔紅くなってないか？」

と、まあオレは長門にそう指摘したんだが正直な所、自信がない。確かにいつも言っているようにオレは長門の表情の変化分析なら一流だと思っている。なんなら不思議探索での諸費用を一年間全負担する券でも何でも賭けてもいい…そんなオレがだ、今の長門を見ていてイマイチ自信が持てない。

それは飽くまでも女だった頃の長門限定だと改めて気付かされる。とはいえ、性別が変わっただけで読み取れんようになるとは…日々の精進が足らんな、オレ。

「…」
「…」

「…」
「…」

「…」

しかし…こつも長引く沈黙にオレは段々と落ち着かなくなる。

あー…長門？ おーい？

「……っ…いる」

「ん？ んん？」

何だ長門？ 小さくて何言っているか分からんぞ？

「にあ」

「おおっ！？ 何だよ、キョン子も着たんじゃん。ポニーとセットでむちゃむちゃ似合ってるぞっ！」

あ？ ああ？ チツ、くそっハルヒコが邪魔したせいで何も聞こえんっ。

「な、何だよっ。古泉さんばっか構ったからって拗ねんなよなあ」

「ぶっ…ぶあ、バカか。誰が拗ねるかっ」

訳の分からん事を口走るハルヒコにオレは反論する。

当たり前だ。オレは今、意識は男であり女の時のオレではないのだ。同じ男であるハルヒコ相手にそんな気色の悪い反応はせん…いや、勘違いするなよ？ だからっってお互いに元の姿で、そしてハルヒが古泉ばっか構ってたっつてオレは…

「な、有希もそう思うだろ？」

「…」

「…？」

ハルヒコが長門を振り返る。

オレはその後ろから長門を見やり、向こうもハルヒコ…いや、微妙に外れてオレを見てるのか？ 見つめ返してくる。

「…」

「…」

またかよ、長門…。

無言の長門とオレ。と、既視感を覚える三点リーダーの空気の間もハルヒコは、お前もそう思うだろ？ とか、何照れてんだよ？ とか訊き続けている。

「…」

「…」

まだまだ続く無言。

それに対してハルヒコも仕舞には、色気が足んなかったか？ とか、露出させた方が良かったかとかに変わっている。

…長門に変なコト吹き込むなよな。

「そんな事はない」

「うお？」

あ、長門が口開いた。

「今のままで充分に魅力が引き出されている」

「…」

「ここからの改良は不要」

「…」

「私は、そう思う」

そう饒舌に言つてのけると締めとして首を数ミリ傾げる長門。
ぴたりと口が止まったハルヒコは後ろ頭しか見えてないからどんな表情かは分からないが多分、オレと同じで驚いているだろう。

「あ、ありがとう」

何とか、長門にそう返事を返すのがやっとだった。

何故なら、驚きに加えて恥ずかしさからくる赤みがプラスされてるからな。　思うように言葉が出ない。

「…お前、何顔を赤らめてんだよ？」

「っ?!」

そ、そうじゃねえかつ。何、オレは男の姿の長門に可愛い似合ってる…いや、可愛いは言っていないか？　って言われて顔を赤らめてんだよっ?!

「……………っら、長門さっさと出っぞ」
「…」

「…へ？」

オレがあたふたとするのを見てハルヒコが踵を返して再度、部室から退出しようとする…動かない長門にハルヒコが足を蹴って外に促している。

「制服に着替えんだろ？ だから、さっさと出るんだよ」

啞然とするオレにハルヒコが不機嫌な顔で振り返り、そう言い残すと廊下側へと歩を進める。

「あ…ああ。も、もう良いのか？」

「着替えろっ！」

オレの質問に怒鳴り声で返すと同時に音を立てて乱暴に扉が閉まる。あまりに滅茶苦茶な閉め方をしたせいか、天井の破片とか埃が肩などに落ちていく。

「…」

「…貴方も罪作りですね」

暫し、茫然としていたオレに古泉が後ろから顔を出す。

「何の話だ？」

「感想をそのまま言いました」

「分からんな」

とりあえず、近い。すぐ横から覗き込むんじゃない。人の両肩を

持つな。アゴを乗せんな。首に息吹きかけんな。つか、背中にそのメロン当たってただけど？

「鈍いですね…。当ててるんじゃないですか」

「本気で弾くぞ」

その無駄なメロンを。

「怖い怖い…ふふっ」

「…たく」

と、まあ。色々と違うのだが蓋を開けてみれば普段通りいつも通りのSOS団の活動だった。

あのあとオレ達が制服に着替え終わると同時に二人を中へと呼んだ。

何やらブスツとしたハルヒコは部室に入るやいなや団長椅子へと向かうとオレ達に背を向けて窓の手すりに足を掛けて外を眺めている。

長門はいつもと同じ…定位置にパイプ椅子を置き、本棚から一冊を選び終わると椅子に腰掛けてページを開く。妙に静まり返った部屋の中でページを捲る音だけが響いている。

そんな状況は結局、長門が本を閉じる音が響くまで続き、

「解散あゝん、お疲れ」

終わったら終わったで解散を告げるとハルヒコは早々に部室を後に行行った。

そんな不機嫌なハルヒコを見送りながら、オレは性別が逆転して

いるこの世界でも、ある意味いつも通りなSOS団の日常に内心ではホッとしたのは…皆には内緒だ。特にバイトに今駆り出されて行った古泉には、な。

頭痛 不意打ち（前書き）

第6部部分ですーっ。

良いページ量で駆け抜けてますよーっ。じゃんじゃん駆け抜けま
すよーっ!!

頭痛 不意打ち

いつもの…と言うには姿形に差異が多々あるが…見慣れた帰り道だ。先を歩くハルヒコと長門に後に続いて歩くオレ。

話し相手が居ないため必然と後ろから二人を観察する事になるんだが…簡単な感想としてはだ、この世界での二人の関係は良いように思えるのはオレの臆病目か？ まあ、ハルヒコが長門に一方的に絡んで喋りまくってるだけ…と、これは身も蓋もない言い方だな。

「しっかし意外だな？」

と、時折に聞こえてくるのはハルヒコのお前は結局どんなのがタイプだ？ の、年上か年下か？ とか、ムツツリか？ ムツツリなのか？ とか……で、お前は谷口か？

長門も長門で…

「…何が？」

から続き、別に…に、考えたことがない…でトドメには、質問の意味が解らない。ムツツリって何？ とハルヒコに対して真顔で訊いてみたり……あ、ハルヒコが絶句してる。

「…」

で、何かまたハルヒコってなったな。

目線が自然と下がり、オレは歩道を歩む自分のつま先を眺める。昨日今日で他の皆の性転換した姿形に慣れてないのは当たり前…

まだ戸惑ってる。加えてアイツの今の姿は認められないというか変わっているのを目の当たりにしてもやっぱりハルヒは…

「…はあ」

いや、別にハルヒの姿とかは関係ないだろうが？ オレも含んで全部が変わっちまってるんだし………あー駄目だあ。かなり頭が参ちまってて

「キョンっ？」

「って、わあああっ！？」

「人の顔見て叫ぶなっ」

失礼なっ…とオレを後目に仁王立ちで腕組みするハルヒ…そんな姿が女の姿の時とダブる。

ああ、もう。オレン中ではハルヒで統一するっ。

「ハ、ハルヒコが急に覗き込むからだろうがっ」

でも、対外的にはハルヒコでな。

「その前に何回も呼んだよ」

「それは…す、すまんっ…あ、あれ？ 長門は？」

長門の姿が見えない事にオレは慌てて周りを見渡す。どうやらいつの間にか自分とハルヒだけになっていたようだ。でも…いつの間に？

そんなオレにハルヒは大袈裟に溜め息をついて肩をすくめる。

「もう別れたつつの」

「いつ？」

「さつき。長門が呼んでなのにピクリとしねえし。諦めて先に帰ったぞ？ トボトボと気落ちしたみたいに」

「う…」

実際にそうなのかどうかオレは見えないから解らんが、あのデカいが線の細い身体を落ち込ませている様子は何故か容易に想像できてしまう。いや、ホントに実際にはどうかは分らんぞ？ 見たわけじゃない。ただ…念の為。

しかし…後で電話かメールで謝つといたほうがいいかな。

「ほらっ…行くぞっ」

「は？ あ、おいっ」

長門を気にするオレをよそにハルヒがいきなりオレの手を握り締めて歩き始める。

ちよっ…ハルヒコお前、道…

「あ？ 家の玄関前まで送んだよ。冬場はあの道は暗いし何とかだつて。春明けまで俺が面倒みてやるって言ったらお前も良いの？ つて言つたじゃん」

「え…ええと、そ、そだっけ？」

「たく、この若年性健忘症めっ…と失礼な事を言いながら手を引

いて前に行く。オレはそんな男のハルヒの後ろ頭を見やり、手を握る大きな手を見つめる。

…手、大きいな。いや、オレが小さいんだ。

この状況の中でオレはハルヒが何を望んでこんな世界に改変したのかとふと思う。とはいえ、まだ1日だけ…あまりにも情報が少ない。

「ハルヒコ」

「ん？」

「ペース落としてくれ。お前とあたしじゃ歩幅違うんだからキツいぞ」

言われて気付いたのかハルヒは、ああ…と漏らしてペースを落とし始め、オレが並んで歩けるところまで調整し連れ立って歩く。

…手は、そのままだ。

「…」

「…」

…何か変な感じだな。互いに言葉がない。

まあ、立場が元に戻ったとしてもオレがハルヒの手を引くというのが想像出来ん…どうしてもオレが引っ張られているな。

「…」

「…」

あれから無言のままでオレん家の目の前だ。

正直に言つと何かしら話した方が良かったんだろうが、この状況

だけでもう腹がいっぱいであり、会話なんていうオカズまで頭が回らん。

向こうも同じだ。まあ、女のオレなら普段ならこの状況をどうしていたのか？　と思わなくはないがな。

「…じゃあな」

「あ…」

その場を後にしようとするハルヒにオレは声を漏らすと後ろ姿に對して言うべき事を言った。

「す、すまん。余計な手間取らせて…」

「っ？」

オレの言葉にハルヒは驚いて振り返り……ん？　何故、驚く？

「…め、珍しいな。いや、初めてじゃねーか？　いつつもすぐ中に入んの…俺に声掛けたのって」

「そ…だっけ？」

「…いつつも終始俯いたまんま。手振りだけで挨拶交わして別れた」

「…う、俯いたまんまだ？　この世界の女のオレは礼とか言ってないのかよ？」

ハルヒの口振りでは言葉を交わす事も無く送って行って玄関前で別れるというパターンを繰り返していたという。

いや、礼ぐらいしてやれよな女のオレ？

「あ…」

「あん？」

「…ありがとう、な」

「っ」

「あ…」

何か後ろ向いた…

「~~~~っ!!」

て、おおぅいつ何でいきなり向こうへ走り出すんだハルヒコおー！？

何故か知らんが礼を聞いた瞬間、ハルヒはオレに対して背を向けたかと思うと全速力で遠ざかっていく。つか…速えな、おい。

「な、何だよ…」

しばらくして何とかそれだけを呟く。

この後、ただ呆然とハルヒが去っていった方を見ていた。

どれくらい玄関前に居たかは分からないがオレが我に帰るキツカケになったのは携帯の着信音だった。

『ー 古泉 一姫 ー』

「は？ ダレ…？ って、ああ、そっか古泉か」

ディスプレイに出た名前。一瞬、女の名前だったので何処の誰か分からなかったが部室での名前についての会話を思い出し、それがこの古泉の本名だと分かるととりあえず電話に出ることにする。

「もしもし？」

『どうも。途中で抜けてしまったので気になりまして。その後はどうでしたか？』

「どう…と言われてもな」

ハルヒの機嫌が悪かったからな。その事なんだろうが…。

まあ、解る事は古泉のヤツがこうして電話を掛けてくるということとはアルバイトはもう片付いたと言うことだ。

『最後の方は自壊してくれました。端的に言えばあなたのおかげです』

…つつても不機嫌起こしたのもまたオレが原因だろ？

『あれは…キツカケはあなたというよりも長門さんでしょう。いやはや…しかし、あんな風に饒舌に褒めている長門さんを見るのは初めてですね』

「む……うん。ああ、あれはオレも驚いた」

今思い出しても何か顔が勝手に紅くなる。

『賛辞に顔を赤らめるあなたもなかなかでしたよ？』

…メロンを弾くぞ、明日にこう出合い頭に思いつ切りつ。

『ふふ…冗談です。それにしてもどうやったんです？ あの後には帰るだけでしたし、涼宮さんの機嫌を直す機会はなかったはずですが』

「…それがな」

とりあえずこの世界での女のオレとハルヒとの約束事をしていた事を説明し、普段のその状況と今回での事を古泉に告げた。

『…ふむ。ここは涼宮さんが改変した世界ですからね。今僕たちが持っている記憶との辻褄や接合性が合わないのも仕方がないでしょう』

「だからさつき機嫌が治ったのも初めて礼を言ったからみたいだな」

『本当に嬉しかったんでしょうね』

クスツと向こうで笑う古泉。

しかし結局、アイツは何がしたいんだ？

『…まあ、男でなければ出来ない事したいという願望があったのではないかと僕は思います』

…て、何だそれは？

『今回の事で言えば、男性の立場ならイニシアチブを取りやすい。自然な図に映りますからね。女性の方からだと不自然に映るモノも多々あるでしょうし、今回の事もその内の一つ…涼宮さんはそう考えたかもしれません』

「…………それは何か？ 遠回しに不甲斐ないとか頼りないみたいな風に言われてるように思ってしまうのはオレの被害妄想か？」

『さあ…不甲斐ないかはともかく叩いても響かない旗折り野郎ぐらいには思われているかもしれませんね』

「…………何だそれは？」

何が言いたいのかは知らんが、とりあえず、それ悪口だよな？
というぐらいには流石のオレでも分かるぞ？

『悪口…というよりはある意味、畏敬の念ですかね』

「ほう？」

じゃあ、そんな風には一切聞こえないのはオレが狭量だからか？

『少し乗りすぎましたね。謝ります』

「…まあ、そつちも大変だからな。スマン」

『いえ』

互いに謝ると暫しの沈黙…ああ、別に気不味いワケじゃないぞ？

「…なあ？」

『はい？』

「明日は一緒に登校するか？」

『…』

ははっ。あまりに驚いて絶句してるな、古泉のヤツ。

これはオレも色々と思うところがあつて、でもまあ…あんまり考えてない上での提案ではあるがな。単にこの世界では学校ではあんまり一人にしない方が良くも…と、ふと思ったんだ。

「とりあえず、一緒に登校して別れるのは9組にお前を送ってからだ」

『で、ですが…』

「オレがそうしたい…て理由じゃダメか？」

『…』

向こうで古泉の溜め息が微かに聞こえてくる。この展開なら古泉はまず断らない。

ハルヒの性格を熟知し、そしてオレの性格も分かっているからな。

『…：分かりました。ここで僕が何を言ってもあなたは考えを変えないでしょうし』

ほらな。分かってるじゃねえか。

『その代わり…ある程度の愚痴を聞かされるのは覚悟していて下さいね？』

「お安いもんだ」

『あなたに対しての愚痴もです』

っと、それは右から左に流すさ。

オレの言葉に古泉は微笑混じりに、いいえ、イヤでも聞いてもらいますからね…と意地悪く言っと、そのまま明日の為に今の内に身体を休めると言ってきたのでオレは時間を指定すると別れの挨拶を済ませて携帯を閉じた。

「ま、分からんでもないさ」

オレは思わず独りごちる。

当たり前だ。元の世界ではまずオレが古泉と一緒に登校するなぞ有り得んだろうからな。

向こうもそう思っているだろう。

「…さて」

と、オレは何も考えず無警戒に玄関を開けた瞬間、

「おかえり〜キョンくんっ!」

「げふっ!?!」

弾丸よろしくで突っ込んできた妹がオレの下腹部へとめり込んでくれやがった。

くお・らっ、バカ妹ー…っ

「なーにー?」

弟になっても可愛い妹…兄バカか? …が、にぱぁ〜と見上げて

いる。

「お前も元は女の子だったんだから下っ腹への突撃がイケないことぐらい解ってるだろっ…?」

はい。妹は、そーなの? と暢気な声が返ってきましたよー。

いや、まあ…実際の所は男であるお兄ちゃんには正直サッパリだが、女の子の大事な器官があるのは知っているのだよ。

「いや…お前習ってるだろ」

「ん…??」

駄目だ。頭の上にはなマークが出てる……まあ、変に耳年増にお成りになられるよりかは純粹培養で育って貰えればいいか。清純派に育つか否かはオレの手に掛かっているっ。

「そんな事より…キョンくん早く着替えてー」

妹がせがむように裾を引っ張る。

む? む? 何か知らんが何をそんなに急かせるんだ妹よ?

「男の子の身体教えてー」

一瞬で時が止まった。

何だってっ?!

「あのねー、学校のおトイレで見たけどおうむ?」

皆まで聞かされる前にオレは咄嗟に妹の口を手で軽く押さえ、思

わず天を…玄関に吊された灯りしか見えんが…仰ぐ。

何て言うか。宣言した端っから妹の清純派がピンチです。つか、悩みの種が増えたぞっ!?

「うゅんうーん?」

くっ、神様…つかハルヒっ? 後で借りは返して貰うからな?

「うーっ?」

「とりあえず、」

「?」

「お兄ちゃんが着替え終わるまで待て。話はそれからだ…いいな?」

「ん…うん」

口を押さえられたままで首を縦に振る妹。オレは押さえていた手をゆっくりと離していく。同時にまた良からぬコトを口走りかけたら押さえられるよう注意しながらな。

「じゃあー」

「んん…?」

「早くー」

妹がオレの手を引っ張って家の中へと引き込む。

あーあーもお待て。待てって。靴脱がなきゃ家に上がれんだろうが。

オレは乱雑に靴を脱ぎ捨てると弟な妹の後に率いられて二階へと上がり、自分の部屋と入る。

「はあ…とりあえず待ってる」

「はい」

妹を座布団に座られるとオレは手早く…着慣れても脱ぎ慣れてもいないからなるべく、な…制服を脱いでいき、部屋着に着替えていく。ハンガーに引っ掛けるだけ引っ掛けて片付けるとオレは妹の真正面に胡座を掻いて座る。

「ん？」

何やら妹の様子がへんだが些細な事だな。うん。

「いいか。妹よ？」

「ふ？ う…う、うん」

そして妹が緊張した面持ちでオレが口を開くのを待った。

…

さて、ここで何やら良からぬ期待を持った諸兄諸姉らがいたかもしれない。だが、残念だったな？

これから行うのは説教だコノヤロウ。

「正座っ！」

「っ?!」

急な怒気に当てられてかビクンと姿勢を正して正座になる。

オレがジツと見やると妹はまだ何も言っていないのに早くも追いつめられたかのように目を泳がせて涙も溜まっている。

「あ…あわう…キョンく」

「お兄ちゃん、だ」

オレへの呼び方を訂正させる。別段そのままでも良かったのだが、これから怒られるんだと解らせるにはこれが一番手っ取り早い。

妹がまた小さくビクツと身体を震わせる。

「お、お兄ちゃん…わたし…」

「まあ、お前の好奇心も分からんでもない。急に訳の分からん世界に放り込まれたんだからな」

「…うん」

静かな口調で妹を諭していく。妹の好奇心も分からんでもないんだ。

オレはまだいいさ。経験値の差や質から言っても並みではない…過去や無限ループ、改変された世界。極めつけとしては伊達に二回も殺されかけてないからな。

だが妹は違う。放り込まれたのは今回が初めてだ…好奇心を抑えるというのは酷だろう。

…しかし、だ。

「…何を聞こうとしたのかはこの際問わん…聞かないから。だからお前もあんまり余計な事は覚えんでいい。こんな状態、すぐ元の姿に戻るんだからな」

「……………うん」

妹の泣きそうな顔見ちまったら説教する気なんか失せていた。

…兄失格かもな。

「急に怒鳴ってすまん…お前だって不安なのにな」

「…お兄ちゃん」

「ふふっ…お兄ちゃん、か」

正直、名残惜しいがもう良いぞ？ どっちでも。

オレは妹を安心させるために柔らかく微笑むと頭を軽くポンポンと叩いてやり、そのまま頭を撫でてやる。

「お兄ちゃん、そっち行っていていい？」

うん？ いいぞ？

「……」

オレをお兄ちゃんと呼んだまま妹はもぞもぞと寄つてくるとそのままギョツとオレに抱き付いてくる。

多分、今日1日ずっと気が休まらなかったに違いない。何処までの記憶を持っているかは分からないが殆どの人間が知っているのに知らない本当の他人になってしまったのだから。

「大丈夫か？」

「……うん。こーしてたら大丈夫だよー……」

「……そっか」

ま、気が安らぐまで抱き付いてなさい。

妹は無言で首肯すると一層、ギョツと抱き締めてくる。この状態は母親が下から夕飯の用意が出来たと呼ばれるまで続き、それを合図に離れるかと思いきや今度は手を繋いでこ……とせがんだのでオレは要望に応えて部屋を出た。

……

「ふう…」

オレは風呂から上がってしばらく放ったらかしにしていた髪を改めて乾かしながら思わずため息を吐いた。

うん？ 溜め息の理由？ それはそっちの想像にお任せた……まあ、ヒントは言っておくか。

そうだなあ…妹は寝付くまでずっとベツタリだったのとは後は時系列順で行くか。えー、妹に自分の身体、空っぽになりかけたオレの理性にまた妹…とだけ言っておこうかな。

「ああ…つつつかれた…」

わしゃわしゃと雑に髪を拭きながらベッドに座り込むとオレはチラッと時計の時刻を確認する。

「23時過ぎか……どうすっかな」

オレが時間を気にする理由。

それは帰り道で長門と別れた事に気付かなかった件で、それを謝るための電話をこの時間にしても良いものやらどうするかで迷っているって訳なんだが…

「つか…早い方がいいよな」

そう決心したオレは携帯を手にとるとメモリーを開いて長門の携

帯に掛けた。

「…寝てっ」

「…なに？」

ぬおっ?! 早いなっ!?

ワンコールの途中で繋がったので軽く驚いた。

「…何かあった？」

「え? あ…いや、な」

「…」

「その…ハルヒのヤツが言ってたんだが、別れ際オレをずっと呼んでたのに気付かなかったって…スマン。考え事してて気付かなかった」

「…気にしてない」

「…ふう」

言うと思ったよ。でもな、何度も呼ばれてたのに無視しちゃったってのは頂けんだろ。

「…あなたはあの時、この状況を自分なりに整理していたはず。この一日の中で落ち着いて情報整理を行うにはあの時間しか無かった。それに気付けなかったのはわたしのミス」

「いや…まあ、確かに整理はしてたがそこまでの程じゃあない。つ

か、自分がやったってタカが知れてる」

『でも』

「？」

『まずは自分で出来る事をあなたは探す。それは良いこと』

「…ひ、人を買収し過ぎるのもどうかと思うぞ？　長門？」

…オレはそこまで出来た人間じゃない。

かと言って、あの時ハルヒの事を考えてて頭がパンクしかけたなんて口が裂けても言えない。

…ああ。そんなだから結局、オレは長門や古泉に何もかもを頼っちまうんだ。

「事実、そうなる」

『…』

「…情けな」

『わたしは』

「…？　なが」

『わたしはあなたに何もかもを頼られても全く苦にはならない』

「長門…」

『…むしろ、わたしは』

「！　痛…あ？」

長門が何か続けようとした時、オレはチクツとした痛みが頭に走ったのを受けてポロツとそう呟いた瞬間、次に襲いかかってきた激痛に意識が一瞬で吹っ飛びそうになった。

「い…?! いづくつつ…?!?!?!?!」

咄嗟に枕に顔を埋めたのが功を奏したのか絶叫を家中に響かせずに済んだ。

『…記憶を掘り起こした反動が来た』

長門の声が携帯から聞こえてくる。て、そっちに解るように書いただけであって、言っとくが実際にはオレはそれどころじゃねえっ。

「つつ…つつ…」

これが部室で言ってた反動っ？ 反動かつ!? こんなにかっ! どころがかなりだっ脳に直接あの朝倉がナイフ突き立ててるみてえじゃねえかあっ!!

『…大じょ』

長門の声が遠のいた。

理由は簡単だ。もがいた拍子に携帯がどっかに飛んでっちまったんだから。

「つつ…つつ…」

『……、……っ?』

あまりの激痛にオレの意識はオンオフが16ビートで行き来、繰り返している。暫くの間、長門が何かを言っていたような気がしたが、たった数秒で完全に意識が白濁としてしまったオレは全く解らなかった。

「…っ…っ…っ」

実際どれくらいの時間が経ったんだろうな。

あまりの激痛だったせいか出来の悪い脳は絶えず凶悪な痛み of 信号をただただ伝えているのみになっていた。まあ、痛覚がバ力になったせいか痛みを認識しなくなっていたのは幸いだな。

「…か…あ……う…か」

からだは全く動かない。

痛みを伝えるだけしか出来なくなった脳では身体も動かせないか。絶えずピク…ピク…と指なり何なりが動き続けてはいるが、これは単に激痛は認識出来ないが痛みは走っているのです。その度に身体が痙攣しているだけ。

ついでに叫び過ぎて声帯が動かず声も枯れたと来た…部屋に誰も来ないところを見ると部屋からオレの叫び声は漏れてないのだろう。

「く…お」

…しかし、悪態もつけんか。あ…走馬灯なんてもんが流れちゃいるが記憶はぐちゃぐちゃだな。

視界が部屋の明かりで埋まる…いつから仰向けになっていたのかも解らない…白濁した意識も相俟って白く染まっていき、そして、暗幕が降りる。

…うわ…オレ、こんなんで死

「…もう大丈夫」

情けなく思った時、それを誰かが遮った。

このこえ…ながとか？

「…ごめんなさい。有機体にこんな深刻なダメージを起こすなんて全くの情報不足……迂闊だった」

はは…。ながとでもこんなミスすんだな。じゃあ、いま暗いのはながとの手のせいかな。

「…そう」

そっか。ながとが来たならもうあんしんだ。
正直、オレの中は安堵感でいっぱいだった。

「…今からナノマシンをあなたに注入し、脳幹中枢・神経伝達系を中心に治療する」

ああ。まかせるよ。

「…ナノマシンを注入する」

長門がそう呟くとオレの身体はスツと軽くなったような気がし、そのせいかバカみたいに痛みしか伝えなかった脳が眠るよう指示し始め、疲れきった意識が徐々に遠退いていく。

「…ごめんなさい」

意識が遠退く、そんな中でも長門の謝る声はつきりと聞こえた。
…だから謝らなつて。安易に記憶が欲しいなんて言ったオレが迂闊だったんだ…な？

「…」

あー…悪い。限界だ。少し寝るな。

「…そう」

おやすみ。長門。

「…おやすみなさい…」

そうしてオレは長門に見守られながら眠りに就いた。

…本当…めん…さ…

…いまいち聞き取れなかったが、また謝ったみたいだな。仕方ない、こっちが折れとくか。

理由 二日目の朝（前書き）

第7部分ですよーっ。

頑張ったよ……間違っ
て消しちゃった幻の第7部分も併せて約2
0000文字以上分……あーうー、前
のと比べたら出来が70パー
セント……次からは間違っ
て消さないようにしないとっ（ぐっ

でははっ、どぞっ

理由 二日目の朝

ふと目を覚ます。

寝ぼけた視界に見慣れた天井が映る。

「
…」

オレは寝返りを打つと視線だけで部屋の中を一通り見回してみた。いつもと変わらない部屋。締め切られたカーテンの隙間から漏れた朝陽が床を照らしている。

…ああ。もう朝か。

「
…ん？」

ここでふと感じる違和感。

そう、オレは被った筈のない布団をしっかりと被っているのだ。

「
…オレ、寝てたのか？」

いや、あの状況じゃあ有り得ん。

事が事だけに記憶はあやふやではあるが、昨夜の出来事を出来る限り思い出してみる。

…オレは妹を寝かしつけた後、確か長門に電話をしたはず…って、あ。

「その最中に頭痛に襲われたんだ」

部室で長門が言っていた頭痛…それは突然だった。

…いや、オレとしてはあの激痛をそんな安易で使い古されたモノでカテゴライズしたくはないんだが、如何せん頭痛は頭痛なんだよなあ。

「…ん？」

その激痛に苛まれていた事を思い出す内にその場に長門が来てくれた事を思い出した。

オレはゆっくりと身を起こして起き上がり、部屋を見回してみる。が、此処には自分以外に誰もいない。

…だよな。当たり前じゃねえか。ん？ 何でだって？ いや、だって若い男女が一つ屋根の下の同じ部屋なんかで一緒に居たら、何かの拍子に間違ひなんかあっちゃ…

「…って、長門がこの世界の朝倉みたいなことするか……」

すまん。長門。

とりあえずオレはアホな考えにセルフツッコミをしておく。

「…しかし」

オレは自分の状態を見下ろして確認していく。

今の姿は風呂から上がった時の部屋着ではなくちゃんとしたパジャマを着ている。手で頭に触れてみたが、髪も適当に拭いでボサついたりままだったのがまるで櫛で梳いたかのように綺麗に整っている。完全な女の子の就寝状態…アフターケアも万全といった感じだ。

「…また、長門に迷惑かけちゃったのか、オレは……」

知らず知らずの内に俯き、口から不甲斐なさへの呟きと情けなさから溜息が出る。

…オレが守るとか言ってて結局……くそ。

「……………ん？」

と、そんな独りごちているオレの耳がこの部屋のドアの開閉音を拾った。

誰か来たのかは何となく分かっていたが、一応は視線を向けると予想通りドアに佇む妹の姿があった。

…ちゃんとノックはしなさい。

「…だって、起こしたくなかったんだもん。でも、今日は早起きだね」

「なんか目が覚めちゃってな……？ どうした？」

喋る内に妹は何やらベッドの縁まで来ると、いきなりオレの布団の中へと潜り込んでくる。

しばらく潜り込んだ所でもぞもぞとしたかと思えば、枕元まで移動して顔を出してきた。

「…人の布団の中で二度寝か、妹よ？」

「んーん……寝ないよ」

妹はそう返事をしながらもオレにすり寄ると身体を丸めて赤ん坊のように手足を縮こませる。

そんな姿を見つめているとふと昔の事を思い出してしまい自然と顔が少し綻ぶ。

「…お前が布団に入って来んのって久しぶりじゃないか？」

「うん…？ んー…」

オレの問い掛けに妹は顔を出してこちらを見上げ、考え込む仕草をする。

…記憶が確かなら、最後に潜り込んできたのは二年前か？

「うん…それぐらいかも。でもね、男の子の時のわたしはもつと前からなんだよ？」

ん？ 誤差があるのか？

どれくらいの誤差かは知らないが、どうやらこつちの世界では男の子の分だけしっかりしてるようだ。

「……今、何時だ」

時計を手にとって時間を見る…針は6時を指す前で二度寝をするにも中途半端だ。

「二度寝するの？」

…いや、めんどいな。

オレは肩肘を着いて寝っ転がり…それを見てとった妹は枕元で何やらニコニコしている…オレ達はそのまま目覚ましが鳴るまでのしばらくの間、お互いの昔の話について話した。

ま、年季に差があるので主に妹の昔話ばかりだったが、妹は嬉しがったので話は意外に弾み、結果として目覚ましの音が鳴るまで時間を忘れて話した。

「つと」

「んしょ」

オレが目覚ましを止め、それを合図に起き上がると妹も同時に布団から抜け出し、何やら軽い足取りでひょこひょこ部屋を後にした。

「二度寝しちゃダメだよ」

途中振り返って序でとばかりに余計な釘を刺しながらな。

「するかつての」

…どうやら妹の弱気モードは昨夜の寝付いた時点で終わりらしい。兄としては頼られて悪い気はしなかった。が、正直、あんな元気のない妹の姿はもう見たくないな。似合わねえし。

だからだろうか、さっき振り返った時に見せた明るい笑顔は心底、安堵させた。

「…起きるか」

オレは軽く伸びをし、ベッドから降りる。

女になっちまった以外には変わらない、この世界での二日目…いつも通りの朝だ。

…

テーブルに着いたオレの視界にまず入ったのは妹が持ったトーストだった。

恐らくは元はこんがりとキレイな焼き目の付いたモノだったのだろっ…それを何やら妹はペトペトと山盛りにジャムを乗っけまくっている。

…妹よ。まさかとは思うがそのジャム山盛りのトーストをオレの皿に置くつもりか？

「うん？ んーん。これわたしのー」

「だよな…そうだよな」

心の底から安堵したのは言うまでもあるまい。

しかし、だ。いつもはこうものんびりと朝を迎える事が皆無であり、周りの状況などを気にする余裕などなかったので気付かんかったが、妹は毎朝いつもあんなにごつてりとジャムを塗りたくっているんだろっか？

読者に解るように説明するとだな…見た目からじゃ、パン食ってるのかジャム食ってるのか分からん程の……うっ、イカンっ。見るだけで胸焼けしてきたっ。

「？ どーしたの〜？」

「うっうん？ い、いや…別に」

「ふーん？ 変なキョンクーン」

言って妹はパンにかじりつく。

ふっ…どうやらお兄ちゃんと呼ぶのも昨夜で終いらしいな。

あまりに久しかったので寂しいかぎりだが耐えろよ、オレ？ そしてオレの胃袋よつ。

「キョンくんの焼けたよ」

トースターのパンが焼けたのを知らせる音と同時にトーストを取り出す妹。

だが、妹のパンを視界から外したかったオレは音を聞きながらもテーブルに背を向けるとそのまま冷蔵庫へと進み、中から牛乳と妹用のジュースを取り出していく。

「すまん。皿に置いてくれ」

「はい」

つと、言つとくがお前のようにせんでもいいからな？

背を向けたまま妹に釘を刺しておく。

ん？ 何故かって？ それは…

「ぶ」

この妹の抗議の声が答えだ。

本当ならオレとしても今の妹にこういう事は言いたくはないんだが、せつかくのこんがりときれいに焼けているであろうオレのトーストが、妹のみたくああも変わり果てた無惨な姿を目の当たりにするのは避けない。

「拗ねんなって。今日はプレーンで食いたいんだよ」

「む」

オレは頬を膨らす妹の前にジュースを置き、椅子に腰を下ろしてコップに牛乳を注ぐ。

「うー」

横に座る妹が抗議の声を上げているのを聞きながら、オレは何も付いていないトーストを一口かじり、ゆっくりと咀嚼して胃へと送っていく。

「…」

「ん？」

と、抗議の声が途絶えているのに気付いて妹の横顔を見やると、そこにはオレがとくに見慣れてしまった、まるで誰かさんを彷彿とさせるアヒル口になった妹がトーストをかじっていた……っと。

「こら。あまり雑に食うと服に付くぞ」

「うん…？」

オレは妹の口の横に付いていたジャムを指で掬うとそのまま口に含む。

…む。こいつめ、幾つかジャム混ぜてやがる。

「…ありがとー」

妹は一瞬呆けたかと思うとすぐに明るい笑顔で礼を言って上機嫌にかじるのを再開する。

兄としては食べ物で遊ぶなと注意したかったんだが、妹が見せた笑顔でそんな気が一気に失せた

…甘いな、オレは。

「雑に食うなよ」

「…はい」

と、また何やら嬉しそうに返事をした妹。

二回も注意した成果か、一応は落ちたり付いたりしないよう注意しながら食べ始めたのでオレも自分のトーストに集中することにした…のだが、

「…ふう」

…一向に減らねえな。

昨日の昼飯の時にも思ったんだが、女の口というのはもっとこう

…開かんモノかねえ？

オレがパンを相手に要らん悪戦苦闘をする中、妹はいつの間にか食べ終わっていた…身体が男だから食うのも早いのか？そして食べ終わったかと思えば席を発って二階へと上がり、すぐに降りてきたと思えばまた隣に座り直し、ジュースを注いでクピクピと飲んでいる。

…なあ、早さからしておもったんだが、さっき二階に上がったのは意味があるのか？

「んう？ ランドセル取りに行っただけだよ？」

「…そうなのか？」

オレの問いに妹はそうだよ？　と言いながら下を見る。オレも倣って視線をやると椅子の下には確かに黒のランドセルがあった。

「ははっ…まだランドセルの方がデカいなあ」

「むうー」

ははっ。拗ねんなって。

オレの指摘に妹がまた頬を膨らませるのを見て軽く微笑み…って、からかってる場合じゃねえや。

何の気なしに時計を見て約束の時間が差し迫っていることに気付いたオレは頭を切り替え、目の前のパンの形を減らすのに集中し、牛乳と交互に口に含ませて何とか減らしていく。

「はい」

しかも、いつの間にか機嫌を直した妹が空になったコップに牛乳を注ぎ直す協力もしてくれたのだが、それでも食べ終わったのは古泉と約束をした時間の数分前。

「うお。やべっ」

オレは急いで支度をし、何故か妹がわたしも手伝う…と言ったので妹の手も借りっ…痛いったい、髪をそんなにギュッて引っ張るなっ。抜けるっ。

「キヨンくんが動くから」

…ああもう。じゃあ、ジッとしてっから。

と…まあ、そんなこんなで妹お手製ポニーテールを揺らし、何と

か玄関へと続く廊下に出たのは来訪を告げるチャイムが鳴ったの
ほぼ同時だった。

…何とか間に合ったな

「誰が来たの？」

準備が終わった後も何故かオレの裾にしがみついている妹が誰が
来たのかと聞いてくる。

…誰って……そだな。

「気になるなら開けてみ？」

「うん？」

妹がはてなマークを浮かべながら裾を放すとトテトテと玄関へと
向かい、ドアをソツと開くとそこには…

「おはようございます」

と、にこやかに微笑む美少女が一人…美少女…本当にコイツの外
面は良いなあ。

妹は、ほえ〜？ と素っ頓狂な声を上げたかと思ったら…

「…キョンくんの浮気モノ」

「いや、古泉だし」

…つか、何だよ浮気モノって？ 人聞きの悪いことを言うんじゃない
ありません。

と、注意するが妹は、ええ！？ 古泉くんっ？ と驚きの声を

上げているのでオレの注意なんで全く聞いてやしない…ま、驚くの無理な

「…やっぱり、変ですか？」

「……………」

なあ、昨日も思ったんだが自分の容姿を気にし過ぎてないか？

「そう…ですか？　僕はそういうつもりはないんですけど…」

古泉はそうはぐらかすと誤魔化すように笑うのだが、口端に自嘲気味なものが浮かんでいるのを逃さなかった。

「ねえー何の話？　ねえ。なになあに？」

すまん、妹よ。大人の話だ。

「…ぶー」

「…拗ねんなって。ほら」

頬を膨らませる妹にオレはその場でしゃがみ込むと髪を整えてやり、後ろ側で纏めてやる。

「…今朝はやけにお優しいですね」

「…まあ、な」

古泉の茶化してきたが、ただ素直に応えた。

オレ達のやりとりで目の前の妹の表情は何やらくすぐったそうな表情だったが、オレは敢えて無視しつつ妹にゴム留めを出させると首の後ろで纏めておいた髪を縛ってやる。

…ふむ、バランスも良し。キレイに出来たぞ。

「……」

言葉の代わりに満面の笑顔でお礼を返す妹。

オレは目の前の笑顔のお返しとして優しく頭を撫でていると古泉の控え目な笑い声が入る。

…何か笑う程ヘンか？

「いえ。こつも優しく妹さんに接しているあなたを見るのは初めてのような気がしまして……」

…いつもはしてないみたいに聞こえるぞ？

「そうではありません。ただ、いつもは優しい眼差しだけで行動にまでは移さなかったので少々驚いてしまったんです」

「…」

えー、古泉のヤロウの言葉に触発されてか妹のヤツがいきなりオレの首にしがみついてきました。

古泉…お前のせいで身動きが取れんぞ。どうしてくれんだよ？

「…まだ多少の時間はありますから、妹さんのお気が済むまでもう少しくうしてはどうです？」

「……いや、だから焚き付けんなってオレの首が締まる」

しかと首にしがみついている妹の腕に力が入っていくのを感じつつも古泉に対しては軽口を叩いておく。

…しかし、弱気モードは昨夜で終わっただんじやなかったのかよ。

「あと…少しだけ…」

そっか。

妹の後ろ頭をポンポンと軽く叩き、軽く撫でてやる。オレは古泉の方にチラッと視線をやるとその表情が少しばかり曇っている。

…何か知ってんな。

「さて、お兄ちゃん学校行くな」

「……うん」

少し渋ったが妹はゆっくりと首に回した腕を外してオレから離れる。

その表情には名残惜しさが一杯だ

「……………明日は土曜日だったな」

「? ……うん」

立ち上がったオレの呟きに妹が見上げて首を傾げている。

今のオレは兄バカレベルが最大値かもしれん。じやなきやこんな事、元の世界じゃまず言わねえからな。

「帰ったら気が済むまで一緒に遊んでやつから」

「キヨンくん」

「だからそんな寂しそうな顔すんな似合んねーから」

「…うん」

いつものとまでは行かなかったが安心して学校へ行ける程には明るい表情になった妹。

これで今日一日中持つてくれるかな…

「じゃあ、行ってくるな」

「行つてらっしゃい」

オレ達二人は妹の元気な… だとしてもアレは7分目ぐらいだがな… 声を背に玄関を後にした。

しばし無言で歩き、家から充分に離れた後でオレは古泉に妹の事を訊くことにした。

理由としては妹が心配なのと目が届かないことによる不安からだ。だから今までは避けていた、敢えて訊かなかった事… ”機関” は妹がいる小学校にも紛れ込んでいるのかまで踏み切った。

一応は明言を避けたものの状況を把握しているということ事は”そう” なのだろう。

「お気を悪くしたのなら謝ります。ですが」
「解ってるって」

最初の頃ならともかく、必要だったのはもう理解してっから。古泉が言うには妹は少し孤立… イジメとかそう言ったモノではな

いと事だが…しているらしい。だが、妹が一番に堪えたのが親友の吉村美代子…この世界では吉村ミヨトらしい…ことミヨキチとの仲がギクシャクした事だという。

「だから、か」

妹が何故に弱気モードだったのか…これで理由に合点がいった。

「
…」

聞きたいことが聞けた後のオレには沈黙しかなかった。古泉も多少の気不味さもあって沈黙し、少し俯き加減で隣を歩いている。

…もう、すぐそこにあのナチュラル・ハイキングコースが差し掛かってきているというのに、この重い空気と一緒にあの坂に登らにやあイカンのだろうか？

と、思っていた所にコンビニの看板が視界に入る。

…用もあるし、これで話切り替えるか。

「……なあ、コンビニ寄ってっていいか？」

「は？ …何か入り用でも？」

「昼飯」

ここで古泉が怪訝な顔になった。

ま、仕方ないか。確かに本来ならオレはお袋が作った弁当持参で登校するはずなんだが、この世界ではコンビニか或いは食堂の購買で済まさないやらなららしい。

「なんならお前もここで買つか？」

「は…僕もですか？」

「ああ…あ、お前は弁当持ちだったか？」

「い、いえ…僕も食堂や購買で済みます。では、一緒に買いましょうか？」

古泉も了承したのでオレ達二人は連れ立ってそのコンビニに入っ
た。

オレはすぐさま惣菜パンの棚へと向かうと値段と量の兼ね合いを
計算しながらジツと見つめ、古泉のヤツはおにぎりの棚へ言ったか
と思えば早々に三つを手元に収めるとオレの隣へと並んだ。

「何やら真剣に選んでるようですがどうかしましたか？」

「何するか迷ってたんだよ」

とりあえず幾つかの候補は挙がっている。

先ずは焼きそばパン…値段は160円と高めだが量がある。昼か
らの活力を得るためにはこのポリウムは捨てがたい。

何より卵で包んでオムそばというのが心惹かれる。が、欠点は青海
苔がどうしても歯に付いちまう事だな。

「…他は何と悩んでおいでですか？」

呆れ口調で訊いてくるがオレは気にしなかった。

ふむ、次の候補はツナサンドと卵サンド…値段は2つで340円。
値段はかさばっちゃうが昼からの活力を得るためには…

「チヨイスした理由は？」

む？ そりゃあ好きな具だからだが？ 欠点としては齒に付くものはないが割高感は否めないというところだ。

「あとはだな、」

「はあ。その集中力を勉強にこそ向けて欲しいですね……あなたの成績も涼宮さんの機嫌の鍵を握る一つなのですから」

…何でオレの成績がハルヒに関係しているのかは知らんが、そんな事はオレに言われても、な。

文句があるなら教壇の上から教師が発している誘眠効果のある呪文や黒板に描かれた魔法陣を何とかしてくれ。

と、ここで溜め息を吐いていた古泉が妙案を思い付いたとばかりににこやかな微笑みを称えながら提案してくる。

「…では、こういうのはどうでしょうか？ 低成績を理由に涼宮さんにご教授をお願いしてみるというのは。これなら一石二鳥です」

…何が一石二鳥か知らんがそれこそ勘弁だ。

アイツに頼んでみる、某国の政治犯収容所の拷問のような苛烈極まりない指導が待ってるに決まってる。

オレは勢い余って思いっきりしごかれている光景を思い浮かべてしまい身震いした。

「おや。名案だと思ったんですが」

「何が名案か」

”めい”は”めい”でも迷惑の”迷”が付いた迷案ってヤツだぞ。全く。

「さっさと出るぞっ」

「あ、待って下さいよ」

オレはブスツとすると160円のオムそばパンと100円のパッ
クジュースを引つ掴んでレジの方へと向かうと古泉も慌てて後につ
いて来る。

二つ開いたレジには各々既に何人か列んでおり、サラリーマンや
朝練なのかジャージ姿の北高生徒とかが居る。

「パン一つでいいんですか？」

「ん？ …それを言ったらお前のおにぎり三つってのは多くないか
？」

古泉が抱えているおにぎりを見やる。

ペットボトルのお茶に鮭、昆布、明太子と三種類のおにぎり…育
ち盛りの男子の時では腹八分目というぐらいだが、育ち盛りとは言
え女子の食べる量で考えるなら少し多すぎると思うぞ。

「……実のところ僕も多少は多いかとは思ってるんですけどね」

「？ 思ってるんなら…」

「あなたはお昼はどうなさるおつもりで？」

「…は？」

唐突な質問にオレは反応出来ず、訝しみながら古泉を見やる。

「いえ……お昼も一緒にいただけなのか、と」

「それは考えてなかったな」

…いや、嘘かな。

この世界の谷口や国木田には悪いとは思ったが、そういう選択肢があるのは確かなんだよな。

理由は簡単だ……放っておけない。この世界での古泉はどこか危うい。学校という空間の中では。

「…まあ、別に断る理由も無いな」

「なら、」

ここで古泉の笑みが今までのそれとは違う、何か暖かいモノを含みました、そんな嬉しさからの微笑みを浮かべる。

「食べきれない分があってもあなたに差し上げることが出来ますね」
「っ?」

それがまさかの朝比奈さん級エンジェリックススマイル…まさか古泉相手にこの名称を使うハメになるとはっ…だった。

それを不意打ちで食らってしまったオレはしどろもどろになり、危つく喉元まで出かけたこいつへの褒め言葉を必死に飲み込んだ。

落ち着けオレっ。もし、ここで褒め言葉なんぞを古泉に使ったら何か失って何かが芽生えっぞっ!?

「う…お」

「次、順番ですよ」

言葉に詰まるオレに古泉が前を促す。

「ぬっ？ …… っぐ」

… た、確かに。

前を見るとカウンターに陣取っている店員が早くしゃがめ的な視線をこつちに向け、バーコードリーダーを持って待ちかまえていらつしやる。

序でに古泉の後ろにいつの間にか待っていた客も咳払いで促していた。

オレはもう火が出そうなほどに顔を真っ赤にしながらレジに抱えたものを置く。

「１６０円が一点…」

恥ずかしさからまともに前を向けれず俯いたまま、店員の値段確認を聞くと財布から丁度の硬貨を叩き付けて足早にコンビニの自動ドアをくぐって外に出た。

オレはその場で辺りを見回し、何処ぞに人一人が入れそうな穴がないか必死で探す。

… くそっ 何処にも無いぞっ！

「どうかしましたか？」

「ぬおうつ」

背後から尋ねられて思いつ切りビビってしまったオレは間合いを開けてから後ろを振り返る。

い、いきなり声を掛けるな古泉っ。ビックリすつだろうがっ！

「それは……あなたが出入り口で立ち止まっていたから。普通にお客さん達の邪魔になつてましたよ？」

言つてオレの前で立ち止まる古泉の表情は呆れている風に見える。
……いや、呆れてるな。

「くすっ……」

かと思えば急にイタズラっぽく笑つ……あまりにも見たことがない古泉を今、オレは見ている。

「では、行きましょうか」

そんな呆然としていたオレを後目に古泉は横に並ぶとニコツと笑いかけ、肩をポンツと軽く叩いた。

慌てて追うオレの前に行く古泉の後ろ姿に風にそよぐ髪……あ、シヤンプーの良い香りがする。

「ところで、お昼休みは何処で食べましょうか？」

「へ？ え……と……屋上、か？」

ベタですねー……とか古泉に言われたりしながら学校の登山道に差し掛かったその時、

「いようっ、ご兩人っ！ 今朝は一緒に登校かいっ」

「はい？」

と、突然割って入ってきた声にオレ達二人して間の抜けた声を上げる。

オレと古泉も今のは一体誰だろうか？ と、互いに顔を見合わせようとした時にオレ達の間から見知らぬ顔がにゅっと出てきたかと思えば、

「お兄さんも仲間に入れてほしいによろっ」

「っわ」

「ひゃっ」

首に腕を回されたかと思えばそのまま抱き寄せられる。相手に上背があるせいか少し爪先立ちにならないとキツイ。

…あれ？

「いつやあゝっ、二人してこおんなにめがっさキュートになっちゃってまあっ」

「その口調は…」

「えっ、っ、鶴屋さん！？」

「当たたりっっ。男の子の姿になっちゃったけどっ皆が知ってるご存知の通りっ鶴屋お姉さんっさあゝ」

「え…ええゝ…？」

元気にそう自己紹介した男子生徒が鶴屋と名乗ってオレは愕然とした。

だってそうだろう？ 元の世界で見た鶴屋さんと言えばあの長くて綺麗だった髪だ。それが今、オレの目の前にある髪型はまるで某海賊漫画に出ている三刀流の兄貴みたいに短くなってしまっている。

「おやおやゝキョンくん？ どうしたによるゝ？」

何も言えず鳩が豆鉄砲を食らったような状態のオレに鶴屋さんがニコニコと訊いてくる。

いや、どうしたも何も…

「鶴屋さんの髪、凄く綺麗だったのに短くなって……ショックを受けるなと言っほうが無理な話ですよ？」

「おりよりよ…いやつめがつさ嬉しい事を言ってくれるねキョンくんはっ！ でも、ハルにゃんやユキんこが居るときに言っちゃダメによるよっ？ 寂しがるからねえ」

「は、はあ…？」

何故そこでハルヒ達が出てくるのかとオレが訝しんでいると鶴屋さんの向こうで古泉が何やら肩を竦めている。

ん？ 何だよ、古泉？ あなたって人は…て何だよ？

「…いえ別ひああっ！？」

「っ？ な、古泉何ヘンな声っひやうっ？」

ヘンな嬌声を上げた古泉にオレが何事かと訊こうとした瞬間、胸元から来た刺激に思わず古泉と同じような声を上げてしまった。

「な、何だ今のって…うえっ！？」

慌てて胸元を見ると鶴屋さんの腕から伸びている手が何故か制服の中につて…何にしてんですか鶴屋さんっ？！

「へ？ いやあ、だつてさつ。こんなのがつさ滅多に無い機会に
よろよ？ 思う存分堪能しとかないとねっ」

っ…うつ。

妙に手慣れた手つきで侵入してくる鶴屋さんの手…まさか、この
人までハルヒみたく朝比奈さんにいつもこんな事をしてるのだろう
か…うつむ…んっ！？

「うむむ…ん…キョンくんのは引ッ込んでる所は引ッ込んでるけ
ど…ポリュームがイマイチによるね」

「う…っ」

鶴屋さんにそう言われた瞬間、何故か胸がキュツと締め付けられ
るような感覚に襲われる。

…な、何だ？ くそ…またオレの意識に関係なしに…っ。

「その点、古泉くんはスツゴいによるね…いやはや、お姉いさ
んは足元に及ばずみつくるに届かんばかりのめがっさナイスバディ
だねえ」

「っ、あ、っ…鶴屋、さんっ…ま、待つて」

古泉をこねくり回す方に専念し始めた鶴屋さんの後頭部越しに古
泉の朝比奈級バスト、が…うつ…お…待て古泉っその顔は”禁則事
項”な感じでかなりヤバイぞっ！？

「ほい ありがとねご兩人っ」

「へあ？」

「あわっ」

と、唐突に鶴屋さんがオレ達を解放して離れる。

急に支えを失ってもオレは何とか立っていられたが、古泉は脱力しきっていてその場にへたり込んでしまった。

…だ、大丈夫か古泉？

「な、何とか……あの…手を貸して貰えると助かるのですが？」

お、おう。

縋る手にオレは手を差し伸べて掴むとゆっくりと立ち上がらせる。

「すみま…っ」

「っとお！」

立ち上がり掛けた所で古泉が急にバランスを失って倒れそうになったので慌てて支える。

鶴屋さんの攻撃が効きまくったのか息がかなり荒い……くっお、このっ首にはあはあするんじゃないやねえっ。

「すみません。本当に…」

「ああもう…しばらく肩貸すからとりあえず、顔はこっち向けんなよっ？」

「んふふふ」 ホント仲がいいにしろ」

「「…」」

何やらニマニマと笑ってらっしゃる鶴屋さんと先の行為で完全萎縮中のオレ達。

オレはとりあえずビビりながらも、

「えと……何でしょうか鶴屋さん？」

最初に訊きそびれた用件を尋ねることが出来た……まあ、変に身の危険を感じちまってオレは古泉と身を寄せ合って震えてるけどな。

「えと……恐がなくてもいいによろよ？」

「「なら、さっきみたいな事はしないで下さい」「」

あ、ハモった。

珍しい事もあるもんだ。

無知 鈍感の極み（前書き）

第8部分来ましたっ！

ペースが狂った…本来ならここで朝比奈さんが出てくる筈だったのに（泣

…次は間違えて削除しないように気を付けないと。

ではではっ第8部分です！

無知 鈍感の極み

「んっ」

怯えるオレ達に鶴屋さんは腕を組んで思案していたが、しばらくして後ろ頭をガシガシと掻きながらニカツと笑う。

「2対1は分が悪いっ。ここはお姉いさんがバツキバキに折れときますかぁっ」

悪びれることもなく、そう高らかに宣言すると鶴屋さんはいきなりグツと顔をこっちに近付けてきた。

…こ、今度は何ですか？

「いやいや…もう、おイタはしないっさ。でさでっさー？」

表情は愉しげ。だが、急に声量を落としてきたのでオレ達も鶴屋さんの顔に近付ける。

「みいくん なっこんな なっちゃったのって、やっぱりハルにゃんが原因？」

「っ」

「それは…」

鶴屋さん、ド直球です。

…確か鶴屋家は”機関”のスポンサーの一つって言ってたな。
その愛娘を渦中に巻き込んだって意味でか、古泉の表情にやんわりと苦渋が広がっている。

「……出来れば鶴屋家は我々”機関”とは別に一線を引いた立ち位置に居て欲しかったのですがね……次期当主ご自身が体験してしまつた以上は仕方ありませんね」

古泉は、ふう…と一息着くと苦笑いを浮かべる。

「お察しの通りです」

「まっ、心中は察するによる？ でもさあ、こおくんがめがつさ楽しい事ならもつと早くに飛び込みたかつたつさ！」

鶴屋さんも最初は苦笑いで答えたが、最後の方は面白くて仕方ないとはばかりの笑みになっていた。

…鶴屋さん、空気詠んで発言を。

古泉のヤツが今度は思いつきり溜め息吐いちゃってますから。

「ま、仕方無い仕方無いっ。けど、安心するっさ。巻き込まれたからって手を引いたりだの上に訴えたりはしないっし、逆にあちしが当主になった暁にはめがつさ支援するによるっ　これも含めてハルにゃんはめがつさ魅力的だからねっ」

言うつと鶴屋さんは太陽のような…ハルヒが真夏の照りつける太陽ならこのお方の笑顔は春の温もりを与える太陽だ…笑顔をおレ達に向けた。

古泉は”手を引く”や”上に訴える”だの所で過敏にビクビクしていたが…この際見なかった事にしておこう。あまりにも不憫だ。

しかし、そんな笑顔を見せられるとこっちは何も言えない。でも、申し訳ない気持ちで一杯だ。

「すみません。あの馬鹿のせいで鶴屋さんに迷惑が掛かってしまっ
て」

口から零れていた。

鶴屋さんは気にしない気にしないとこちらを立ててくれ、古泉もあなたはあなたが思っている以上にこちらを助けてくれます、と曰った。

…いや、気にしない訳にはイカンだろ。

古泉がそう言ってくれるのは有り難いが、な。

「はいはいっはぁーい！ ジメーッとした話はお終いつ」

と、突然、鶴屋さんが手を軽く叩き、話を早々に打ち切る。

オレ達から滲み出る湿っぽさを嫌った…そんなのを好き好む奇特なモノ好きなど見てみたいがな…のдарう。

…こういうキツパリとした思いつきの良さは性別が変わっても変わらないな、この人は。

「ところで、さっ？ ちょーっようお願い…ってより、訊きたいコトがあるんだけど…良いによる？」

「…お願い、ですか？」

「僕達が出来る事で…でしょうか？」

改めてのお願い事にオレと古泉はおずおずと尋ねる。

いや、別段、不穏なモノを感じた訳ではないんだが先の出来事を考えると、どうも身体が竦んでしまっ…一応は逃げの態勢は取った

方が良いだろうか？

「いやっ、そんなめがっさ逃げ腰になる必要なんかないないっ」

オレ達の表情から何かを読み取ったのか、鶴屋さんが微苦笑を向けてくる。

とは言え、反省が籠められたそんな表情も数瞬ですぐに好奇心を抑えられない興味津々な表情になられたが。

「でっさ、みつくるもあちしも男の子の身体になったコトないから、あんなのめがっさ初めてだったんだけど…」

ここで何故か一旦区切る鶴屋さん。

…一体何を訊きたいのだろうか？ と、心持ちドキドキしているとその口が…

「男の子のアレってあんなにめがっさ、大っきくなるものなの？」

「「…」」

「…」

「「は？」」

オレ達二人の時を止めた…つか、またハモったな。

「「…」」

「…」

鳥の囀り…それは雀だったりカラスだったり…や、自動車のエンジン音…セダンだったりスポーツカーか？…に、傍らを通り過ぎて行く自分達とは異なる制服を着た生徒たち…あれは光陽園学院か？の語らいやら談笑と言った朝の喧噪は滞りなく時を刻んでいる。とりあえず、この時空凍結は局地的でオレ達二人…鶴屋さんも止まってるな？…にしか現れていない。

…しかし、アレとは何だろうか？

「……」

古泉を見ても他人には分からない程度…俺には判る…で小首を傾いでいるし、

「……」

鶴屋さんは…？ 何だ？ 何やらほんのりと頬を紅潮？ させて止まってらっしゃる。

…あの…お願いですから誰か喋ってくれませんか？ と、思いながらもその口火を自分が切るコトが出来ないでいる……そこ、チキンハートとか言っつなよ？ だったら、オレに代わってこの場に立つてみるよ。何も言えないこと請け合いだぜ。

「んんっ」

「っ」

古泉が動いた。

「…すみません。アレ…とは、何でしょうか？」

「へ？ … あゝ」

古泉に改めて訊かれて鶴屋さんの眼が泳ぐ。
…ふむ、やっぱりお前も理解できなかったか。

「……………だから、アレはあゝ…アレ…しかない…によるよ？」

「……………はあ。アレ、ですか」

鶴屋さんの答えになってない返答に古泉は首を傾げて難しい顔になっ
ていく。

…いかん。オレも口開かんと置いてけぼりになりかねん。

「……………アレ…って何だ？」

オレも倣って改めて口に出して訊いてみるが古泉は肩を竦めるだけ。

口から”アレ”と連呼する度に鶴屋さんは…何というか、しまった…みたいな後悔のような表情がうつすらと広がっている…と言う
か、表情と言うか顔色も心なしかさっきよりも紅い。

一体、何を察して欲しいかは正直なところ解らんが…それよりも、
だ。

「あゝ…うゝ…」

鶴屋さんって攻めまくるイメージが強かったから気付かんかった
が一度でもペースを崩されて受けに回ると弱いのだろうか？

「いやあだからっさ…あ、みつくるがさっ、昨日団活休んだよねっ
？」

「ええ」

「まあ」

「それってさ、みつくるも言うかあ…あちしも、さ？ その…それがめがっさつ原因があつてと言うか…めがっさ気になって、めがっさ気が気じゃなかったというか」

…一体、何を訊きたいのか何を言いたいのか、鶴屋さんらしくなく全くもって齒切れが悪い。

オレ達も何とか鶴屋さんが何を言いたいのかを理解しようとするが、正直、今言った殆ども語気が尻すぼんだせいで全く聞き取れず、オレ達が首を傾ぐ間も鶴さんは何やらブツブツと聞き取れない小聲…時折にみくるのがめがっさ…とか、身体の割りにもうめがっさ…とかが聞き取れるだけ。

めがっさめがっさとずつつと呟いている。

「あの…？」

「っひゃあっ！？ な、何だい?!」

そんなにつちもさつちも行かない状況に業を煮やしたのか、古泉が急に声を掛けた。

しかし、声を掛けられたのが予想外だったのか、鶴さんはいきなりの声にビクウツとして驚きの声を上げてしまい、こちらもその大声に二人してビクツとなる…つく、何か傍目には変な…アホなグループに思われてるだろな。往来で三人が何やらビクビクしてるし。

「鶴屋さん…」

…何だいつてこっちが訊きたいんですけど？

「あ……う」

オレの言葉に鶴屋さんはまた言葉を詰まらせてもじもじとし始める。

…はあ。何か新鮮づくしだな。こんなにも顔を赤らめて視線を泳がせる鶴屋さんってのはお目にかかれるものじゃないぞ。出来れば元のお姿…女性の姿では是非拝見したかった。

「はあ…男の恰好なのが残念だな」
「う…」

「？ ……………あ」

ん？ どした古泉？

何を伝えようとしているのかを表情から読み取ろうとずつつと見ていた古泉。

そこでオレが呟いた後の鶴屋さんの反応の中で何かに気付いたように声を漏らしたのだ。

「なるほど……」

「…さ、察してくれたによろ？」

「それは……鶴屋さんも災難でしたね」

「い、いやあつ、めがっさ貴重な体験をさせてもらったっさ！ こんな体験、生きてる内にやろうとしてもやれないからねっ」

と、未だに理解できていないオレを置いてけぼりに二人で何やら
分かり合っ、古泉と鶴屋さん。

…あのぉ？

「？ …キョんくん。まだ分らないかい？」

「……はあ…まあ」

「あ… ……まっ、これがキョんくんのめがっさ良いところ！
天然記念指定っ」

いや、そんな生暖かい視線で天然記念物って言われても…えと、
何処の何を指して仰てるんでしょうか？

「…」

「…？ 何だよ？」

視線を感じて隣の古泉を見る。

古泉、お前まで…何だよ？ そんな眼でこっち見んなって。

「…はあ」

何で溜め息吐くんだ？ いや、だからっ、まるで出来ない子を見
るような眼で見んなって！

「そんなつもりは毛頭ありませんよ。その辺りはかなり前から既に
諦めてますから」

古泉の言っている意味がイマイチオレには良くは分らん。が、
今まさに言われ無き誹謗中傷を受けているような気がする。

…だとすれば、だ。

「ふむ。とりあえず殴っていいか、古泉？」

「おやおや。今の僕を殴れるのならどうぞ？」

「く…」

ちつ。古泉のヤロウ、この世界での自分の容貌の良さを解ってやがるな。

ったく、元から殴るつもりはなかったのに…まあ中身はどうあれど異性は殴れん…これじゃあ余計な角が立つちまうじゃねえかつ。

「…くすっ」

「っ」

と、まあ予告殴打宣言を無言のままに取り消し、手も出さずにただムスツとしているとだな、古泉のヤツ朝比奈さんにも負けないホワツとした笑みを向けてきやがった。

その瞬間オレは悟ったね…この世界に居る限り、この女の子版古泉には勝てんな。忌々しいことに…いや、ホントに忌々しいつ。

元の世界に戻ったらゲームでイジメてやる…。

「…さてと。戯れ合うのはこれ位にしておきましょうか。これ以上鶴屋さんを蚊帳の外にするのも可哀想ですし」

「いやいや、見てて飽きないよつ。あちしの事は良いからめがっさ

思う存分どうぞっ」

…いや、いくら鶴屋さんの申し出でもそこはお断りします。

「でっ？ 結局は一体何なんだよっ古泉？ 自慢するつもりはないがオレにはサッパリだぞ」

「あっはははっ、ホント自慢になんないねい」

「しかし、本当に分かりませんか？」

「あ……ああ」

少々、鶴屋さんのド直球な返しにグサリと来るモノを感じる中、古泉の確認に何とか反応する。

しかし、こうも指摘されると何か…オレは周りに比べてそんなに察しが悪いのだろうか？ と思えてくる。

…自信無くすなあ。

「いやいや、キョンくんはちゃんと視てるによろよっ。まあ、要は全てを含めてそれがキョンくんのめがっさ美点であり、改善点でもあるかな」

「まあ、僕としては涼宮さんに対してのみのその察しの悪さを改善して頂ければ万事において解決へと向かうのですが」

…何故そこでハルヒが出てくんだ？ 思っんだが、何かにつけてハルヒを引っ張り出すのはお前の悪いクセ……っーかさあ、

「話がまた逸れたぞっ。なあ早く教える。結局、アレってのは何な

んだよっ!？」

オレが話を元に戻そうと…話題を更に逸らして逆に元に戻した、
だな…声を張り上げると鶴屋さんが見る間に目が泳ぎ出す。

「…………えゝ、と。古泉くゝん、任すによるー」

「ふふっ…任されました」

…だそうだ。ほれ、ちゃっちゃんと教えろ。

オレが古泉を見やるとそのいつもの営業スマイルが3割増しぐら
いになったかと思うと徐にアレについて口を開いた。

「では、まず言うまでもなく鶴屋さんは元々は女性です」

当たり前だ。

「それが今回の騒動で男性の姿に変わってしまいました。今まで1
7年間を女性として過ごしてきたのに、たった一夜にしてね」

「ああ。で？」

「今回の事は流石に驚かれたことでしょう。そして、今まさに身を
持ってそれを体験している」

「…」

この三点リーダーは鶴屋さんな。今まさに顔を真っ赤にして古泉
の説明を聞いている。

…何をそんなに顔を真っ赤にするような事なのか？

「……まだ分かりませんか？」

古泉の表情が困惑したものへと変わっていく……視線は顔を真っ赤にした鶴屋さんの方を気にするように見やりながら。

……いや、なんつーか。お前が回りくどく説明しすぎるせいでイマイチ分からん。

「ズバツと行け、ズバツと」

「……要点は2つです」

「おう」

「一つは性別が反転した事」

「ああ、世界全部な。二つ目は？」

「鶴屋さんの場合……これは朝比奈さんにも該当しますね……お二人は元の世界での記憶があります」

「そうだな。だから？」

「……」

ここでまた時間が凍結した。

鶴屋さんは今や顔を両手で覆い、真っ赤になった耳だけが見えているだけ。

古泉はニヤケ顔のままだが、口元が若干引きつっている。

「…この説明でもまだ足りませんか？」

「……まあ、そのな。うん」

オレの答えに古泉は何か落胆したような感じで額を抑えると諦めた口調で核心を呟く。

「……身体は男性ですが意識は女性です。色々あるでしょう？」

「色々、ねー…？」

何かあったっけか？

「例えば………そうですね。朝の寝起きの一つを取っても……そうでしょう？」

…ふむ？ 朝、ね。

「………あ
「っ」

鶴屋さんの身体がビクツとする。

かく言うオレも………あぁっ、オレも察した。今まさに察しちまつたさ。

「はあ。朝は大変だったでしょうね………何せ、男性特有の生理現象はお二人にとっては未知の体感・体験だったでしょうね」

…分かった分かったからっ。

古泉よ。そこでダメ押しのとドメは要らんדר？

「……」

「お分かりいただけましたか？」

……分らないでかつ。

ああ。現に今、オレは視界に鶴屋さんの御姿を入れられなくなっているぞ。あ？ 何故だ？ どう見てもコレはセクハラにしか……見えんだろつ！！

「すみませんっ 本当にすみませんっ」

完全に察ししまったオレはまるで揉め事を起こした子供を引き取りに警察まで出迎えに行った親のような心境で頭を下げまくった。

「……………キヨ、キヨンくんには、わ、わ悪気がないのは分かっているによろっ？ め、めがっさ、ね。でも、こ今度からはめがっさ、気を付けてもらえるとお姉さんは嬉しいっかなあっと思うだけどっ……………い、いいによろっ？」

そう今後は気を付けるよう優しく諭し、言い聞かして下さる鶴屋さん。だが、目線は合わせてももらえず、頭を下げたまま顔だけで見上げているオレとは違う……明後日の方を向いている……のがコトの重大さを物語っている。

……だ、誰でもいい。誰かこの首を介錯してくれ。オレは今、もの凄くこの場で腹を割つ捌いて詫びを入れたい衝動に駆られているんだが……その君っ頼まれてくれんかつ！？

「おやおや。逃げてはいけませんよ？ 要は今後から気を付けられればいいではないですか」

と、完全に本来のニヤケ度合いを取り戻した古泉がオレにそう告げた。

…分あってるよ。ただ…穴があったら入りたかったただけだっ。

「ふふ」

「…っ」

オレはハルヒみたくアヒル口になりながら古泉を睨…ん？ あ、いや…とりあえず、二人を見やっていたんだが。

早くに汚名返上の機会が来た。

まあ…なんだ？ 未だに明後日の方を見てる鶴屋さんにそんな鶴屋さんを見る古泉…という図。

その古泉のいつもの表情に何やら違うモノが混じっているコトに気付いた…それが

「？ 僕の顔に何か着いてますか？」

「……いや、別に何も」

ニキビも何も無い、すれ違う異性の10人が10人とも振り向くような綺麗なお顔ですよ。

と…まあ、とりあえず古泉が取り乱すような事を言って誤魔化しておく。

「っ」

オレの誤魔化しに案の定、顔を真っ赤にする古泉の顔には先程の表情は無い。

…ふむ、あのオロオロとする鶴屋さんを見ながら浮かべていた笑み…そこに先の暴挙に対して一矢報いたとばかりのやり遂げたモノが混じっていたのだが…多分、見間違いだらう。

っと、勿論、これは口には出さずに心の中だけ。このモノローグも間違つて漏らしてないからな。つか、混じつてた確信が有ろうが無かるうがそれを口にするようなそこまで空気読めないヤツじゃないぞ、オレは。

だから他の場合もちゃんと空気を読めてるぞ、うん。読めてる読めてる。

…

少々、時間が掛かったものの本来の調子を取り戻した鶴屋さんを伴い、オレ達は今、坂をえっちらおっちら歩いている。

…ざわ…ざわ

…はあ。

えー、今、軽く坂路調教を施されている1歳のサラブレッドみたいな気分になりながら、いつものハイキングコースの坂道を消化している。隣には古泉、後ろに鶴屋さん。

…ざわ…ざわ

気付けば賑わっている学校へと続く坂道。

半ばを過ぎた頃にはオレ達の周りに目的地を同じくするアタック

隊の群れが幾つか出来ており、それぞれが近場に居るグループなしグループ内で談笑しながらこの坂を歩いている…んだが、

…ざわ…ざわ

…何か、今朝はやけに福本伸行指数が高…スマン、今は妄言だ。

いや、まあ何だ。そんな妄言を思わせるほどに周り…特にオレ達に近いグループが何やら騒がしい上に何やら視線を感じるんだよな。まあ、自分達が関わっている人物ないし在籍している団体の事を考えれば当たり前だし自覚もしている。しているんだが…んー。いや、待てよ？ 何か今更の反応だよな。発足してからそろそろ1年になるうかつてのに。

…ざわ…ざわ

オレは気付かれないよう、視線だけを動かして近いグループを見る…飽くまでも自然に。後ろに存在するグループには鶴屋さんに話を振ったりして視界に入れる。

「？ 何したによる？」

何かを感じ取ったのか鶴屋さんが尋ねてくる…ちゃんと男口調で。少しのイントネーションの違いで同じ語尾でもかなり違うもんだなと思いつつ、

「あ、いえ。別に何も」

と、答えると気を取り直すように前を向く。まだまだ続く坂道…三角点である学校までは遠い。

「…ちつ。いい加減、何とかならんものかねえ」

…いくら走るの大好きなサラブレッドでも、こんなに長い距離の坂路調教を毎日毎日やらされたら流石にストライキ起こすぞ。

「良いじゃないですか。運動不足な生徒にはいい傾斜と距離だと思います」

「そりゃ、お前は良いよな。」機関”で訓練とかやってたんだから」

「ふふっ」

と、オレの言葉に笑って応えたと、

「確かに森さんの訓練に比べればこの程度、苦ではありませんね…」

そう古泉がにこやか？ に呟く。

ここで何故にハテナを入れた理由は…まあ、口元が引きつってたから、かな？

正直、メイド姿しか見たことがないあの森さんが行ったという訓練が気になって仕方がないのだが、あの時の壮絶な笑みを思い出してしまつとだな、自ずと出掛けた言葉が喉から胃の中に逆流しちゃう。

「まあ、知らぬが仏…です」

おいおい。やたらと重く感じるぜ？ その言葉。

…まあ何だ。身体は大事にな？

「ええ」

と、まあ他愛ない話つてのはこんな感じだ。

さて、こんな風な他愛ない話をしながらもオレの潤滑油の足りない出来ない頭は先の幾つかのグルーブを分析していた。

まず、オレ達三人への視線を10とするとその割合は…

鶴屋さん… 4

古泉… 4

オレ… 2

これを男：女比にすると

鶴屋さん… 1：3

古泉… 2：2

オレ… 0：2

と、なる。

オレは異性からは0か。

…あれ？ 変だなあ。意識は男だから男子に見られても気色が悪
いだけのはずなんだがな。何でか知らんが無性に空を見上げたい衝
動に？

「どうかしましたか？」

「…ん？ いや。どうもしないさ」

「そうですか…？」

「そうですとも」

…よし、気を取り直したっ。

えー、まず鶴屋さんへの視線の内、女子からののは主に憧憬や好意で占め、男子からののは主に嫉妬で偶に羨望か？

…ま、さもありなん。世界が反転しようが鶴屋さんの容姿はまさしく北高トップクラスだからな。では、次。

…次、か。

「…」

…あー、次はオレだ。

まあ女子しかいないわけだが…多分、奇異の視線？ か。まあ奇特なコぐらいには見られてるのかもな。しかし…

「…」？

同性の視線にしては熱っぽいつて言うか纏わりついて来ると言うか…表現としてはこう、冷たい何かが背筋にクするモノがある。

…何でだ？

「ふふ…」

…何だ、古泉？ 人のモノローグ割り込むなよ。

「いえ、珍しく百面相をしているので、つい」

「……考えゴトをしてただけだ」

「何かお悩みでも？」

「ここで悩みの原因は古泉、お前だっ！　と言えるわけねえよな…

「…色々あるんだよ。色々とな」

「僕に出来る事でしたらいつでも相談に乗りますよ」

…そんな時になったら頼むさ。

そんな返事でも気を良くしたのか、古泉はやんわりと微笑むとそのまま前を向いた。

オレは視線だけで古泉の方を見やる。その横顔は周りの視線に気が付いていない風に見える…いや、実際気付いてないのだろう。当人はその事に気付かないのは幸いか、はたまた先送りになっているだけか。

「…はあ」

二人に気付かれないようにこっそりと溜め息を吐く…今日一日が始まったばかりだと言っのに重たい溜め息だ。

今日この日の学校は昨日なんかとは比べられない事が起きそうで実に滅入りそうだ。

…とりあえず。無事、一日が過ぎるよう祈っといってくれよな。

…ん？　古泉への視線の説明がまだだ？　……………スマン。オレの口からは何とも言えん。長門的に言えば、口頭での説明による情報伝達だと粗誤が発生するかもしれんのだ。

分かりづらい？ んんっ…要は、だ。オレ的には見間違いかも？
しれんからだ。だから、だ。
その辺はご想像にお任せにする…な？

…いや。スマン。

さっきのはオレの希望的観測だ。多分、皆が浮かべたそれで間違いないと思うし、敢えて内容を言うつもりも勿論、無い。
とりあえず、オレは思う。

…朝から胸くそが悪くなる登校風景だぜ…
ってな。

騒動 元・男子、今・女子（前書き）

第9部です！

… ちょっと時間掛かっちゃいました。すみません（謝

でも、これで第9部部分目ですよ。まだ一人出てないのはすみ
ませんホントにすみませんっ（土下座！

では… 本編どうぞ～

次は朝比奈さん出さないと…（ぐっ

騒動 元・男子、今・女子

「じゃっ、オレっちは用事があるからさっ、ここでお別れっ。ごめんによろっ」

校門を過ぎた途中、鶴屋さんが用事があるからと部室棟へと向かっていき、オレ達はそれを見送って校舎へと入ったんだが…

「…」

正直な所、オレは色々と腹にイチモツを抱える羽目になったせいも相俟って、このまま保健室に駆け込んで何もかもを無視して横になりたかった。が、諸々の事情…古泉と昼飯同伴、欠席無効の団活…でそれも叶わない。

校舎内へと入り、げた箱で上履きに変える間も視線を感じ続け、それにまた坂道の時とは別の視線も突き刺さって来てからは…そういえば、ここでやっと視線に気付いた風だったな…古泉のヤツが何度もオレに申し訳なさそうな顔を向けてきた…そんな顔すんなって

「…なあ。確か9組はこっちから登んだっ たな」

「え…？」

…何かオレの言葉に古泉が驚いているな？ おーい、仮面が外れてっぞ。

「……………おやおや。どういった風の吹き回しです？ 確か、自分の身に危機的状況が降りかかった時以外ではあなたは寄りもしなか

つたと記憶してますが…」

オレが意図的に驚かせたと思っての仕返しのためか、古泉はいつもの仮面を被り直すや皮肉たつぷりに聞いてくる…まあ確かに言われてみればそうだな。

…たまには良いかと思っただが仕方ないな。

「…まっすぐ自分んトコに行くか…」

「あ、いえっ。別にそういうわけではないんですっ」

踵を返そうとしたオレに古泉が慌てて引き止めてきた。

オレは後ろを振り向くと半眼で古泉の面を見やる。

…お前なあ。

「…すみません。実は何と言いますか、驚いてしましまして……何でしょうか。ちょっととした可愛い冗談ですよ？」

やめい。お前の口が可愛い冗談とか言うなっ。

「見ろっ、お前が変なコト言うから鳥肌立っちゃったじゃねえかつ」

オレはカーディガンの袖を捲ると鳥肌が立った腕を古泉に見せる。つたく、いくら見た目が女子だからって何っー気色の悪い事をしてくれやがるかな、コイツは。

「それは…元の僕を想像するからですよ。ただ前に居るのが女子生徒として見れば不自然さも違和感ありません」

「……………ぐはっ」

ん？ 今の断末魔は何って？ 今のはまあ、何だ…失敗したんだわ。

バカ正直に一応は試みてはみたものの残像は消せず、当たり前のように男バージョンがチラつき、しかも勢い余って先の言葉をリピートまでしちまつたぜ。

…うん、それ無理。

「ま、記憶があるわけですし、そもそも無理な相談というモノですね」

と、したり顔でぼざいた張本人。

…解りきってんならわざわざ薦めんじゃねえよ。

「くすっ…何事も挑戦ですよ」

言って古泉は柔らかい笑みをオレの視界に残すと背を向け、9組に近い階段を目指して歩いていく。

「…ったく」

オレは何とはなしに後を付いて行かず、前に行く古泉のその後ろ姿を見やった。

それは女の後ろ姿であり、そこからは男の姿を彷彿とさせる名残などはこれっぽっちも無く、肩甲骨辺りまで伸びている髪は綺麗であり、多少は短いモノになるだろうが結わえればイイ具合のポニーテールに

「…って…ふおおおっ?!」

ま、待て待てまてまてマテマテーっ！　オレは今、何を心の中で
曰りやがったっ！？」

自分でも何をトチ狂ったっ？　かと思った。当たり前だ…オレが
あの古泉を普通の女として捉えてしまいかけた事に愕然する…いや、
確かに今のアイツの姿は女だ女子だ女性であり。

でも、待てよオレ？　あれは元は野郎だ男子だ男性だろうがっ！

「…？　どうか…しましたか？」

「っ」

一向に付いて来ないオレに気付いたのか、古泉はこちらを振り返
り、あまつさえ身体を斜に傾かせながら少し離れているオレの顔を
上目遣い気味に覗き込んでくる。

…おい、それはわざとなのか？　ナチュラルなのか？

「？　言わんとしている事の意味が解りかねるのですが…？」

…何だっ、その…妄言だ。今のはっ。

「だから忘れる。さっきのは記憶の奥底に沈めてくれっ」

「はあ…？　そう仰るのですし」

「ほらっ、行くぞ」

悟られぬよう、場を誤魔化す為、オレは足早に応えている古泉の
横を抜き去り、

「っ？」

去り際に手首を掴み、オレがいつもハルヒに引つ張られように古泉を引つ張って歩く。

「あ、あのっ」

「……」

「……」

古泉が何かを言い掛けていたが止めた。

何も訊かれずに済んだのは正直な所、助かった。と、言うのもこの状況は何やら思う所と言うか。

何か自分でハルヒと同じ行動をしてみても、何だかアイツの何かが解ったような解らないような……そんな何ともモヤモヤとしたモノにオレは気付きそうだったんだが、階段に差し掛かったところでそんな曖昧なモノは雨散霧散した。

……何故かって？ 何故なら、

「っ……！？」

……

ふと階段……踊り場からの強烈な威圧感を感じたオレは思わず顔を上げたんだが、見上げてみると数人の女生徒がこちらを見下ろしていたのだ……しかも思いつ切り睨んでな。

……つか、何だよ。

……

オレは見上げ、向こうはこちらを見下ろすのが数瞬ほど経つと、

「…行く」

リーダー格…か？ その一人がそう周りを促すとそのまま上の階へと去っていったのだ。

オレは何も言えず、見送るしかなかった。

…何だったんだ？

「あの…？」

オレが立ち止まっているのを古泉が何事かと尋ねてくる。

どうやら運良く曲がり角の壁が死角になり、さっきのグループには古泉が見えず、古泉も踊場のグループには気付かなかったようだ。

「…上に何か？」

曲がり角から顔を出して階段を見上げる古泉。

立ち位置上、オレの肩越しに見上げる形になり、古泉の顔はオレのすぐ横で髪が肩や頬にかかる。

一瞬、オレはあまりの近さにたじろぎそうになるが、落ち着かせるために小さく息を吐こうとした…が、吐く為に吸い込んだ空気にすぐ横に居る女性の匂いが混ざりこんでしまい、頭が真っ白になる。

「あの？」

「んんっ？」

が、自分でも意外に頭がフル稼働し、この場を誤魔化す為の科白が一気に浮かんでくる。

「いやっ別に？ ただな、いつも引つ張られる側だったからちょ

つと新鮮な感覚を覚えてな。何か足を止めちまったんだよ」

「……確かにそうですね。言われてみればこれは良い経験と言えます。あなたの性格上、こうして強引に連れ歩くというのは有り得ませんし…長門さんや朝比奈さんでは体験は出来ないでしょうし」

咄嗟に出た科白だったんだが、意外に言い得て妙なようで納得してくれた。

現にオレが朝比奈さんにそんな無礼を働けるワケが無く、長門に對してもそんな手荒なコトなど出来るハズもない…心情的にも物理的にも。って朝比奈さんには出来るとかじゃないかな？ その辺り間違えないように。

「しかし、これなら涼宮さんに対してのいざという時や男らしさを見せる時にこの経験が生きますね」

…確かにハルヒを逆に振り回すにはちょうど良い経験だな。日頃の振り回わされてる鬱憤もあるし、何せ心が痛まん。

「や。そういう意味で言っただけではないんですがね」

「んん？」

じゃあ、どういう意味で言っただんだ？

「……まあ、今の段階であなたに何を言ってもムダでしょう」

悟りを開いた高僧のような表情でまたもやオレを出来ない子のよ
うに言う古泉。

…何を言いたいのかは知らんが、

「言うだけでも言ってみるよ？　良く言うだろ？　やらないで後悔するよりやって後悔したほ…」

「…どうしました？」

「……いや」

…何でもないさ。

しかし、何を自分で古傷開けてんだろうね、オレは？　無意識とはいえ自然に自分の口から出ちまうとは。

トラウマにカテゴライズされている事柄だと言うのに。一度作っちゃった引き出しってのは開けるのに躊躇がないなあ…どこか鍵付きに出来ないものか。ゴツい南京錠みたいな物々しいヤツ。

…はあ。

「さっさとお前トコの教室に行くぞ」

「そうですね。あまりあなたが僕個人と一緒に居るのを見られるのもどうかと思いますし」

…その辺は別に気にしねえけどな。

古泉の言葉に胸中で呟きつつ、こうしてオレはこの世界に来て二度目となる9組の教室へと向かった。

その間に9組の内情は事前に情報を聞いていたので、着いた後もさほどには気にも…少し視線が痛かったが…ならなかった。

まあ内容としても”無視”といったモノとは差異があった。

実際は無視と言っても、ただ私事で話す事はしないが連絡事項など事務的なモノはちゃんと来るといふかなり軽いモノ。流石は特進クラスと言ったところか？　当の古泉自身もこれに関しては特に弊

害とかはないそうだ。

…ただ。

男子からの熱視線が暑苦しい…つか、気味・気色が悪い。

どれくらいかと申しますと、教室の窓から滲み出てくる空気か何かが妙に生暖かく湿っているように感じる。

…そんなんで成績は大丈夫なのか。特進の男子達よ？

「上がりこそすれ下がったりは無いようですし、その辺りは大丈夫みたいですよ？」

ほう？ 要は頭の良いトコ見せて想い人を振り向かせようという事らしい。

しかし、残念。古泉はその特進の中でもトップをキープ中という優秀さ。

…哀れな。合掌。

「…おや？ そろそろ予鈴が近いですね」

ん？ もうそんな時間か。

オレは窓越しに時計の針の位置を確認すると鞆を持ち直す。

「次は…お昼休みですね」

「おう」

とりあえず部室のある旧棟の屋上より校舎の屋上のほうがいいだ

る。

まあ特に違いが有るわけではないが、地面から雑草生えてるだとか柵が錆びてるの度合いぐらいか。あ、あと絶対前提である鍵の有無に關してだが、それもクリア済み…生徒会から粗方の合鍵を譲り受けている…との事。

「じゃあ、踊り場だな」

「はい」

そう告げながら9組を後にするオレに古泉は見えなくなるまで控え目に小さく、ずっと手を振っていた。

「ん」

…とりあえずこつちも応えておく。

そして適当な辺りでオレは廊下の角を曲がるとすぐに立ち止り、周囲に誰も居ないのを確認した後、額に軽く手を当てて小さく頭を振り、溜め息を吐いた。

…くそ。ホントに元はあの古泉なのか？

「……て、何言っただ。オレは」

オレは思わず眉根を寄せて唸る。

まあ確かに女の姿の今の古泉は魅力的だと思う。あの回りくどい説明の仕方や講釈たれも何故か許せる…ああいや、これは経験があるからか？

「んー……」

…突飛だな。いや。ある意味、オレがこの世界に順応しつつある証拠なのだろうか？

確かに”郷に入りては郷に従え”という言葉がある。が、普通、順応するのは一朝一夕でどうにかなるものではない。

例えば見知らぬ、慣習も全く違う土地に入ったとしよう。

始めに感じるのは困惑だ…自分の価値観が通じないわけだから。そして時を経て覚悟をし、慣習を受け入れ、慣れていき、徐々に順応する…価値観というのは物心がついた時から培っていった形成するから、そうそう変えられるモノじゃない。

…なのにオレのこの慣れよう。

「…我ながら恐るべき順応力だな」

もちろん悪い意味でだ。

オレは溜め息を吐きながら歩みを再開する。物思いに耽って遅刻しましたじゃ目も当てられんからな。

「…急ぐか」

呟いて足早に教室を目指した。

しかし、今まで下駄箱から寄り道もせず自分の教室に向かってたせいか、9組から教室に向かうというのは…何て言うか…新鮮な感じだ。

「……コレもその内に慣れんのかもしれないが」

状況が状況だから不謹慎だが、これぐらい浸んのは悪くはないよな？ 古泉よ。

そう胸中で思いつつオレは歩を早めた。

「…ふああゝあ……」

オレは欠伸を噛み殺しもせず大口を開けながら、昨日とは打って変わって足取り軽やかに階段を駆け、廊下へと入る。

予鈴もそこそこに近いというのに未だにざわつく廊下を進…ん？
そう言えば、道中で谷口とか国木田に声掛けられなかったな。

「…まあ、そんな時もあるか」

と、オレは別段、深く考えなかったんだが…それが甘かった。

「……」

この三点リーダーはオレな。

今、自分が在籍している1ー5の教室の前に居るんだが…何だろ
なコレ？

コレ…というのも普段は照明の無機質な明かりが教室を照らし、
廊下の窓からでも見えるんだが今は全く見えてません。

…コレは暗幕か？

「…今日何かあったっけか？」

と、ふと考えを巡らしてはみるが浮かんでくるのは元の世界の記憶でしかない…役に立たんなと気付くのには時間は全く掛からなかった。

「…とりあえず入る、か」

意を決し、とりあえず引き戸を引くと暗幕の中へと入った。
教室の中はいつものざわつ…き…が

「あ、ちよつとまた胸おつきくなつた？」

「その分2kg増えたけどねー」

「あ、腰」

「やつ…つまむなあ！」

…ハイ？

「あ、そのブラ可愛い」

「へっへっん、いいでしょー。一目惚れしちゃってさあ」

…エートオ何デスカ、コノ光景？ ドリーム？

ここは一体、どこぞのパリコレの楽屋だ？ と、混乱する中でも頭の奥で、ああ体育の着替えなんだな…と冷静に理解している自分がいたりする。

まあ…理解出来たからと言って何も行動出来ず固まってたら意味はない。

「あ、キヨン。遅かつたね」

「あ、ホントだ。どしたの？」

もう、あまりの過剰な視覚情報のせいで脳味噌が熱暴走でカラカラと乾いた音を立ててしまっているオレに誰かが声を掛けてくる。それはこの世界でそうそうに聞き慣れた声。

その声のせいで目の前の光景を認めたくないあまり、自発的にぶっ飛ばしていた意識が引き戻されてしまった…って何だその恰好はっ！？

「キヨン？」

「？ キヨン…顔赤いよ？」

ハ？ 赤イ？ ソリヤ赤クモナリマスヨ？

声を掛けてきたのは見紛う事無き我が友、谷口&国木田だった…
つか、谷口。才前ハナンデ下着姿ノママナンデスカ？

「キヨ…ン？ 起きてるー？」

谷口がオレの目の前で手を翳し、焦点が合ってるか確かめる為に
何度も振っている。

そうして目の前で手が振られる度、女の谷口の胸が揺れている…
ああ、谷口だと思って気にしなかったがそこそこに大きいんだな。
首を傾げつつオレを見上げるその仕草は可愛いぞ？

そんな気持ち、全力で否定したいがな。

「キヨン。大丈夫じゃなかったら保健室付いてくけど…どうする？」

国木田…お前は優しいなあ。

谷口はこっちの反応しか気にしてないのに、お前はちゃんとオレ
の身体を心配してくれる。

「…キヨン？ キヨン？」

国木田はオレにずっと呼び掛けてくれている。

うんうん。元々女顔なせいか、この世界でもあまり変わり映えが
無いなと思ってたが…なあ、国木田よ？

お前は素でブルマ姿が似合ってるな。

「グッチ〜どしたのお」

ん？ げっ…遠巻きに着替えていたクラスメートが気付きやがったっ。

「どうしたって…キヨンが固まったあ」

「え、なにになに？」

「キヨン子が固まったって〜」

「何々い、まあた涼宮くん絡み？」

「うわぁ顔が真っ赤〜」

「ホント。りんごみたいー」

えーと、まあ何だ？ オレ囲まれました…元・男で今・女なクラスメートに。

「…う、お」

しどろもどろするオレの周りに充満する女の匂い…仲が近い人間は特にオレに近

「ちょっとゴメンね、キヨン」

って何だ国木田……く、国木田っ！？ お、おおおおデコ同士でねっ、ねね熱を計るなっち近いっ近いですからあっ…！

「んー…」

国木田はオレとおデコをくつつけたままジツと熱を計っている…何故なら慌ててるのはモノローグの中であって実際はあうゝあうゝしか言っていないからヘタレだからだ…って、おいおいおいっくらこらこらあっ目を瞑るなっお願いだから頼むから間違い起こしちまいますよっ!？

…つか、

「キヨン。頭、揺れてるよ?」

もう無理です。

「あ、鼻血…」

「…っおふぁ!」

色々と限界突破したオレはその場で断末魔と共に卒倒した…鼻からの流血付きで。

「えっ!? きゃああー?! キヨンっキヨンっ?! わああっキヨンが倒れたあっ!」

「ちよっ、キヨ、キヨン子ちゃんっ?」

「ちよっ、ちよっ、うわあっ? は、鼻血が凄い勢いで出てるうつ」

「誰かティッシュ、ティッシュっ!」

「ティッシュじゃ間に合わないよっ誰かハンカチっ無かったらタオルタル!」

倒れて暫くはそんな声が聞こえていたが、こんな状況から逃げたかったオレは意識から手を放して完全に気を失った。

…

「だあかあらっ」

…？

「俺が保健室連れてくって」

…うん？

暗闇の中で声が聞こえてくる。

「あなたの組は今日の体育の準備をしなければいけないハズ。早くグラウンドに行かなければ周りに迷惑が掛かる」

…？ 誰だ？

「別に俺一人居なくても準備出来っ」

「その場にあなたが居た場合と居ない場合での作業終了時間の誤差が約10分。限られている時間の中ではこの10分は無視できない」

…この声は、長門？　じゃあ

「なら、聞くがよ？　逆の立場だったらお前はその10分とキョンとどっちが大事な」

「迷わず保健室に連れて行く」

「俺だって同じだったの。だから連れて行くのは俺が行く」

…この声…ハル…ヒ？

「涼宮ハルヒコ…あなたの言いたい事は解る。だが、だからと言って必ずしもあなたが連れて行かなければならない訳ではない。私が連れて行く」

「はあ？　長門てめえ何ワケの解らない事言ってた？　団員が危機的状况に陥ってるってのに団長が動かんでどうするっ？」

…二人が口論とは珍しいな。何で言い争ってたんだろうか？

「ふんっ…って、軽いなコイツ」

「待て涼宮ハルヒコ。連れて行くとして何故、その運び方で行く必要がある？」

「は？　な、何故って」

「その体勢では腕に負担が掛かる。背中に背負う方が双方共に安定する。推奨する」

…オレ、今どうなってるんだろうか。

「…どんな風に運ぼうが俺の勝
推奨する」

「
…」

…オレ、今まさにどんな風に運ばれようとしてんだ？

「行」

「推奨する」

「
…」

「あのさ、二人とも」

お？ 国木田か？

「何だよっ！？」

「何？」

…ハモったな二人。仲良いな。

「二人で担いでればいいでしょ！」

うおっ…今の、谷口か？

「…二人つつても」

「私が右肩を持つ。あなたは左を」

「はあっ？ あ、長門、てめ……………っあぁっもう！」

…

「…おが？ ふおっ！？」

目を醒ましたオレの視界に入ってきたのは見知らぬ天井であり、さつきまで居た景色との違いに驚いて慌てて身を起こし、辺りを見回す。

「っ…こ、ここは、保健室…か？」

そう呟いた後、先程のやり取りをぼんやりとだが、思い出してみる。

…あれはあ

「ハルヒと…長門だったな？ あ、あと国木田」

…序でに谷口。だとすれば…だ。

あのやり取りがただの夢ではなく実際にあったとすると、オレはあの二人に抱えられて運ばれて保健室に来たことになる。

「マジかよ」

…オレは一体、どんな風に、どの様にして、ここ保健室に運ばれて来たんだ？　ぐあっ無茶苦茶気になるぞっ？！

「それもこれも…体育が…くそ」

オレは後悔を口にしながら頭を抱えて盛大な溜め息を吐く。
そうと知っていればワザと遅刻してきたものを…

「…」

…いや…まあ、イイモノを見れたのは確かです。

とは言え、正直な話。女の姿なのがこの際は有り難い。あの鮮烈な映像はちつとやさつとじゃ忘れ去る事は出来ないからな。教室でアイツら見る度に前屈みなってたんじゃ著しく動作に支障をきたします。

「…はあ」

静かな保健室にオレの溜め息が響く。養護教諭の職務怠慢のおかげでここにはオレしか居ない。よって独り言を聞いている人も居ない。
…いや、聞かれない訳じゃないんだが…別に妙に心細いワケじゃないぞ？

「…ん？」

とりあえず誰ともなし。無人の保健室で言い訳を呟いていると…何か冷静になって思うと端から見たら病んでるよな、これ…各ベッドを仕切る閉じられたカーテンの向こう、外の窓の方から何かが当たる音が不規則に聞こえてくる。

明らかに人為的に立てている音だ。

「……誰だ？」

オレはベッドからソツと抜け出すとカーテンの端を握り、一旦止まる。

…誰が居る？

本命 国木田&谷口

まあ、鉄板みたいな意味で。

対抗 ウチの団長&長門

本当は大本命と言いたいが…謎な運ばれ方をしたのがついさっきの事であり、まあ心情的なことで”対抗”と。

大穴 朝比奈さん&古泉

…て、普通にドアからだろ。二人は普通授業で校舎に居るんだから。

とまあ、後は二択になるわけだが

「…キョン。まだ目が覚めてないのかな」

この声は国木田だな。て事は

「…国木田さん。戻ったほうがいいのね…先生にバレちゃうよ」

「…」

…えースミマセン。後者の方はまさか…？

オレは慌ててカーテンを開くと、いきなりのコトに驚いた二人と目が合う。

「きよ、キョンっ。大丈夫なの？」

大丈夫？ と、聞かれてもな。見ての通りだ、国木田…つか、それより

「良かった。キョンさん、大丈夫そうなのね」

と、閉じたままの窓越しから聞こえてくる特徴的な語尾…国木田と居たのは谷口ではなく阪中だった。

「でも大変だったのね？ キョンさんが流血したあってみんなヘンに騒いでたんだよ？ 校庭に出てた僕たち」

窓越しにも判る、声変わりが来てないようなヤケに幼い声。背は

元より少し高いがそれでも国木田程度。容姿・容貌も元が色濃く残っている。幼い声でも違和感がない。

…つか、いまいち話し方に要領を得ないのはそのまんまか、阪中よ。

「…つか」

オレは窓を軽く開け、そこそこ重要なコトを訊いてみる。

「今、授業だよな」

そう訊ねると阪中がうんうんと頷いているが、国木田はさも気にしていないような表情で口を開く。

「その点は大丈夫だよ、キヨン。涼宮くんと長門くんが先生の注意を逸らしてくれてるから」

「…あの二人がか？」

ハルヒと長門が先生の注意を一点に引き受けている…ただそう聞いているだけで不安になるのは何故だろう？

そんなオレの心情を察したのか阪中が慌てて口を開く。

「あ、あの、キヨンさんが心配するようなじゃないのね。二人はちゃんと授業受けてて…男子は今日、本当は軟式テニスでダブルスなのに実質はシングルみたいになっちゃって、そんな縦横無尽にプレイしてるから先生が目が点になっちゃってて…」

…えーと、

「……今日の男子の授業は軟式テニスのダブルスなのに、あの二人は持ち前の運動性能で相方無視して自分達だけで試合をしてる…」と

「うん。それが物凄く速くて重い音がするラリーで、最初はお互いの前衛も反応してただけ…」

…国木田が言うには、キツカケは長門が返した球をボレーしようとした前衛が球威に圧されてラケットで顔を強く打ちつけたらしいのだが、そこで中断するかと思いきや、その奇跡的に山なりに返った球に対して後衛の長門が一気に詰めだして、思いっきりスマッシュを叩き込んだそうだ…ハルヒ目掛けて。

「スゴかったのね…涼宮くんのアプローチ。あんな音出して返ってきた球をノーバンで捉えたんだから」

「ふーん…」

…その場で見て確かめた訳ではないから判らんが、そんなにスゴい音を出して打ち合っているのなら軟式の球の方がスゴくなかるうか？

あんな硬式と比べたらかなり薄手のゴムでしかない球があの子の非常識パワーに耐えてるワケだし……まあラケットのガットも一緒か。

「…ほら、キョン。これ」

と、国木田が携帯でその今尚、現在進行形？ であろうハルヒvs長門の試合の動画を見せてくる。

保存時間はフルの1分30秒…そこにはハルヒの怒号と形容したくなるような掛け声で攻める姿と黙々といなして返す長門の姿があ

った。

『当たれえっ！』

『沈めっ！』

『砕け散れっ！』

…えーと、今日の授業ってテニスだったんだよね？ 某特機大戦
みたくロボットに乗り込んで戦ってる訳じゃないんだよね？

ひたすらにテニスとはかけ離れた物騒な掛け声であの長門の球を
打ち返しまくるハルヒ…その打ち返す音は本当にあの球はゴムなの
だろうかと疑うような硬くて重そうな音だ。

「ね、ね。涼宮くんの声で分かんないかもしれないけど、長門くん
も何か言ってるような気がするんだけどキョンはどう思う？」

「…あの、長門がか？」

ハルヒの掛け声にしかめていたオレに追い討ちを掛ける国木田の
確認。

正直、そんな確認しなかったのだが、違う長門が見れるかも
しれないという好奇心には勝てなかった……つか、勝てよオレのバ
カ野郎。

『…』

『…』

上記の三点リーダーはスマン。だが、聞こえてはこないのだが確

かに長門は何かを呟いているのだ。

オレは目を凝らしてディスプレイを観察し、更に長門の唇の動きを真似てみて何を言っているのかを推測する。

「は……ど……お？ いや……う、か？ きう……きゆう？ はどうきゆうって何だ？」

「んー……何かの必殺技かな？ 国木田さんはどうなのね？」

「……さあ」

阪中が疑問を口にするが国木田は小首を傾いでいる。

「……しかし。あの長門が必殺技、ねえ。あれ……何だろうな。知らないほうが良かったとか、何か見たくないもの見てしまったと言う後悔の念が湧いてくるんだが……何でだ？」

「……」

「……あとさ、他にも”もずおとし”とか”つばめがえし”とか呟いている動きもあったんだ。いや……いやいやっ、オレが間違ってる読み取ってるそう思ってるだけかもしれないし、勘違いかも！ うん。そう気のせい、気のせいだ。」

そう結論付けたオレは国木田に動画はもういいから……と携帯を仕舞わせ、それを確認すると盛大な溜め息をつき、藁にも縋る気分で空を見上げ、無駄だと理解しつつも助けを求めるようにムダに青い空を見仰いだ……全然、意味ないけどな。

幕間 携帯いじり（前書き）

第10部分です！

自分で言いますね。今回早っ！

SOS団最後の一人は出るのか…出ないのか？ いや、出てます！

ではで〜第10部です！。どぞー

幕間 携帯いじり

…もういい、もういいです。勘弁して下さい。

正直、オレはもう色々と耐えきれず、見ざる聞かざるの2つを用いて携帯のディスプレイに流れている、誰かさん達の認めたくない見事な暴れっ振りの動画を無視し、二人から求められる長門の呟きの確認を言わざるで回避もとい、しらばっくれた。

…つか、頭痛くなってきたぞ。

「キヨンさん大丈夫なのね？」

「キヨン、辛いならわたし達…」

…えと。

そう今のはホントに痛くなっただけではなく、ただもう口癖になりつつある言葉で実際に頭が痛くなくても、つい口から出ちゃうんだが二人は本気にしたようだな。

…いや、これは話題を逸らすチャンスじゃないか？

「な…なあ、訊いていいか？」

とまあ、少々ざあとらしいがそのまま気分が悪くなった小芝居を続け、オレは此処へどうやって運ばれてきたのかを二人に無理矢理に訊ねた。

「…あー」

すると、外にいたと言っていた筈の阪中が何故か目を泳がせ始める。

…何だ、阪中。何か知ってるのか？

「えと…」

「阪中くん、答えちゃうと詰まんないよ。ね、キョン？ ヒントだけでもいいかな？」

口を開きかけた阪中に国木田が何故か横槍を入れてきた。

「おい、詰まる詰まらんはお前らだけであたしには関係ないだろ」

…妙な方向に持っていこうとするなよ。

「それがあるの」

「…何だよ？」

「それが女の子なら一度はして欲しい運び方だから…かな。あ、これヒントだからね」

「…あれ？ 国木田さもがっ」

阪中が何かを言い掛けたが国木田の手がそれを遮り、口を塞がれた阪中は目を白黒させている。

…へー、ほー。女の子なら一度は、か。じゃあ、男の意識のオレじゃ一生答え出ねえな。

「…さっぱり分かん」

「ふふつ。言うと思った…キヨンらしいや。あ、ちなみにね？」

と、国木田が自分の隣をチラツと見やると、阪中の口を塞いでいた手を離すとそのまま人差し指を自分の口癖に触れさせる。

「あの運び方」は…私もして欲しいこと、かな」

と、ニコツと微笑んだ。

視線と笑顔、仕草の三連撃を受けた阪中は顔を真っ赤にしてオロオロしている。正直、端から見てるオレもそんな国木田に内心ドキドキです。

…国木田ってこんなだったっけか？

「あ、そろそろ帰らないと。下手をすると二人の決着着いちゃうかもしれないし」

「え？」

唐突に国木田はそう言うのと未だにもじもじしている阪中の手首を掴むと窓から離れた。

手首をいきなり掴まれた阪中はキョトンとしてる。

…なっ、お、おい、ちよっとっ？

「結局どうやって運ばれたんだよっ」

「それは二人に直接訊いたら？ 快く教えてくれるよ」

「っ。そ、そうかもしれんが…」

そうは言っがなあ国木田よ？ 何やらオレの危険信号が直接はや

めとけって警鐘鳴らしてんだよっ…ああもう、阪中あっ!?

「へっ? え、ぼ…僕? え、えと…」

「言っちゃダメだからね」

どうしようか考えあぐねていていた阪中に国木田がまたぞろ遮ってくる。

…国木田…何でジャマするかな?

「う…ううっ。キョ…キョンさんごめんなさいなのねっ」

予想通りの阪中の返事にオレは盛大に溜め息を吐くと額に手をあてがう。

…はあ。はいはい、そうだろうさ、もう訊かんっ。

「次の授業も休むからなっ」

「判ってるよ。キョン」

オレのサボリ宣言に国木田が分かっていると云った表情を向けてくる。が、

「腹を決める時間は必要だからね」

…まるっと勘違いしてやがる。

「勘違いすんなっ。もうこのままうやむやにすんだよっ!」

「あははっ。キョンらしいね、それ。じゃ、ちゃんと安静にね」

「お邪魔してごめんなのね」

…はいはい。分かってますよ。

「あの場に居た他のみんなに迷惑かけてスマンって言うといてくれ」

「了解」

「了解なのね」

…はあ。

二人はそれに快く了承すると校庭へと仲良く走って行くのをオレはぼんやりと眺めながら見送った。

しかし、元の世界は知らないが、この世界でのあの二人は付き合いっでもいるのだろうかと勘ぐってしまうほど仲が良い。

「…一応は、ハルヒの願望…なんだろうが」

まあ、あの二人なら納得かな。

「…はあ」

騒がしかった保健室に静けさが戻ってしまった。

「…うーむ」

独りぼっちの保健室。

オレの声が虚しく響いてる。

「……ダメだ」

ヒマになっちまった。

国木田&阪中が授業に戻って行ったのはつい5分前であり、区切りを告げる鐘まであと10分もないという時刻。

「……ここつてこつても誰も来ないもんなのか？」

つか、保健室の先住人であるはずの養護教諭の帰ってくるような心配が一向にすらないとはどう言った見か？ 職務怠慢じゃないのか、これは。

話し相手もない、ヒマを持て余した元・気絶者であるオレ。多少の問題があつたが、あのまま二人を帰してしまったことで生じた、この完全な手持ち無沙汰っぷりは嘆かざるを得ない。

……うーむ。かと言って、

「今更、寝るのもなあ……」

正直、気が引ける。

まあ全授業を睡眠学習で済ます手前、こんな事呟いても説得力に欠けまくるかも知れん。が、こつても状況が整つちまうとな、逆にイヤなんだよ。

「……………」

何か無いか……あ。

「……背に腹は代えられんか」

あまりにも不本意だが、ここでふと今まで頭から追い出していた、先ほど国木田に見せてもらった映像を思い出す。

……特にあの長門が必殺技をブツブツ呟いてたという疑惑の部分を。

「…うん」

…あれは、何とか驚いたな。流石に、ねえ。

何せ、あの最初の頃の無味無色な感情に無気質無言な表情だったのが凄い進歩だぞ長門！　と言いたい所なんだがアレは何か道を間違えていませんか、長門さん？

何と言いますか、かなり間違った育て方をしてしまったかもしれないという後悔のような、どこをどう間違えたのかという疑念みたいなもんを感じてしまう。

「ん？」

そんな、うんうんと唸っている内…

「最初の授業終わったか」

と、いつの間にか1限目の終了を告げる鐘の音が鳴っていた。

「休み時間、だな……………先生戻って来ねえかな」

長門も気になるが、此処に来た状況も気になる。あの二人に直接は訊けない以上、選択肢の残りはそうない。

後はその場に居合わせた養護教諭のみで仮にも教師なわけであるからして、茶化しやかからかいなど一切なく聞けるであろう可能性がある。

「…頼むっ」

オレは養護教諭が戻ってくるのを待った。

…

「いやぁ…先生はその時にはここを離れてたからね。何か気になる事でもあったのかい？」

「…い、いえ」

はいつ唯一の証人消えたあつ。

休み時間の始まった間無しに帰ってきた養護教諭。オレはすぐにその時の状況を訊いて返ってきたのはそんな無情な証言だった。

「…ええ…っ」

何…何なんだ？ まさかマジで直接訊けてか？ これは何の罰ゲームなんだっ？

「えーと……で？」

「え、あ、はい。何でしょうか？」

養護教諭…えー、先生がアンケート紙に記入された内容を見ながら、確認するようにオレに訊いてくる。

「ここの記入には急に鼻血を出して倒れたと書いてあるんだけど気分はどうかかな？」

「へ…あ、あー…どうと言われても……今は大丈夫、です」

…あんな状態、一時のモノ以外の何モノでもない。

次から時間やら何やら慎重に、細かく気を付ければ今後は大丈夫だろう。

「…まあ、大事を取ってもう1限はここで寝てても構わないよ」

「…すみません」

正直、オレなんかの事情で限りがあるベッド一つを埋めてしまうのは後ろめたい事この上ない。

「ははっ、気にしないでいいよ。記録だとキミはココは初めての子みたいだし、仮病の類で来る生徒で埋まるよりは断然いいさ」

そう言う先生は机に向かい、何やら書類に集中し始めた。

これでは流石に、これ以上話しかける訳には行かず、また途端にオレは手持ち無沙汰になってしまった…さて、どうしたものかな。とりあえず、ベッドに入り込み直してジーンツとする。

「…」

廊下が騒がしく賑やかなも

「っ?」

なんだなんだっ?

急にスカートの中の携帯が何か着信を告げてブルブル震えたのでビクッとして慌てて取り出し、ディスプレイで確認する。

…メール? あ、朝比奈さんだ。

差出人：朝比奈みつる

件名：キヨンくん大丈夫ですかあ？

本文：今、鶴屋さんから聞いたんですけど。キヨンくん、その…倒れて保健室に運ばれちゃったって…あの、確かにこの状況は異常ですけど、えと…あんまり一人で無理しちゃダメですよ？

これがメールの内容だ。

どうやらオレが倒れたという情報が何らかのルートで二年にまで伝わり、それが鶴屋さんの耳に入ったようだ。

「…安心させとかないとな」

件名：オレは大丈夫ですよ。

本文：朝比奈さんが心配なさるような事はまだ一切してませんよ。今回ののはその…まだ少しこの身体に慣れてないのが原因です。

とりあえず今、長門が原因を探ってくれていますから、行動を起こすのはそれが分かり次第です。

今は待ちましょう。

「…こんなモンか」

そのまま送信のボタンを押すとすぐに送信完了の文字が出た。と、

確認した瞬間にメールの着信が来た…ちなみに1分も経ってない。
つか、朝比奈さん早くないですか？

――
差出人：古泉一姫

件名：今、報告を聞きました。

本文：あなたが倒れたという報告を受けたのですが……大丈夫ですか？

――
…なんだ、古泉か。

報告を受けたという事は他の”機関”特派員が見たと言う事が…
本人が知らない、オレが運ばれてる時の姿を見てるってことか。

「……」

やっぱり古泉のヤツも知ってるのだろうか？

――
件名：オレは大丈夫だ

本文：報告って言ったな？ 知ってるのか…その、オレがどうやって運ばれたのか？ とりあえず、状況は言わんでいいから…見た見てないのYES or NOだけ言え。

――
どっちだ？

オレは文章を打ち込むと送信ボタンを押した。これも朝比奈さんの時と同様、すぐに送信完了の表示が出た。

「…」

携帯から意識を離しボーっと何もない空間をただただ見つめる。

「…」

返信はまだ返ってこない。

「…」

…

「…」

…う・う・お・お・お。何っただあ、この徐々に押し寄せてくる、異様な恥さは？！！自分には預かり知らんからか？本人は知らない…かと言って他人は知っている…

はっ、これは羞恥プレイかつ？ そうなのかつ！？ 誰の主催だクソっ！

うあああ！！ 耐えられんっ誰かオレにデリンジャーをくれっ！銃刀法？ 知るか。なあに、オレのちまっこい脳味噌を撃ち抜くだけだ、一発かぎりのそんな小口径銃で充分過ぎてお釣りがくるっ。さあ誰か胸ポケットから出してオレに渡してくれ！

…つか、ホントに誰か持ってたな

「つて、ふおっ?!」

また携帯がブルブルと震えて思わず声を出してしまう。

…ど、どちら様で?

差出人：朝比奈みつる

…あ朝比奈さんっ、か。ビックリした。

件名：そ、そつか。キョンくんもだよな。

本文：きよ、キョンくんは今、キョンさん…なんだよね。え、えと
…えっちなのは、めっ！ですよ？

「へ?」

…えーと、何を指して”えっち”なのやら…て誤魔化さなくても
いつか。

件名：えーと…

本文：分かってますよ。お風呂は弟になった妹に何とかやってもら
いましたので。

あ。勿論、目を瞑ってましたよ。

「送信、と」

まあ、確かに。朝比奈さんの気掛かりもごもつともである。

「ふう」

オレは軽く溜め息をつく。元妹と久しぶりに一緒に入った風呂場での出来事を思い出す。あれは、ヤバかった。

目を瞑っていたオレの代わりに洗ってもらったのだが、ふとした所を触れられる度に何度も声を出しそうになった。

「はああ。何でああもこそばゆく感じるんだか…」

元妹の身体を洗うときも大変だった。

なるべく視界に自分の身体が入らないようにし、あと不意に鏡に肢体が映らないように湯気で曇らせたままにしたりもした。

…その成果か、何とか特に何事もなく出ることが出来たのだが、

「…今日の風呂どうすっかな」

それを思うとかあなり憂鬱だ。

「はああ…」

…気分を変えよう。そだな。…先の朝比奈さんのメール。

あの、めっ！ という文字を見た瞬間、麗しきメイド姿で可愛ら

しくお叱りするお姿と愛らしい馬子衣装的な執事姿でちっちゃさをカバーする為に爪先立ちでプルプルしながら可愛らしくお叱りする姿を思わず浮かべてしまった。

「ふむ」

…実にイイ。

怒られてるというのに自然と頬が緩んでいる自分が容易に想像できる。いやはや、朝比奈さんはどちらの性別でも癒されますな。

「…？ と、来たな」

着信を知らせる振動があったのでディスプレイを覗き込む。

…返信早いですね、朝比

差出人：古泉一姫

…空気読めよ。

件名：答えはYESです。

本文：状況は話すなと言うことですので省きますが……とりあえず、その状況を見た目撃者は多数居ると言うことはだけは伝えておきますね

…左様ですか。つか、

「星印なんか使っくんじゃねえよ。気色の悪い」

件名：そうかYESか。

本文：よし、分かった。じゃあ、この話は終わりだ。だから昼飯の時に訊いてきてもオレは答えんからな。

ふんと鼻を鳴らすと送信ボタンを押した。

そしてまた矢継ぎ早にメールの着信を告げる振動が起きる。

…朝比奈さんだな。

差出人：朝比奈みつる

件名：お、お風呂？

本文：い、い妹さんにあ、あらっ…洗ってもらったんですか？
じえんぶ…でしゅか？

あの…メールの文章なのに何故そこまで噛み噛みなんですか？

朝比奈さん。

全部…まあ全部と言えば全部だな。自分の身体だとは言え異性の肢体なわけだし、洗う以上は女の子だった元妹が適任だったし。

「えーと…はい、全部…です、よ…と。えー…妹…が、適任ですから。」

そう簡潔に打って一連の動作を行っていく。

「ふう……」

ふと思い、身を起こして時計を見やると休み時間はまだ半ば頃。
あれだけのやり取りをしたわりには遅い時間の経過だな……と、メールが来た。

――
差出人：古泉一姫

件名：おやおや。

本文：連れないですね。ま、僕は状況を知っているわけですし……
そうですね。では、状況を知らないあなたの困った顔を見ながらニヤニヤしてましようかね

――
読み終わった瞬間に浮かんでくる、古泉の0円スマイル。
……にやろつつ。

――
件名：あーあー（c。D。）聞こえない聞こえない

本文：それ以上この話題続けとお昼の同伴の話は白紙に戻すから
な？

――
「てい」

送信。

オレは再度ぼんやりしようとしたが、携帯が相手からの着信を告げてきた。順番から行って朝比奈さんかとも思ったが、違った。

――――
差出人：古泉一姫

件名：ほんの冗談ですよ。

本文：少し悪ノリが過ぎましたね、謝ります。僕としても折角のあなたからのお誘いが白紙になるのは避けたいので。

許していただけませんか？

――――
返ってきたのは古泉だった。

「つか、早いなオイ」

メールの内容としては上記の通り、謝罪のモノだ。

まあ、古泉の付き合いも長いし、先のメールも冗談の域を出ないモノなのは理解してるさ。

…要は、やられっぱなしは癪だったただけだ。

「はあ。昼…休み…遅れん…な、よ？」と

オレはただ簡潔に、件名も入れず、本文に短文を打ち込むと送信ボタンを押した。許す許さないに答えていないが、いちいち訊かんでも向こうも分かってるだろ。

そうして、完了の文字が表示されると同時に次の授業の始業ベルが鳴った。

…

始業ベルが鳴る中、わたしはキョんくんの返事の内容のせいで悶える羽目になってしまいました。

「…あうう…」

どうしよう…わたし絶対、今、顔紅いつ。

事の始まりは休み時間に鶴屋さんからキョんくんが倒れたって聞かされて、その心配からメールを送ったんですけど、キョんくんが返してくれた内容のせいでそれが気になっちゃって、それで目的がすり替わっちゃって…わたし、注意しなきゃっと思って送ったら

差出人：キョんさん

件名：えーと…

本文：分かってますよ。お風呂は弟になった妹に何とかやってもらいましたので。

あ。勿論、目を瞑ってましたよ。

これが返ってきました。

わたし…もう、キヨンくん女の子の身体なのにお風呂に入っちゃったという内容に一気にパニックになって変な返事書いちゃって

差出人：キヨンさん

件名：えーと…

本文：はい、全部ですよ。妹が適任ですからね。

コレです。

この内容が原因で、わたしは女の子のキヨンくんが男の子の妹さんに隅々まで洗ってもらっているという間違ったシチュエーションを思い浮かべてしまったんです。

「うー…」

男の子のわたしの記憶にある女の子の姿のキヨンくん。

自分ではこんなの違うって解ってるのに何故か認めてて、わたしから見ても可愛いなあって思うんですけど、それだと”わたし”は何か、悲しくなってきたっちゃうんです。

でも、そんな女の子の姿のキヨンくんが昨日から一度でも鮮明に浮かんでくると消えてくれないんです。ああっしかも今回はメールのせいで女の子キヨンくんの裸付きに…って、あわわ、は早く消さなきゃっこれじゃあ男の子の身体になっちゃったの、また意識しちゃ

「っ？ ふえ?!」

ひっ…また…また、これが反応して…こ怖いです…怖いよあ…うう。

「…はううう…」

…き、昨日やつ、やっとふり切っちゃのにい。

一気に頭がパニック状態です。すぐに自分の一部の变化に気付いて、それを見た瞬間、昨日みたいにまた涙がポロポロ出てきます。

「ふ、ふええ…」

いつまでもこんな風にめそめそしちゃダメって、自分でも分かっているのに涙が止まらないよあ。

「…朝比奈くん。また、泣いてるの？」

「え、朝比奈くん泣いてるの？ ちょっと大丈夫？」

「つつ…つええ」

「またかよ？ あーあ…朝比奈ってホントに泣き虫だよな。ホントに俺たちと同じ歳か？」

「おーい鶴屋！つ、理由分かんねーけど相方がまた泣いてっぞー」

わたしの席に近い人達が泣いてるのに気付いてくれて、誰かが鶴屋さんと呼んでくれてくれたんですけど…

「ひっく…う、うう」

今のわたしにはそんなやり取りも耳に入らなくて、すぐに鶴屋さんが傍らに来てくれたんですけど、

「みつる、大丈夫による？」

…鶴、屋…しゃん。

わたしのこの時間軸での同級生の友達。その中でも一番大好きな鶴屋さん。

彼女もわたしと同じで元々女の子で、元の…女の子の時の記憶がちゃんと有って

「う…っう、」

…昨日からずっと、一緒に悩んでくれて、此处に来てから一層、一緒にいると安心しちゃう。

「ふええ〜」

だから、そばに来てくれて嬉しいんですけど、それはそれで逆に安堵からまた泣いちゃって結局、授業の半ば頃まで泣き止めませんでした。

…こんな泣き虫でゴメンね？ 鶴屋さん。

…

「…遅れるなよ…ですか」

彼に謝罪のメールの後、返ってきた返事を呟いて僕は内心ホッとしてしまいました。

何故なら先の送った内容は相手の琴線を刺激するようなヤツでしたからね。彼はアレでいて自分がかかわれる事には敏感です。

…出来れば、これをもう少し、彼女との機微に向けてくれれば

「と…これはかなり前に諦めてましたね」

僕はそう独りごちると携帯を畳むとポケットの中に入れます。

流石に先生が教壇に立たれてしまつと授業に不必要な携帯は表には出せておけませんからね。

「教科書は前回の続きだ…まず、」

…しかし、退屈ですね。

先生の話している内容は基本的に聞いてはいません。転校するにあたって”機関”で最難関と言われている有名大学レベルの学力を修得させられ…ここ、ポイントです…ましたから僕には復習程度でしかありません。

一応、フリとしてノートに写してはいますが要点だけを書いた簡単なものです…ある程度の学力がなければ一体どこの部分なのか解らないでしょうね。

…しかし、

「…はあ」

…何故でしょうか？ いつにも増して身が入らないと言いますか…少々落ち着きません。

何と表現しようか…どうもソワソワとしてしまうというか。
僕は先天的に後天的にもこういうキャラではないはずなんですが、
どうやらこの世界での僕のここ最近の楽しみは放課後の団の活動の
他にお昼休みも入っているようです。

…彼が昨日の部室で仰ったように意識に反してというのも今、理
解しましたよ。あの時の彼は一体どう感じたのかは知りませんが、

僕にとっては非常に良いものと感じますね。

…待ち遠しいです。早く昼休みになりませんかね。

…

「失礼しましたー」

授業の終わりを告げる鐘が鳴ると同時に、オレは養護教諭に頭を
下げると保健室を後にしていた。

「…っ。はあ、何か肩凝ったな」

ぼやきながら伸びをし、肩を揉みながら首を軽く回す。
ん？ 2時限目をどう過ごしたかって？ 始業ベルが鳴ってから

はメールも来ないんでな、また手持ち無沙汰になってしまったんだが、オレは寝ようともせずにならだと寝返りを打ってはボーっとして何とか時間を潰したわけだ。

正直言って苦痛だったね。

「…さてと」

何処で時間潰すかな。

ここで普通に教室帰るようなバカではない。ちゃんと女子の着替え時間を外し、三時限目が始まるギリギリに帰れば皆はもう制服を着ている。

そして、オレには制服を見ただけで興奮するような加齢から来る特殊性癖は無い。

だから、オレ、もう、気絶、しない。

「…む」

…すまん。何つか、まだ頭が熱暴走気味かもしれん。

オレは邪念を払おうと軽くペシペシと自分の額を叩くと首を何度も振った。

昨日と同じ様に、いつも通りに、国木田や谷口、クラスの連中と接するには余計なモノは払っておかないと。

「ふう〜……っし！」

そして、一度深呼吸をし終わるとオレはゆっくりと力強く踏み出すと我が教室である1・5を目指した。

前兆 ちょっとした不安（前書き）

第11部分です！ ハルヒコ多めな感じに仕上がってます。

今回が昼前で次は昼休になるな……えー、ではではーとぞー

前兆 ちよつとした不安

保健室から教室へと戻ると目論見通りに今・女子たち皆は既に着替え終わっており、オレは気兼ねなく自分の席に座るコトが出来た。……よし。3時限目の用意をしておくか。

「キョーソ。いきなり倒れちゃうし2時限目も来なかったから心配したじゃない。で、大丈夫なの？」

何食わぬ顔で教科書を取り出した所で、谷口が今更ながら心配げに訊いてきた。

……心配ねえ？

「そう思っただったら何で合間に保健室に来ねえんだよ？ 国木田は来てくれたぞ」

「ふっふっふ……愚問ね。アタシにはね校内美的ランキング一年男子版、スポーツの汗による相乗効果補正を加えての一年の最終仕上げをしてたのよ！ スポーツをする男子っ、进的汗を拭う……」

何やら熱く語り始めた谷口。

オレは適当に相槌をうつて軽くスルーしつつ、適当な所でオレ的最優先事項の事柄を訊いてみた。

「へ？ 保健室にどうやって運ばれたかって？」

「ああ。何か気になってな」

「…ふーん」

と、何やら一瞬だけ考え込むような表情をした後、谷口がニコツと笑う。

…ちつ、朝の補正が掛かってるな。たかが谷口のくせに可愛く見える。

「安心していいって。別に変なことはされてないし運ばれ方だって結局、普通に肩貸してただけだし」

…肩？

「そう…なのか？」

「あーに〜？ アタシの言葉じゃ信用出来ないっての……ねー、みんなー？」

と、谷口が教室に居たクラスメイトに声を掛けた。

5組の女子だけではなく、6組の女子もまだ全員残っていて、それら全部の視線がこっちに向けられる。

何でか後ろめたさというか、一クラスの女子からの視線てのは…かなり心臓に悪いなコレ。

「キョンが保健室に運ばれたのって涼宮と長門くんが肩貸してくれただんだよね〜？」

そんな問い掛けに周りの反応は至って様々だった。

5組の皆は状況を思い出すと大半が生暖かい視線を向けながら頷き、たまにちらほらと羨望やら嫉妬やらが含まれている。

次に6組はというと、皆が何やら不思議そうにオレを見つめたかと思えば、不満げなのや稀に殺意が混じっていたりと……って何で殺意なんかが混じってたんだよ？

「ま、こんな感じ。納得行っただ？」

「……まあ、うん」

という風に一連の騒動は案外早く、一応の決着が着いた……と言うか、まあ少々落ち着かない部分もあったがオレはそれはそれで納得した……無理矢理に。殺意の視線？ 気のせいと言う事にしようや。要はだ、恐る恐るフタを開けてみれば何という事はないのだ。オレは二人の肩の片方ずつを借りて足をぶらんぶらんさせながら保健室へと運ばれたというのが事の詰まりであり、クラスの連中から聞いたので信憑性は高いんだ。一件落着、一件落着だ。

「おっ！ キョンっもういいのか？」

そして3時限目間近にハルヒ達、今・男子達が教室へと戻って来ると6組の今・女子達は入れ替わりに自分達の教室へと戻って行く。ハルヒは真っ直ぐにオレの後ろの自席へと歩く。

「悪い……なんか、迷惑掛けた」

オレはそれを目で追い、ハルヒが席に座ると同時に後ろに向くと今回の事を謝った。

オレにしてみれば今回の心配を掛けたのもあるし、保健室にも運んでもらったのだ。それに対して一言も無しでは恩知らずもいいとこだからな。

「気にすんなよ。ま、あん時は驚いたけどな。有希なんかオロオロしてたし」

オレは耳を疑った。

…あの長門がか？

「おお。他の奴には見分けは付かんだろうが俺には判ったね」

正直に言おう…意外だった。

気絶している間に聞こえた会話はうつすらと覚えている。オレには冷静に対処していたように思えたのだ。

「休み時間にも謝つとけよ。顔に出さない分、溜め込むタイプだからな…安心させてやれ」

ハルヒが真剣な口調で言ってくる。

その分析は正しい。何だかんだでハルヒは長門を気に掛けてくれているのが分かる。

「ああ。分かってる」

授業が終わったなら6組に行くかと心に決めた所で鐘が鳴り、オレはとりあえず前を向いた。

「…」

3時限の授業が始まり、壇上の教師が何やら呪文のような説明をする中でオレはボーっとしていた。

理由は長門が気絶して倒れていたオレに驚いていたという事。深い理由があるとは思えないが、普段から考えれば驚きの発見だ。

「…つり…うりゃ」

人に近付いている…という言い方はしたくない。

長門は自分の事を”端末”と言い、人とは違つと線を引つ張つて
いるが、オレにとってはアイツは最初から人間で

「ほっ……てい」

…あー

「…つりつり……」

さつきからオレのポニテの先が何者か…一人しか居らんが…によ
つて弄られまくっているのを感じる。

…ハルヒコ。さつきから己は何をやつとるんだ？

「へ？ 何つて……キヨンの尻尾で遊んでんだよ」

後ろを向いたオレに悪戯が見つかつて開き直つた子供のような表
情を向けてくるハルヒ。

そう、ハルヒのヤツはポニテな彼女が出来たなら、一度はやつて
みたい遊びその1である、ポニテの先つぽイジリをやっているの
である。

「やめい……毛先が傷む」

とりあえず非常に鬱陶しいので、オレは実際にやったら言われ
るであろう言葉で制止を掛ける。

「む……う」

ハルヒの顔が見る間に強張り、申し訳なさそうな顔になった……か
と思えば途端に膨れっ面になる。

…つか、世のポニテ好きなら解るよな？ ポニテは分類としては
ロングヘアー、全体の髪質も重要だ。しかしだ、それと共に綺麗に
まとまった毛先も大事だと言うことも分かるだろ。毛先は傷みやす
い…解るよな？

「ちえ…」

「解ればよろしい」

何も言わず、拗ねてアヒル口になっているハルヒをオレは無言を
肯定と取ると後目に前を向いた。
が、しばらくすると

「…てい」

という掛け声と共にまた毛先が揺れるのを感じる。

「…」

オレは首だけ後ろを向いてハルヒを見やるが、当の本人はわざと
らしく何もしてませんという風に両手を後ろ頭にやって窓の方を見
ている。

…たく。

「…はあ」

オレは呆れながら前に向き直

「うり」

またポニテの毛先をイジリ始めるハルヒ。

…ガキか、己は？

「はあ」

毛先イジメを止めないハルヒに業を煮やしたオレは強硬手段に出ることにした。

「あ」

教師の声の中に混じる、後ろのハルヒの気の抜けた声。

オレが取った行動。それはズバリ、相手の目の前で髪ゴムを取ってポニテを解いてしまうということ。

これはポニテな彼女が出来たなら、一番避けたい事その1であり、その場で髪ゴムを外されてポニーじゃなくなるという状況を目の当たりにするダメージはポニテ好きには壊滅的なほどにデカい。

「きよ…キヨン？」

「何？」

弱々しく呼ぶハルヒに、オレはムダに満面な笑顔を顔に貼り付けて振り向くと、そこには事の重大さに気付いたハルヒの顔があった。
…今更遅いね。

「あの…ポニ」

「放課後までお預けだからな？」

「え…えと」

「反省な？」

「ぐ…」

笑顔の圧力を加えるといつもハルヒではまず有り得ない、しょんぼりとした表情になり、

「はい…」

がつくしと肩を落としてうなだれた。

流石に自分でも悪いとは思ったようで反論も何もない。オレは一息つくと前を向いて頬杖を着く…別に今までに對しての意趣返しという訳ではないのであしからず。

それは置いといて。多分、さっきでは別に閉鎖空間は出来ないであろうという確信がオレにはある。

何というか、ハルヒ自身が根は素直なのは知っている。が、こっちのハルヒは元の世界以上に根が素直であり、思った以上に融通が聞くのだ。

何故なら昨日の髪型のやり取り一つ取っても、いつもならあの時点で閉鎖空間の一つや二つ出来ても不思議ではなかったからな。

結果としては一つ出来たが上手く自分で拭えたみたいだし。

「…っ」

小さく溜め息を吐いた。

何でか…何のことはない。元の世界でもこの殊勝さがあればオレも苦労しないし、古泉達も楽なものになぁと思っただけさ。

…

3時限目が終わって直ぐ、後ろで微妙に凹んだままのハルヒの視線を背に、オレは隣の6組へと向かってみる。

「えーと…？」

そう言えば隣の組だったのに6組に寄る事って無かったような？
と思いつつ、教室の窓から中を覗いてみる。

…お、居た。

「…」

予想通りというか長門は本を読んでいた。

まるで教室の喧騒に自分は一切の興味無しと主張するかのように
外側の窓際、一番前の席で一人、黙々と読書に勤しんで…いや、何
か周りの一人二人に同じように読書に没頭してるヤツが居るな？

周りが持っているのも長門と同じく、ハードカバーで厚めの本に
見える。

…触発でもされたか？

「…？」

つと、向こうがこっちに気付いたようだ。

長門はゆっくりとこちらに向かってくると静かに教室のドアを開
き、出入りの邪魔にならないようオレの前に佇んだ。

…よ、長門。

「
…」

「えーと、何だ」

何やら長門が無言なのが少々気になったが今朝のコトを謝らなければ何も始まらない。

「長門、今朝はすま」

「心配した」

…んん？ な、何だ？ オレが皆まで言う前に長門が言葉を被せてきたぞ？

「いや…あれは油」

「心配した」

「
…長」

「心配…した」

「
…」

「
…」

…すみません。もう心配かけたりしませんから上から見下ろしてジッと睨まないで。

「睨んでない」

そ、そうか？

「そう」

まあ確かに？ 何か慣れない角度から見られてるせいでそう見間違ったのかもな。うん。

とりあえず、ハルヒの言っていたコトは本当だったんだな…と、改めて心配を掛けてしまった事に対して反省していると

「最初…」

「ん？」

長門が口を開いた。

「あなたが倒れているのを見た時、倒れた原因はわたしのせいだと思った」

「は…？」

…長門のせい？

「…て、何でだ？」

…何だ？

自分なりに何故そう思ったのだろうか？ と考えあぐねていると長門の…男になって少し切れ長になった…眼が少しだけ揺らいだように見えた。

「昨夜の治療で…わたしは何処か見落としたせいだと思った」

「まさか。そんな訳あるかよ」

ほら、オレはこの通り何処も悪くないし、元気なモンさ。つか、

「元気過ぎるから倒れたっていつか」

「……？」

オレの言葉の意味を汲み取れなかった長門のイノセントな瞳がオレを射抜く。

……まあ何だ。今の言葉は忘れてくれ。

「……そう」

長門が微かに首を傾ぐ。

それを見ているとオレはいたたまれない気分になる。

「……ホント、オレは長門に迷惑掛けてばっかだな」

「いい。気にしないで」

長門はそう言うところらを気遣うように微笑んだ。

……あぁったく、何で今、お前は男の姿なのかな。

「……？　今の段階では不都合はない。記憶野の区分も問題なく進んでいる」

い、いや、そう言うんでもないんだ。

「何でもないんだ……悪いな。読書の邪魔しちゃって」

「いい」

長門がゆっくりと首を振る。

確かに読み取ってみたが表情にはそう言った非難らしきものはない。まあ要はオレがそう思ったからというだけだ。

「そつか……じゃ、また放課後な」

「…部室で」

長門はそう言って頷くと自分の席へと戻っていく。

その後ろ姿を見送ったあと、教室から突き刺さる今・女子達の視線を避けるためにそそくさと6組を後にした。

「さて、と」

次は古泉の所だ。

オレは休み時間の内に済ますために足を早めて急いだ。

何故、約束の昼休みを前に9組へと向かったのかと言うと、理由は気絶の一件だ。とりあえず、その案件についてオレはもう既に把握したという事を伝えておかないと後々、鬱陶しい事になりかねんからだ。

で、案の定というか。古泉は…

「おや…お知りになりましたか。お昼ご飯での楽しみがちよっと減ってしまいましたね」

などと言ってきやがった。
思った通りだぜ。

「まあ、大多数の目撃証言がソレを指している訳ですし、あなたの溜飲も下がって良かったじゃないですか」

で、こう返してきた。

「ま、まあな…」

一応はホッと一息だ。

裏も取れて安心仕切りのオレだが、しかし、

「僕としては残念です」

そう曰ってはいるが古泉のいつもの営業スマイルには含むモノを感じる。

…気のせいだろうかね？

「あなたは安心しましたか？」

「ああ、当たり前だ。これで何の痼りもなくお前と昼飯が食える」

「それは良かったです」

オレの言葉に古泉がやんわりと微笑む…それはまるで部屋で出して下さるお茶をオレが美味しいですと言った時に見せてくれる朝比奈さんのそれと同じだ。

…何か

「可愛いよな。お前はホントに」
「んなつ!?!」

オレの言葉に古泉の顔が劇的に紅潮し、急に焦り始める。

…どしたよ？

「…い、いきなり、そんな、言うからですよ。い…いや、急に何を言っんですかあなたは？。来る途中に頭を打ってませんか？。どこか、打ち所が悪かったのですか？」

何とまあ思いつ切り失礼な事を言ってくる古泉にオレは軽くムカツとくる。

…失礼なヤツだな。

「オレは誰かに世辞を言うことも出来んのか？」

「世辞…ですか？ 世辞、言えたんですね……」

今度は途端に気落ちし始めた…忙しいヤツだな。

「で、それが僕に…ですか。 ……ええ、ええ。解ってるんです。あな…ってそういう人だと……」

何やらブツブツと口ごもっている古泉にオレは首を傾ぐと一旦、時計を見やり時間が余りないのを確認する。

「あー…古泉？ も一つ訊いてきたいんだが、今閉鎖空間どうだ？」

「そんなだから涼宮さんも長門さんも………て、は？ 閉鎖空間がどうかしましたか？」

「出来てるか？ って話」

古泉は一呼吸だけ宙を見つめた後、直ぐにオレの方を見やって来る。が、その視線がまた非難じみたモノを含ませている。

「まさか、また何か」

「いや、してないしてない。ふと思ったただけだ」

オレの慌てつぷりに古泉は何かを察したのか溜め息を着くと諭すような目でオレを見てくる。

「ただでさえこんな状況です。これ以上の厄介事は無いよう注意して下さい」

…確かにそうだが

「何です？」

「ハルヒはハルヒでも勝手が違うんだよ」

…だから沸点の見当をある程度は知っておきたいってのもある。

「…それで成果もなく、無駄に怒らせたただけなら流石に怒りますよ？」

その点は安心しろ。

「とりあえず向こうと違ってこっちのハルヒは融通が利くことが分かった」

「融通…ですか？」

「ああ。自分が悪いと認めてちゃんと反省してたしな」

「涼宮さんに対して何か…怒ったんですか？　あなたが涼宮さんを？」

「ん？　ああ…」

オレは事のあらましを説明する。

「…なるほど。だからですか？　あなたが髪を降ろしたままなのは」

「ああ。つたく、ポニテ好きも困りもんだよ」

…なんてな。

軽く髪を手で梳くと一房を持って毛先を見やる。少し弄られたぐらいではどうって事はないがやはり気にはなる。

「…ふふっ」

ジッと毛先を見ていたオレに古泉が何か含みを持たした笑みを零しやがった。

…あんだよ、急に笑いやがって。

「いえ、別に。ただ、あなたも充分に可愛いですよ」

「…」

…何か言われて初めて気付くな、コレ。

「な？　野郎を可愛いと称して楽しいか？」

オレは今、何だか薄ら寒いというか後悔しきりだ。

「そうですか？　僕は楽しいですよ。今は女性ですからね……お互いに」

と、言いながら古泉は男の時の笑みなど光の彼方へと消え去る程に似合うウインクをオレに向けた。

…

「ふう…」

などと、まあ…モノログでそう言うてはみたが女の子のウインクとは言え、それが古泉からというのはお尻の穴ら辺がむずむずするような感覚を覚えるね。

オレは4時限目の授業にギリギリ戻って席へと着くと早速、ハルヒに長門に礼を言ってきた事を伝えた。

…が、返ってきたのは

「…ふーん」

…いや、ふーんって何だよ？

「何か気の抜けた返事だな」

「…気のせいだろ」

ハルヒがムスツとした顔を窓に向けたまま、視線をこっちに……いや、髪の方に向けている。

オレは小さく溜め息を吐き、ジツと不機嫌なハルヒの横顔を見つめ

「……放課後な」

「……分あつてるよ。はあゝああつ」

釘を刺した。

オレの言葉にわざとらしくもやるせなさ満開なハルヒの溜め息を背に受け、オレは授業が始まるので前を向いて形だけでも受ける態勢には成っておく。

これが終われば昼休みで約束通り古泉と屋上で昼飯

「……？」

日差しに釣られ、ふと窓を見やる。

外は快晴であり、風もあまりなさそうだ。屋外……それも屋上だろうと風は弱々しいもので肌寒さも感じない、正にぽかぽかとした春といった風だろう。

そんな事を柄にもなく考えていると何やら顔がにやけてしまうのが自分でも妙に可笑しく、不思議な感覚だった。

相手が古泉だとは言え、女の子とだからだろうか？

『今は女性ですからね……お互いに』

……つか、オレも今は女の子だわな。

古泉もこんな風を感じているのだろうかと思つ……なんてな。正直に言つと”オレ”は薄ら寒い感覚を覚えている。

「……………」

だが、”あたし”という感覚が待ち遠しさを覚えているように思う。これは昨日に感じた意識とは別の感覚か？

お粗末な情報量だが記憶を見た今だからこそ、この世界のオレの感覚なんだと納得出来る。

気にならないと言えば嘘になるんだが、この世界の記憶がまだまだ依然として発掘途上であり、長門曰わく徐々に掘り起こされると言っていたが、それは何時になったら来るんだ？ という状態。

「…はあ」

取っ掛かりもないから気にしても仕方がないというのが現状だ。

「…ヨン」

ん…？

後ろの人がトントんとオレの背中を指で叩きながら

「キヨン」

小声で呼んでいる。

…今、授業中だぞ。ハルヒコ？

「お前の口で言っても説得力無えての」

…だよな。

オレは身体を横に向けて窓にもたれ掛かるとハルヒを見やった。序でに言つと教師は既に諦めているのか、チラリとオレ達を見ただけで気にも留めずに淡々と教鞭を振るっている…いやはや、すみ

ませんね。で？

「…どした、ハルヒコ？」

「…どうかしたのはお前の方だ。またぞろ溜め息ばかり吐きやがって」

…そうか？

単にそう見えるだけで外面は憂鬱そうでも内面はフル・スロットルでハイなテンションかもしれんぞ？

「…それって完全にラリったダウンナー系だな。で、クスリでも切れて鬱ってか？」

…人をヤク中みたいに言うな。

「…なあ」

「ん？」

「…そんなに溜め息ばっかだったか？」

その言葉はハルヒに対してはあまりにバカらしかった。

そもそもオレがいつもハルヒに対して思う事であって、それをオレの口から出すとは…立ち位置が逆じゃねえか。

「ああ」

そしてハルヒはさも嬉しげに笑い、まるでそれを解消するのが俺の役目だと言わんばかりに

「やつといつものキョンって感じ。くくっ…今日は何すっかなー」

この世界のハルヒは言った。

これがこっちの世界のオレの常らしい…それ、冗談だよな？

…

昼休み。

古泉との約束を守るためにオレは今、昼飯が入ったコンビニ袋を片手に9組へと向かっているんだが、9組へと向かうオレの足取りは

「…はぁ」

…重い。

この世界のオレはハルヒみたく日々の憂鬱を嘆いていたってのは記憶で見たんで何となく分かってはいたんだが、改めて面と向かって言われると何でか、”オレ”自身もモヤモヤする。

…何でだあ？　なぁ、説明出来るヤツ、そこに居るか？

「…はぁぁ」

実は足取りが重い理由がまだある。

教室を出る際、谷口と国木田に今日は一緒に飯は食えないと断りを入れたんだが、谷口が食い下がって来て大変だった。

「えーっ、何、誰と食べんのよっ？ ま、まさか朝比奈先輩とか長門くんと！？ ちょっとアタシも同伴させてよーっ！！」

いや、何、全力で勘違いしてんだよ。違うっての。

「ち、違うの？ そっかぁ……はっ！？ ま、まさか鶴屋先輩っ？ うっ……うわぁーんっ何でキヨンの周りは涼宮から始まってAとかSとかA+が集まって、あまつさえお近づきになんのよっ！？ アタシなんか撮影のそれっきりなのに不公平だぁーっ」

「そ、そんなんじゃないって。な？ 喚くなよー」

「うらぎりもの……」

が、谷口は意に介さず延々とグチグチ言っただけで収まる様子もない。

「キヨン」

そんな風にオレが谷口を宥めていると国木田が何故か声を潜めて呼んできた。

…国木田。見てないでお前も谷口を

「もしかして、古泉さん？」

「ああ……」

…何が、もしかしてかは敢えて訊かんがな。

「そっだが？ それがどうかしたか？」

と、オレが首肯すると国木田は珍しく神妙な顔付きになのが印象的だった。

そして国木田は注意するようオレに促してきたのだ。

「最近、古泉さんの周りが慌ただしくてピリピリしてきてるからキョン、気をつけてね」

オレの脳裏に昨日の休み時間、今朝の9組へ向かう途中の光景が浮かび上がってくる。

「…中学からの友達としては、本当ならここで行くのを思いとどまらせたんだけどね」

…オレはそんなの知ったこっちゃないね。

「忠告は有り難いけど」

「て言うより、だから古泉さんと一緒にご飯食べるんだよね」

「…」

「でしょ？」

「…ただの団員同士の交流だ」

仏頂面でそう言うオレの表情など気にもせず、国木田は仲が良くて羨ましいなあなどと言って微笑を向け、言葉が詰まったオレの横をすり抜けると縮こまっている谷口を宥め始めた。

「グッチはわたしに任せてよ、キョン」

いつの間にかその場で縮こまってしまった谷口の傍らで一緒に屈

んだ国木田がこちらを向くと、後の事は任せて…と言ってきた。
…すまん、クニ。

「今度、何か奢るから」

そう言つて教室を出たオレは国木田の行つてらっしゃいを背に受け、そして今に至る。

この国木田の忠告がもう一つの理由だ。

「…気をつけて、か」

そんなオレはぼそりと呟いてみたりもするが、昼休みの喧騒に掻き消されて自分の耳以外に誰の耳にも届かない。

変わらない…性別が反転したとは言え、周りは至つていつも通りの日常。そのせいで圧倒的マイノリティに属しているオレ達自身の間違つているのでは？ と錯覚を覚えたりするが、それこそ多数派だからってそれが正しいとは限らないというのを表している。

ふむ。この状況で例えると民主主義の欠点がよく解る、分かりやすい良い例だな。と、そんな事を考えながら待ち合わせ場所である屋上へ上がるための踊り場へと向かった。

不動 非日常の脅威＞日常の脅威（前書き）

第12部分ですっ！ というより、すみませんっ、今回は時間が掛かってしまいましたぁっ（土下座

また約ひと月も開いてしまい…反省してます。

えと、今回は昼前編の続きで昼休み編となっています。少し、内容がドタバタしてて上手く表現出来てるかな…（不安

いや、不安がるな私！

よしっ、第12部です！ では、どぞーっ！

不動 非日常の脅威＞日常の脅威

「
…
…」

…えー、この三点リーダーにオレのは混じってない…つか、入ってない。

オレなら

「あー…」

これだ。

オレは今まさに屋上へと繋がる階段の手前に居り、古泉との待合せ場所である踊場はすぐ目の前だ。なのに、オレの足は止まっている…と言つか、止められている。

ある第三者達に。

「…古泉以外呼んだっけか？」

「
…
…」

…つか、何か喋れよ。長門か、お前らは？

まあ何だ。足止め、という程には特に何かをしている訳ではない。向こうは単にたむろってるだけだ…こっちを見ながらな。

また、その顔ぶれが…目の前に居る連中には見覚えがあった。
…はあ、

「昨日…つか、今朝もだな。何か用かよ？」

「別にないわよ」

…無いかい。

「屋上は使用中だから回れ右して教室に帰ってくれないかな？」

「残りの高校生活、楽しく過ごしたいよね？」

「過ごしたいよね？　って、そりゃあ過ごしたいですよ。」

「つか、別に言われんでも高校生活を満喫するよ」

と、まあ売り言葉に買い言葉とばかりに何を言ってるのかね、オレは？

案の定、向こうのお三方が何やら剣呑な表情にお成りになられました。流石に6つもの睨みの視線が集まるとまるでハルヒに軽く睨まれてるような感覚だ…て、これで”軽く”か。

そう言えば一クラス分の女子達に視線を受けたってのに思ってた程には差ほどにも動じなかったな、オレ。

「早く教室に帰りなさいよ」

「…まあ、待て」

ゆっくりと道を塞ぐ女子達の前へと歩を進める。

「しつこいわね」

…自分でもそう思う。

「まあ、何だ？ とりあえ」

「そんなに古泉さん気になるの？」

オレの言葉にいちいち口々に何かしら反応していた三人の内の誰かがそう言った。三人の女子達の目の前でふと足を止めると溜め息混じりに一人ずつ見やった。

…いや、それは関係ないぞ。ただ、

「とりあえず、退け」

それだけだ。

こんな事言っておいて何だが、オレも出来ればこの場は穩便に済ませてから通りたかったんだ。

「な？ これって昼飯を後に回してでもしなきゃいけない事なのか？」

だが、何でか本音が口から漏れちまっていた。

「あんたら見たところ何も持っていないよな？ そんな食う時間すら惜しんでまで熱心になるのは良いが、やってる事は世間に顔向けも出来ない後ろ向きな事ってそれって意味あんのか？ つか、楽しいか？ それとも自己満足か？ それか、誰かを虐げる事で愉悦に入ってるのか？ もし本当に悦に入るような嗜好なら悪い事は言わん、午後の授業とかは良いから今すぐ早退して精神科医とかのカウンセ

ラーに診てもらえ。クラスと名前を言ってくれば、昼休みが終わる前に各々の担任に話を着けといてやるからよ。な？」

「「「「「」」」」」」

いつもならモノローグの中で済ます文が口をついてしまった。しかも、淡々とした口調で言い切ったのも驚きだ。

過去に自分がここまで他人をこき下ろした事はない。

オレは基本的に事なかれ主義だ。昔にエンターテイメント症候群だとか言われたが、自分の身が危険に晒されるような物事に首を突っ込む程オレは物好きじゃない。目に見えて危ないと解るなら尚更だ。

なら、何故？ と問われると…はて、ナニユエ？ と、胸中で首を傾いでみる。

「…」

「…」

「…」

その間、表向きには平然と囲んだ輪の中心で道が開くのを待っているオレ越しに、三人が何やら思い々に互いを見やり始めている。この子ら…いや、元が男子だからコイツらで良つか…コイツらは多分、真っ正面からこうも自分達のしていることに指摘された事が無かったのかもしれない。

今もこうして自分が毅然としているのも、この一年ほどで色んな事象に揉まれまくったお陰か。

伊達では無いというこつた。さて、

「…まだ邪魔すんのか？」

「……」

実質、行く手を塞いでいる一人に訊ねる。

予想に反して、あまりに動じもしないオレに目の前のヤツは動揺し、目が他二人の方へと泳いでいる。

……もう一押しか。

「……屋上で絡んでるアンタらのお仲間にも今言った、同じ事を言わんとならんから早めに道を空けてほしいんだがな」

「……………」

視線を離さず、ジッと見る……ただ見るだけ。

睨むだの威嚇するだのの感情を込めるのはこの際、二の次。視線を逸らさず、相手をただ見る……それだけだ。

そうして、

「……………はい」

向こうは折れた。

「……。ありがとな」

とりあえず、道を空けてくれた事に礼を言う。まあ実際のところ、先に向こうが折れるのは分かっていた。

相手は既に道を塞いでいて自分達の有利な条件だった……だから先制してきた。数的優位にも立ち、そこから睨みを利かせ、言葉で威嚇すれば普通は向こうが勝つ。

だが、オレはそれを真っ向から受けてそのまま返り討ちにした……つか、当たり前だ。

土俵はヘンテコ能力で変わってもいない普通の廊下でしかなく、数的優位とは言え素手の相手なぞ脇腹刺された修羅場を経験させられたオレには通じないし、散々ばら不機嫌なハルヒの睨みを受け続け、稀に来る長門の絶対零度の視線を受けてきたんだ。今更、一介の女子高生三人の睨みなど歯牙にも掛けんつての。

「ちょ…いいの？ ヤバイよおっ」

「…し、知らないし。実際、誰か来ないか見ててって言われたただけだもん」

「そうだけど…」

道を譲った事でざわつき始めた三人。

この中でのリーダー格が、先程まで道を塞いでいた女子が他の二人に言い寄られ、つつけんどんに言い訳している。

「……早く行きなさいよね」

「…んん」

…と、悪い悪い。

咳払い付きで手で払われ、オレは階段を昇る。

「…あ」

すると、オレの背後から聞こえてくる、小さい音なのに喧騒に混じっても尚も自己主張激しい、空腹を訴えるお腹の鳴る音。

「…今からの学食、席空いて座れるかな？」

「…はは。それ無理」

「…あー、ヤバ。何か、ホントに後悔してきた」

切ない空腹からか、意気消沈気味にその場で猛省し始める三人。
…今日までの経過は知らんが、んな事あ解りきった事だろうに。

「…購買で何か買」

「今からじゃ、もうジャムパンぐらいしか残ってないわよ…」

「…うう昼抜き…ダイエットしたと諦めよ」

…はあ。

オレは足を止めた。

「…？ 古泉さんなら言っとおり屋上に居」

…ホントお人好しだな。

オレは踵を返すと階段を数段降り、階下で話し合っていた女子達
三人の側に持っていたコンビ二袋を置いた。

「…オムそば一個しか無いから、ちゃんと三等分しろよ」

「は？」

「え、ちょ…」

「何のつもりよ」

…さあな。オレが知りたいぐらいだ。

「飲むモンも500が一個しか入ってないからな」

「…これじゃ」

…ん？

「ホントにわたし達がバカみたいじゃない…」

…そうかい？

「気付けただけ良かったと思うけどな」

「っ…」

そう言うリーダー格の女子が何も言えなくなって口を嚙み、他の二人も俯いて互いを見ている。

…さて、

「あとは屋上で古泉に絡んでるバカか」

「…男子」

途端にリーダー格の女子が口を開く。
ん？ 男子？

「…野郎が居んのか？」

「あの子、二人連れてた」

ふむ。特に心配はせんが少し急いだ方がいいかもしれんな。
オレは再度、踵を返して階段を昇る…と、その前に

「ありがとな」

「っ？」

オレの振り返ったの突然の御礼にリーダー格の女子が何やら驚いている。

「な、なにが？」

「なに？ って、事前情報」

何の御礼かを説明するとリーダー格の女子はコンビニ袋をひっ掴んでオレの方へと突き出した。

「これの御礼よっ。いい？ これで貸し借りないんだからね！？」

「了解りよーかい。ちゃんと分けるよ、三等分」

「こっちはいいから。早く古泉さんの所行ってあげてよ…」

「ん。じゃあな」

向こうがどうなっしまっているのかと心配気な視線を受け、オレは階段の先、屋上へと出る扉へと向かった。

まあ、差して距離はなく、オレは難なく階段を登りきると今まさに屋上へと繋がる扉を目の前にドアノブをひっ掴んだのだが…

「……？」
「っ！……？」
「……、……」
「……？……っ」

外から聞こえてくる喧騒のせいでタイミングが掴めない。

「何、言ってるんだ？」

そう、屋上へと出る扉からは騒ぎ声が聞こえてきている。
事前情報が確かなら、古泉は野郎二人を含んだ三人に絡まれていることになる。

オレはドアに耳を当て、外の様子を探してみるが内容とか誰が騒いでるかまでは聞き取れる程には聞こえてはこない。

「出てった方がいいんだろうか……？」

オレはそう誰にとも無く独りごちる。

今、扉一枚挟んだ向こうには古泉に絡む三人……本当の意味でのイジメのリーダー格が野郎を二人連れて陣取っているらしいんだが、案外そんなに気を揉まなくてもいいような気がしないでもないんだよな、実は。

「……ふう……っ」

まあ、かと言って、このまま事が済むまで静観しているってのは性に合わんし。

オレは意を決して出来るだけ音を立てずに”少しだけ”扉を開け、外の様子を確認する。

隙間から見えてきたその光景はある意味、予想通りの光景だった。

「っ……っ」

「おいつ、すっかりしろって!？」

敷地のほぼ中央で野郎の一人が尻をこっちに向けて地面に蹲って身動きを止めており、無事な片方が頻りに横で声を掛けている。

「流石に吃驚しちゃったから脇腹：肋骨に罅が入ったかな？ あ、折れた音はしてないから大丈夫よね？」

そして大の男子高校生をノした古泉がいつもの0円スマイルを浮かべながら、その相手に対して突き刺したであろう左肘を軽くさすっている。

「…あ、あんたっ人の骨に罅入れって言うのはそれだけっ!？」

そんな古泉に完全に腰が引けながらも指差し、非難している女子：あれがイジメグループのリーダー格か？ …の後ろ姿が見え、野郎二人の横で喚いている。

そんな非難を浴びる古泉はというと、まるでどこ吹く風と言わんばかりに飄々としている。

「一応、これって正当防衛に入るんじゃない？ か弱い女子一人に男子二人：男子は上背があって体格もいい。力づくで組み敷かれそうになった所で思わず抵抗したら、わたしの肘が不幸にも彼の肋骨の脆い部分に入った、みたいな感じで納得してくれるでしょうね」

しれっとそう言い放つ。

確かに2対1、襲う側は男2人なのでこの抵抗は正当防衛だ。しかも見た所、蹲る男子に一発を叩き込んだだけのようで、それだけ

なら過剰防衛とも取られないだろう。

「……ちよつとつ、そんな奴放つといてサッサとあの女襲いなさいよ！」

「あつ？ 知るかつ！ つか、あのエロい身体こっちの好きにして言いつーから来たつてのに古泉がこんな女つて聞いてねえぞ！？」

「し、知らないわよつ！ それより何、三年のクセに一年の女子に負けちゃつてんのつ？ それでも男！？」

「ああつ！？」

……なあ。何か雲行き怪しくなつて来てないか？

無事な方の野郎……三年？ あんた時期的にこんな事していいのか？ ……は徐に立ち上がると古泉に向かわず、自分達の横でヒステリーを起こしている女子の方へと近付いていく。

「な、何……っ？」

「黙つて聞いてりゃあ好き放題言いやがりやがつて……っ」

その男子上級生の横顔はもう怒り心頭という風で、今にもその女子に暴力を振るわん雰囲気だ。

女子もその雰囲気を押されてか、半歩ずつ後退っている。

……何か、マズいな。場外乱闘になりそうだぞ？ 古いぞ

「……おい」

オレは思わず呟いた。と、言うのもこの状況をどうするのかと思

い、古泉の方を見やったのだが当の本人はもう我関せずと言った表情で携帯の時計を見ていたのだ。

それは、これからどういった行為が目の前で行われようと自分には知った事ではないと見て取

「ぎゃっ」

突如として聞こえてきた悲鳴にオレは再度、二人の方に視線を向ける。

そこには拳か平手では判らないが、腕を完全に振り切っている野郎と赤く腫れた頬を押さえ、脅えた表情で殴った当人と古泉の方を何度も見やつている女子。

…おい？ …助けねえのかよ古泉？

「…た、助け」

「はあ…っ。自分の都合が悪くなったら誰彼かまわず…っ…それもさつきヒドい目に遭わそうとしたわたしに助けを求めるのって、虫が良すぎない？」

「ひ…っ！？」

声を引きつらせる女子。

無慈悲な笑み…というモノをオレは初めて目の当たりにしたような気がした。

「…」

女子に詰め寄っていた野郎も動きを止めて古泉を振り返っている。オレはそんな今まで見せた事もない表情を見たせいか、これ以上放っておけばあの女子が危ないと思うと身体が勝手に動いていた。

「っ？ いっ！？」

野郎が開け放たれた扉が壁に打ち付く音でこちらに気付いて振り返ってきたが、その時にはオレの両足は既に地面からは離れており、トップスピードの勢いと全体重がノった靴底はもう相手の肩口にめり込んでいた。

「っ…がっ？！！」

「古泉っ！」

「彼女の人の良さに感謝してよ、ねっ！！！」

奇襲を予期していなかった為か、三年男子は意図も簡単にこの激突で体勢を崩し、大きくよろめいた所で間合いを詰めていた古泉が野郎の頭を片手で持つと、そのまま相手の顔…鼻っ面に膝をめり込ませた。

「ぐが…っ」

オレと古泉によるツープラトン。

めり込む鈍い音と鼻の骨が折れる乾いた音が響くと男子上級生は膝から前のめりに倒れ、そのまま悶絶する。

オレはドロップキックをかましたせいで捲れ上がってしまったスカートを素早く正すと立ち上がって古泉を睨んだ。

…古泉お前、

「コイツが目の前でヒドい目に遭ってもただ黙って見てるつもりだったろ？」

「まさか」

オレの追及に古泉は心外なと言わんばかりな表情をする。

「そんなワケないけど？ 流石にこれ以上は貞操が危ないかなって
なったらちゃんと助ける予定だったし」

…ホントかよ？

正直、あの科白聞いた後じゃそんな言葉に信憑性なんぞ露ほども感じんぞ？

そんなオレの心でも読んだのか、古泉は肩だけ軽く竦めると偽悪的な笑みを浮かべる。

「ヤダなあ。ちゃあんとアナタが見てるって事に気付いてたし、彼女がヒドい目に遭うのを見過ごせないってのも分かったもん。だから、連携プレイも上手く出来たでしょ？」

…結果論じゃねえか。

「つか、誰がお人好しだ」

「ん、違った？」

ニマニマとした笑みをオレに向けてくる。その笑みが暗に、現にイジメてる側の人間助けてるじゃないですか？ って感じた。

オレは人として当然の行動をしたまでだ。確かにコイツには自業自得とか因果応報だとか言いだしたらキリがない。だからって度が過ぎた行為は見過ごせない。

「先程までその度が過ぎた行為をされそうになりましたけどね」

「…っ」

明確な自分に向けられた言葉に女子は肩を震わせる。

実際に自分の身にやろうとした事が降りかかった事でその恐怖というものを肌身を感じたのだろうか…いや、単にオレ達にビビってるだけか？

…何か言いたい事あるか？

「つか、礼でも言いたいかな？」

「誰がっ」

オレの言葉にキツと睨むと強気に言い放った。

さっきのいい加減懲りただろうにどうやら向こうも吹っかけた意地があるら

「だよねえ。ここまでやっという後に引けないもの」

…は？

なんの冗談か、古泉がその意地を肯定するようなコトを言い出した。

当の古泉には昨日今日で随分と参っていたのもあってか、今回の事で流石の温厚仮面も腹に据えかねる気持ちも分かる。

だからって相手を煽るってのはどういうことだ？

「……っ」

女子は何も言わずに奥歯を思いつ切り鳴らして睨み上げ、古泉は0円スマイル…のような若干違うような…で受け止めている。

よし。今日何度目になるかの完全完璧な蚊帳の外だな。なし崩しに状況に首を突っ込む羽目になったオレを無視するとはいい度胸だ。

「なあ？」

「…何？ あんたは部外者でしょ」

「…」

二人が割り込んできたオレに視線を向けてくる。

古泉は何も言わずに見慣れたいつもの微笑みの仮面でこっちを見ているが、女子から発せられる視線は完全な敵意。

…この程度の睨みで引っ込むかよ。

「悪いが、オレはもう部外者じゃない」

だが、もうこんな事は二度と御免被りたいのは確かなので、さっさと済ますことにする。

古泉に言いたい事があるがそれは後回しにし、まずはこんな状況を作った首謀者に先の三人に言い放ったモノと同じ口上を言うため、オレは睨み続けるコイツを真っ正面から受け止めジッと諭すように見つめた。

…

「…」

「……」
「はあ……」

少々、こき下ろし気味にはあるが何とか説得し納得させ、これ以上のちよっかいはいしない約束を取り付けたオレ達。

例の三年男子二人は未遂とは言え、実行しようとした事が事なのでそのまま春の日差しで光合成してもらい、とうとう頬が腫れだした女子だけを連れて屋上を後にした。

校舎へと入ったオレ達は溜め息と無言のまま階段を降りていくと下の階から、

「真ん中はわたしの！」
「ちよ、じゃんけんよっじゃーんーけーんーっ」
「最初は、グーだからねっ」

妙な緊張感を孕んでいたオレ達三人に満ちていた空気を一気に霧散させるそんな声が聞こえてきた。

…何だ、何だ？

「……最初は……っ」

身を乗り出して見やると三人組が真剣な表情であいこを繰り返していた。

その脇を見るとオレが渡したコンビニ二袋は未だに手付かず。

「…まだ食ってなかったのか？」

「へ？ あ……」
「あー」

声に気付いた三人組が一斉にオレを見やると何やら恥ずかしそうになるが、すぐ横に居る”お友達”と古泉を見て一気に跋の悪そうな表情に

「…」

いや、なったのは取り巻きの二人だけで最後まで行く手を遮った女子はジッと”お友達”を無言で見やってるな。

「話…着いたの？」

…おう。

オレは傍らに視線をやると、その女子はゆっくりと踊場へと降りていき、三人組に向かって口を開く。

「…もう終わり。ちょっとはいもう掛けたりしない」

「そう……分かった」

二人はお互いそれだけを言うと興味を無くしたかのように目を逸らし合う…それほど仲は宜しくないのかねえ。

「…ね、ね。男子が居ないけど？」

「あ、ああホントだ！ どうしたのっ？」

下っ端…でいいのか分かんが…の取り巻き二人がご苦労なこつて場を和ませる為に気を利かせてそんな事を訊いてくる。

ああ、あの三年な。

「オレと古泉でノした。二人して上で伸びてるよ」

と、答えると二人はかなりギョツとしてオレと古泉を交互に見やり、二人のまとめ役の女子も少し目を見開いている。

確かに信じられんだろう。体格差から言っても運動部だったのか、ガタイが段違いに違ったからな。まあ、上手くノセれたのは登校途中の時に聞いた、古泉曰わくの”森さんの訓練”…多分、内容は対人戦闘だろうな…に依る事が大きいだろうな。

「誰かを呼ぶのも何だしソツとしといてあげてね？」

古泉がニコツと笑い掛けると二人はビクツと身を縮こまらせて身を寄せ合う。

…落ち着け、古泉。

「無駄に脅えさせんなって……そっちも、とりあえずややこしい蟠りは無くしたからさ、安心していいぞ」

「…」

古泉を窘めなければいけないというレアな事をしつつ、未だに寄り添ってビクついている二人にそう説明するとホツとして離れる。

「…だから、」

オレは視線を再度、横に居る騒動の首謀者である女子へと向け、ジツと見つめる。

「屋上のは口約束とは言え、約束は約束……キチンと守ってくれるよな？」

「…」

女子はしばらくオレを見た後、古泉の方を向いて頷き、三人組の方へと歩いていく。

多分、ちよつかいはこれ以降はぴたりと無くなるだろう…向こうの”実力行使”を真つ正面から返り討ちにしたらわけだからな。

それを確認するとオレ達はゆつくりと階段を降り始めながら、古泉を見やって今から何処で飯を食うか訊いてみた。

何せ、今ここの屋上はノびた三年が転がって光合成しているので使えんからな。

「そつだなあ…部室、にする？ この際だし」

周りに人が居るせいか、いつものムカつく丁寧語ではなく軽い調子で話す女子の演技のままだ。

ホント徹底してるのな。

「…か。まあ、あそこなら茶もあるし」

オレ達は淡々と階段を降りていき、イジメグループの脇を通り抜ける。

通り過ぎる間は時折にこつちに視線を向けて来るが、一応は敵意はナリを潜めている…というか、三年をノしたせいか逆にビビられてる感がある。

「っ…」

つか、その取り巻き二人の内の一人と目が合った瞬間、いきなり視線を逸られた。

…ま、まあ結果はどうあれ？ これでもう御の字だろ。

「僕としてはまだまだ納まりが着かないんですがね」

周りに口調を気取られないよう、顔を近付けてきた古泉がそう囁いてくる…しかもエラく物騒な内容で。

もう事態は収まるうとしているというのに、粘着気質な。

「意外とネチっこいんだな」

「被害者ですから」

「…ふむ」

足を止めて古泉を半眼で見やる。その表情は確かに納得仕切れてません分が窺える事が出来るが、そんな表向きなモノに引っかかるか。

…そうかい？

「案外、別にもうどうでもいいと思うってたんだがな」

言つと古泉は、おや？ と意外そうな顔をしている。
はっはっは、それぐらい分からいでか。

「伊達に長門の表情分析担当じゃないぞ、オレは」

「…なら、もう少し先へ行きましょうか」

…ん？

古泉が視線を向けていた先に釣られ、そっちを見やるとイジメっ娘四人組がこっちを見ていた。

確かにこの場に留まったまま喋っているとイヤでも顔を突つつき合
わすことになる。だから、それは気不味いし早く何処かへ行っちま
えかと思っただが、

「……」

まあ、イジメっ娘リーダーは確かに睨んでいる。が、三人組のリ
ーダーは睨みプラス頬が何故か紅潮…取り巻き二人は普通に顔が真
っ赤だ。

何故に？

「…とりあえず、こちらの話を聞かれるのも何ですし」

「？ まあ、そうだな…」

そんな視線を受けながらオレはとりあえず四人に、じゃあ…と
告げてその場を後にする。

何だろね？ 背中にあの四人の視線を受けていると何だかむず痒
いというか。今なんか首とか耳に生暖かい吐息が現在進行形で掛か
っついて寒気がする…って

「…近えよ、古泉」

「おや、残念。気付かれましたか」

今、肩越しに古泉の存在に気付いたオレはその近さに一瞬、言葉
を失うが何とか非難することが出来た。

「何が残念だ………ったく」

しかし、こうして部屋へと向かう中、古泉の奴はずっとオレの肩に手まで置いて顔を近付けていたのか。

気付かなかったオレもどうかと思うが、肩の重さが途端に軽くなっただぞ。

…っと、それはそうと。

「何でしょうか？」

「さっきの続きだが結局は本当にどうでも良いんだろ？」

オレの問いに古泉は一瞬の間を空け、

「一応は、イエスと言っておきましょう」

と、答えた。

「一応、ね…」

何か古泉が偽悪的な笑みを浮かべている。が、そう表現出来るのもそれがワザとだと見破っているからだ。

だから、もう一度言っぞ？

「そんな表情見せても無駄だからな、古泉」

「…」

「…」

「……いやはや。どうにも…」

大袈裟に肩をヒョイと振るわせながら、そうにこやかに笑うとい

う自然な笑み…ここ最近では見ることもあるレアな表情だ。

「最近のあなたには含みの部分というモノを隠し通せませんね」

まあ、何だかんだで一年近くの付き合いだしな。

「序でに言つと今のオレはお前の笑みが演技か否かも判るぜ？」

「ふふ…本当に見破れているやら」

余程の自信か、また元のイケメンスマイルに戻る古泉。

さつきも言つたし何度も言うが、長門の表情を汲み取り続けた経験は伊達じゃないんだよ。

…でもまあ、

「今のお前なら兎も角として元の姿の是非には興味ないがな」

「それは…また、どうしてです？」

そりゃあ当たり前だろ？

「何が悲しゅうて男の顔をまじまじと見なきゃならんのだ」

同性であるイケメン面見てるよりもすれ違う者が全て振り向くような異性の美少女の麗しい御尊顔を観察して見る方が良いに決まっている。

「…」

「男のお前さんならオレの気持ちも解……て、どした？」

ふと横を見やると古泉の姿が無く、怪訝に思つて後ろを振り返つてみると何やら俯いていやがった。

何か、どうかしたのか？ と窺つてみるが前髪で隠れていて表情が見えない。が、耳は見えている。て、何か耳がやたらと赤いぞ。大丈夫かよ？

「屋上で風に当てられ過ぎたか？」

「え…い、いえつ。僕は至つて大丈夫です。お気になさらずに」

何か意を決したかのように顔を上げながらそう言い張る古泉。確かにフラついても辛そうにも見えない。

…しかし、そんなに顔を赤くしてて大丈夫と言われてもなあ。

「…でしたら、その口を一先ず閉じていただければすぐにでも治りますから」

「…は？」

「いえ、深い意味はないんです。とりあえず、閉じていただければ」

…どういう意味なのか何かは知らんが、それが何でお前の顔が赤いというその事実関係にどう繋がるんだ？

「…不適切な表現を不適切な相手に行い…且つ、それを無意識にそれを選んでは無自覚に対象を煽ってしまう。そして返ってきた反応が異性への好意であっても何事も無かつたかのようにスルーとは…」

…」

返事も返さず古泉が何やら妙な眼差しだけを向けながら誰にともなく……一応オレ、か？ ……ブツブツと曰っている。が、これ肝心のオレにはこの内容は聞こえていない。

……なあ？

「……流石と言いますか、呆れて何も言えないと言いますか……」

「な、何をブツブツ言っただ？」

ふと無視されてるような気がしたので少し声を張り上げ気味に尋ねると、何やらビクツと身体を強張らせたかと思うと顔を上げ、いつものインチキスマイルになった。

「……いえ、こちらの事です」

「そうか？」

……良く聞こえなかったんだが、オレの事を貶してたように思うんだが。

「とんでもありませんよ。改めてあなたの凄さを認識していたまです」

……もういい。あからさまなおべっかなんか使いやがって。

当てつけに不機嫌な顔を見ると古泉は困った表情を浮かべながら笑いをこらえる仕草をする。

「おやおや……拗ねちゃいましたか？」

「誰が拗ねるか……いや、拗ねたっつーか、機嫌を損ねたね。傷付

いた。慰謝料として部屋に着いたらおにぎり一個よこせ」

「僕が買ったおにぎりの一つは心配しなくとも必然的にあなたの手に渡りますよ」

…む。

その返事のせいでオレがおにぎりの催促として突き出した手が行き場を失う。

古泉の言葉を真に受けるなら三つ買ったのはワザという事だ…これでは罰には成らんではないか。

「…なら、一個ともう半分を貰」

「所有者の権利としてはその要望は却下です」

皆まで言う前に古泉が却下の言葉を被せてくる。

…むむむっ。

「あの場を執り成したオレには当然の権利だと思うんだが？」

「その主張はあなたのお人好しが招いてのモノですからね」

愉しげにオレの要求を無碍にする古泉。

こ、これはマズいぞ？

「オレの昼飯、あの三人ぐ」

「それについても以下同文です」

…頼む、古泉っ。

「流石に一個じゃ午後からが保た」

「残りはお茶で空腹を満たせばどうかと？」

昼抜きという事態を回避するために必死に縋りつくオレに対して
朗らか表情でにべもなくあしらっていく古泉。

元の世界じゃあ絶対に有り得ないであろうそんな戯れ合い…オレ
の方からは必要以上に触ったりはしてないからな？ 主に古泉から
だからな…をしなから部室の方へと向かった。

昼休 泣き顔・不貞寝・大義名分（前書き）

第13部分ですつ！

うーん…前回に続き、今回もひと月掛かってしまいました。
半月内を目標に執筆を頑張ったんですが…情けない限りです。次こそは何とか半月…えと、11月の初旬に更新出来るよう頑張ります！

では、第13部分ですつ。では、どぞー

昼休 泣き顔・不貞寝・大義名分

いつもの癖というか習慣というか、朝比奈さんとのアクシデントを避けるためのノックをまだ昼休みだというのにしてしまってから気付いたのだが、

「……」

誰も居ないと思っていた部室の中からは無言の気配が返ってくる。

「……あ。だよな」

何を根拠にこの時間帯は誰も居ないなんて思ったんだろうな、オレは？ 少し考えれば解るこつたるうに。

「どうしました？ 鍵なら僕が持」
「いや……」

オレは鍵を取り出そうとする古泉を手で制すと躊躇なくドアノブを回す。

「？ ……っ」

…今、扉を開けているのだが、昨日の時点では気付かなかったな。元の世界も大概だと思っていた部室の扉の扱いっ振りはこつちの方がヤバいらしい。

部室の扉の耐久力もレッドラインか0を割っているのか、若干の

開けにくさを覚える。とは言っても開かないわけではないが…意識してみると明らかに重い。いがんでんじゃねえか？　これ。

こう、どうにか開けきって室内が見渡せた所で後ろに居た古泉が、おや？　と呟いたのが聞こえた。

…ま、そう言うこった。

「よう」

「…」

いつもの定位置にパイプイスを置き、部室内の一景色が如く静かに鎮座している長門。

後ろから中を伺った古泉も長門のその姿を認めると開いていた理由も納得したようだ。

オレ達二人の視線を受けて長門はハードカバーの分厚い本からスツと顔を上げるとこちらにジッと視線を投げてくる。

「来てたんだな、長門」

「そう」

オレの言葉にミリ単位で頷く。

改めて見やってみると例え、性別が変わっていても変わらない仕事・雰囲気は各段に伸びた上背でも、元々の寡黙さと線の細さが相俟っていてそれもあまり変わらない。

「昼休みはいつも此処に居る」

ただ、そうと分かっているても今の姿に残念さを感じてしまうのはオレのエゴなんだろうかね。

「そつか。昼飯もここですか？」

古泉といつもの席へと向かいながら訊いてみる。

「そう」

折角の読書を邪魔したくはなかったが、何も訊かずに勝手に入って飯を段取るのも気が引ける。

長門はそう首肯すると

「カレーパン」

とまあ、何やらお昼の内容まで教えてくれた。しかも、どこなく満足げな色を瞳に称えている長門さん。何と言つか…期待を裏切らんやつだ。

「オレ達もここで飯食って良いか？」

「構わない」

「すみません、長門さん。お邪魔します」

「悪いな。折角、静かに読書出来る時間なのに」

「いい」

この文芸部部室の元々の主の許しを得るとオレ達はいそいそといつもの定位置にパイプイスを設置し、思い思い腰掛けた。

「あの」

「ん？」

何だ古泉？

「おにぎりの交渉はさっき決着が着きましたが、お茶も僕から貰うんですか？」

…ふむ。

「まあ、一々やかん温めるのも面倒だし…序でにそれも半分くれ」

「ふう…まあ、いいでしょう」

古泉が芝居掛かった仕草で軽く肩を揺らす。

敵に塩を送る形で兵糧をあの三人にやっちまったオレはおにぎり交渉を部室に着くまでの道中ずつと行っていた。そりゃあもう、冷戦時の米ソ並みの駆け引きが展開されたのだが、あまりにも面倒なので割愛させてもらう。

結果だけで言うとおレのおにぎりの分け前は半々である。

「…よもや、あなたから僕の容姿についてあんな歯の浮くような賛辞を浴びせてくるとは思いませんでしたからね」

うるせ。

あまりの空腹に苦しむ欠食児童はな、恵んで貰える隙を見つけたら脇目も振らずに一直線なんだよ。

「…世辞でも嬉しいものでしたよ。また聞かせて欲しいものです」

「断固拒否する」

今回以降などもう無い、誰が二度と言うか。

正直、急な運動から来る極度の空腹と昼飯にありつけない？ という絶望感のあまりであつて、その辺り記憶的にかなり曖昧だ。

何か、古泉の機嫌を取るために結構恥ずい事を言つたような気がしないでもない…が、ここは敢えてそんな気配は無視し、何かの拍子に思い出さないよう一生記憶の底に沈めておく事にする。

「ふふつ。では、次の機会に取っておきましょうか」
「言つてろ」

古泉は捉えどころのない笑みを浮かべながら、コンビニ袋を長机に置くとおにぎりと500mlパックを取り出して目の前に並べていく。

そんな中、

「……ん？」

ふと視界に入ったゴミ箱…その中からはみ出る程に溢れている惣菜パンが中にパッキングされていたであろう空袋の山。

あれは…アレか。カレーパンのアレか？

「なに？」

「…いや、まあ」

何か問題でも？ と、言わんばかりに見つめてくる長門。

問題…と言えば問題、だろうか？ 昨日、帰り際に見た時にはこんなにもゴミ箱が賑わってなかったように記憶している。

…つまり、だ。

「？」

まあ、何だ？

「…あまり、とやかくは言いたくはないが…いくら好物だからってカレーばっかはどう見ても身体に悪いぞ？」

「…」

オレのそんな忠告に長門は小さく首を傾げ、

「…？」

見つめてきたっ。

長門は首を傾ぐと同時にイノセントな瞳で見つめ…あ、しかも若干濡れて揺らぎが…ぐはっ。

いや、そんなダメなの？　みたいな瞳で見つめられるとお父さん、少し困るんだが…

「今は…お母さん…？」

「がふ…っ」

突然の長門のお母さん？　発言にオレの前で古泉のヤツが何やら肺に入っていた酸素を噎せて全部吐き出してやがる。

つか、待てっ。

「いきなり何を言い出すんだ長門っ？」

「…親という者は子の生活習慣があまりにも目に余る場合、それを正させようとする存在」

…まあ、合ってるか？ いや、だからって何故オレがっ？

「今のわたしの周りにはそういう存在が居ないから」

「…お前の生みの親の情報何とかは？」

「…」

そのオレの問いに長門は一度まばたきをすると瞳に呆れの色を滲ませ、

「細かい部分は現場に丸投げ。皆が苦勞している」

そう何時にも増して小さい声でボソツと呟いた…序でに言つとその色を察せたのはオレでしか判らない。

そして、見立て違いでなければまさかの小さな溜め息付き。どうやら生みの親であるはずの情報統合なんちゃらは親としては失格、落第点らしい。

…この際、バカ親は置いといてだな。

「なあ、長門。あんまり偏り過ぎた食事は感心しないぞ」

「我々には差ほどの問題でも無い」

いや、確かにそうかもしれんが…

「本来ならわたし達には食事によるエネルギー摂取は必ずしも必要ではない。が、ただ一度も食事を摂取しないのは不自然。生活といった小さな綻びから不信を持たれない為の言わばカモフラージュでしかない」

…カモフラージュって割にはカレーが大好きだよな。

「…わたしが例外という訳ではない。近しいインターフェイスで言えば…」

そう答えると長門は何故かオレから視線を外すと宙を彷徨らせる
と少し遠い目をし、そして静かに呟いた。

「…朝倉涼子はおでんを好んで食べていた」

朝倉涼子は、おでん。

「…おでん、か」

オレも、ふと長門から視線を外す。

「…そう」

その呟きに長門が微かに首肯するのを視界の隅に映る…オレの脳は勝手にあの世界での情景を思い出していた。

あの時、朝倉が作って持ってきたおでんの味は確かに美味かったように思う…全く味について覚えていないのにそう思った。事実、それから一度だけウチでおでんを食う事があったのだが、何故か物足りなかった。

言っておくが不味かったわけじゃないぞ？ 現にその時のおふく

るの味付けは上手かったし、ダシの旨さやタネもちゃんと染みて美味かったのに、だ。

「……」

少しだけ思う。

あの特異な状況と過去の出来事でのトラウマが無ければ……起きなければ、普通に朝倉が作った自家製おでんをちゃんと堪能出来る機会があったのだろうか？ と。

「……な、他の連中……えと、生徒会書記の喜緑さんもそうなのか？」

話題を変えたかったオレはSOS団に縁のある三人目の宇宙人の嗜好について訊いた。

「……喜緑江美里は」

宙を彷徨わせて物思いに耽っていた長門はオレの質問に少し視線を漂わせ、そのまま緩慢な動きで本へと視線を移した。

「喜緑江美里は菜食主義」

菜食主義……

「ベジタリアン、て事か」

長門は首肯すると、彼女は魚・肉類が苦手と補足を入れる。

「……曰わく、キャベツが良いらしい」

「…キャベツが良いらしいって…：良いって何がだ？」

…なあ、嗜好に関して別にとやかく言うつもりはないんだが…

「いくらカモフラージュとは言え、そればかりじゃ意味無くないか？」

「ちゃんと他の料理も食べれる」

確かに今まで不思議探索時のファミレスで色々と食べてたのは見てた。

何せオレの財布から出てっからな。何食ってたかなんてのまで明確に覚えてるぜ…まあ、それはさて置いて。

何つか、偏食というか…

「ここまで嗜好がワンサイドだとよっぽど気に入ってんだな」

「…そう」

判りづらいが、多分心持ち嬉しげに顔を綻ばせながら肯いている長門。

それはオレの推測だが、その記念すべきファーストコンタクト時に一体、どんなカレーを食ったのかは知らんがその味でも思い出してるのかもしれない。

「カレー以外の他のも食べたんだよな？」

「…食べた。でも、カレーを一番に好むのはわたしが待機期間中に食した料理の中でカレーが最も味覚の高揚を感じたから」

「待機期間と言いますと三年間でしたか」

噎せて咳で苦しんでいた古泉が復活して話に加わってきた。

「…やっと復活か」

つか、また盛大に咳込んでたな？

「完全な不意打ちでしたからね…少々、参りましたよ」

余程の事だったのか、それを裏付けるかのように確かに少し顔色が悪いわ、息もゼエハアとまだまだ荒い。

「…そうか。そんなに長門の”オレ、長門のお母さん”発言はツボだったのか？　そうかいそうかい。」

「…何でしょう？」

急に黙り込んできてジッと見ているのに古泉は何かを感じたのか、何やらサツと身構えている。

「…何もしねえからそう身構えんなよ。」

「身構えてるつもりはありませんよ……ただ、先程のような設定に合わない醜態は避けたいので心積もりだけを少々」

インチキスマイルに冷や汗垂らして言い訳してたら説得力ないぞ？

「ま、魅力的な案だがわざわざ迎撃態勢の相手に仕掛けないから安心しろ。で、長門？」

「？」

「待機期間中も何か活動してたのか？」

「…度々」

「それは…結構な頻度ですね」

「ああ」

…ホントだよ。

もしも、三年前の七夕時に長門が居なかったら朝比奈さんと共に盛大に右往左往してただろうな。

「その待機期間中みだりに持ち場を離れてはいけないという命令だった。が、それをわざと曲解した朝倉涼子がわたしを外へと連れ出していた」

「…そうか」

「では、その時に色々な料理を口にする機会があったんですね」

「そう。実地の勉強と称して」

「最初はどちらへ？」

「レストランから始まり、屋台まで…」

長門と古泉がそのまま話を続けている。
珍しい事だからな。長門と古泉がそう言った話題を自分たちで話すつてのは。

「……では、カレーに関しても色々とお食べになられたんですね」

「わたしは白とか緑は認めない」

「……えと」

…地雷踏んだか、古泉？

一応は無表情ではいらっしやるのだが、何が気に食わないのか、長門さんから魔闘気が噴き出てます。

何やらカレーの話に発展していたようなのだが、オレはそんなの食った事がないので分かん。

カレーは白色だろうと赤とか緑だろうとカレーとして美味ければ良いんじゃないかとオレは思っんだが、過去に何かあったのか？

「で……では、ドライカレーはど」

「混ぜる楽しみがないので言語道断」

長門よ、何があったのかは知らんがその魔闘気を鎮めてくれ。

「……」

長門の方を向いているので表情は判らないが肩が震えているので古泉はもう限界だ。

「古泉お前はどっち食っんだ？」

「はっ！？」

そう声を掛けると古泉はビクツと背筋が伸びて慌ててこちらを振

り返ってきた。

その表情には助け舟を出したオレへの感謝と地雷を踏んでしまった恐怖でいつもの微笑みの仮面が外れてしまっている。

…大丈夫かよ？

「い、いえ」

「古泉一樹」

「っ!？」

気付けば気配を消して古泉の後ろへと佇み、見下ろしている長門…後ろを振り向く事が出来ない古泉の表情はもう泣いてもいいですか？　と言わんばかりに怯えている。

…長門、落ち着け。

「…わたしは冷静」

「酔っ払いが酔ってないって言ってるレベルのベタさだぞ、それは」

「わたしは何もしない」

なら、目を逸らすな。もう一度言っぞ？　その魔闘気を鎮めてくれ。

「…」

オレの目は誤魔化せないと気付いた長門は一旦、視線を合わせる
と何やら軽く深呼吸をすると古泉の両肩に手を乗せ…

「…古泉一樹」

「な、何でしょうか？」

「あなたとは近い内にカレーの奥深さについて話す必要がある」

「は…はあ」

「覚悟して」

「っ」

長門はそれだけ言々と古泉の肩を解放し、自分の席へと戻って読書を再開する。

残されたのは何やらうなだれている古泉とどうしたら良いのやら判らず、おにぎり片手に固まっているオレ。

「…すみません」

「ん、ん？」

「泣いていいですか？」

「は？」

え、何？ ちょ…おまつ、何マジで涙ぐんでんだよっ？

何、古泉相手にしどろもどろになっただ？ とか思つかもしれんが今、オレの目の前に居るのは朝比奈さんに勝るとも劣らない美少女であり、そんな古泉であって古泉ではない可憐な女の子がオレの目の前で泣きます宣言してんだ。

もっとうしたらいいのか正直、分かりませんっ。

「お、落ち着け古泉。な？」

「もう、保ちません」

言うが早い、古泉はめそめそと泣き始めた。

何かもう色々溜まってたわけだし、どっかで爆発すんだろうなとは思ってたがそれが今かよっ？ とツツコミたくなる。が、元の姿ならいざ知らず、もう見た目と相俟ってもう何もかも普通の女の子一直線な古泉にオレはオロオロと対処に四苦八苦し、そんな状況で昼飯を食う羽目になったのだが、もう食べ終わった頃には

「……うっ」

心身が変に疲れ果ててしまったのは言うまでもなく、

「……もうすぐ昼休みが終わりますが？」

「……うー」

もう、ふて寝だよ。

落ち着きを取り戻した……取り戻させた古泉がオレを揺さぶり起こそうとするがそれを無視し、そうこうし続けている内にオレはいつの間にか、本当に眠ってしまった。

……

「傾眠状態から入眠状態に入った」

…それは、困りましたね。

寝息を立て始めた彼…彼女？ さて、どちらで表記しようか僕としては未だに少々迷っています…今は置いておきましょう。

今、問題なのは

「このままだと僕達は授業をサボタージュしなければいけなくなりますね」

僕の立場としてはなるべくなら避けたい所なんです、僕自身に原因がある以上は強く出れません。実はお恥ずかしい事に僕は柄にも無く取り乱してしまいました。

その間、僕を落ち着かせようと宥めたり色々と手を尽くして貰ったらしいのですが、あまりの一向に落ち着かなさ振りに逆に臍を曲げてしまい、ふて寝を始めてそのまま昼寝をしてしまったのです。

「…くー」

そして今、彼…一応、こっちにしましょうか…からはその愛らしい寝顔に相応しい穏やかな寝息が聞こえています。

「大丈夫」

「っ」

今のは長門さんです。

いきなりでしたので危うくビクツとしたのを表に出しかけてしまいました。

一応、彼女は今は落ち着いておられますが、先程のアレは本当に泣いてしまいそうでしたよ。

長門さんに対してはカレーについての話題はタブーです。この事は肝に銘じておかないといけません。

あんな体験は一度で充分ですからね。

「…えと」

とりあえず蒸し返すわけにはいきませんから、当たり障り無いいつもの笑顔を向けておきましょうかね。

「…長門さんが起こしてくれませんか？」

が、僕の提案は長門さんには

「彼は少しでも休養が必要」

やはり否でした。

僕としては予想通りでしたのでとりあえず肩でも軽く竦めておきま

「あなたもそれを望んでいる」

はて？ 何の事でしょうかね。口に出しても…ましてや思ってもいない事を指摘されるのは気持ちいいものではありませんね。

…それは何故でしょうか？

「個人レベルで起こった諍い」

…これはイジメについて、ですね。

「充分、内々に処理できたはず」

そうですね。

「あなたが所属する”機関”の影響はこの学校…各クラスに至るまで及んでいる。それを使えば彼が介入するのを断る事が出来た…でも、あなたは無理にでも彼からの申し出を断る事をしなかった」

確かに出来ませんでしたね。

「あれは…」

長門さんはここで言葉を句切ると何やら言葉を選んでいるかのよう
うに考えた後、首を傾げ、

「あなたの…我が儘？」

「…どう、でしょうかね」

正直…僕は今、ちゃんと表情を作れているか自信がありません。
と言うのも、被害を受けた矢先に考えがそこに至らなかったという
ワケではないんですが、何故か断れませんでした。

「…くー」

呑気なと形容したくなるような寝息が微かに聞こえてきます。

あの時、彼は本当に僕を心配した上でああ言ってくれました。だから
本当の事を言いますと僕は嬉しかったのかもしれませんが…彼が
僕の事を心配してくれた事に。

「起こさないでおきましょう…」

その言葉に長門さんは頷いたように見えました…が、多分です。
彼なら正確に判断できるのでしょうが、僕はまだまだ長門さんの

小さく変化する表情を読むのは無理ですからね。

「そう」

長門さんはそう呟くと視線を本へと移しました。

さて、こうなると僕は完全に手持ち無沙汰になるわけですが、

「？ おや…？」

何処からか携帯の着信を知らせるバイブ音が微かに聞こえてきます。一応、自分の確かめてみましたが違うようです。

長門さんを見やってみました。彼女が変わらず本を読んでいます。となると、

「彼」

…の、ようですね。

ページを捲りながら長門さんもそう告げてくれ、僕は席を立つと眠る彼の傍らへと移動したのですが…さて、携帯は何処から鳴っているのでしょうか？

「スカートのポケットにある」

スカート、ですか。

と、僕は彼のスカートの方に手をやり、いざポケットに手を入れようとした時にふと気付きました。

眠る女性のスカートのポケットに手をつ突っ込もうとしている僕という図…というのは

「…マズいですね」

明らかに変態な図です。

「っ……」

また携帯が振動を始めます…もう何度目でしょうか。

どうやら彼の携帯を鳴らしているのは涼宮さんのようでして、その証拠に彼女のイライラが高まっているのを今、正にリアルタイムで感じています。

彼はこの世界の涼宮さんは扱いやすいなどと寝言を…っと、失礼しました。

扱いやすいとそう仰ってました。が、

「…また、鳴り始めましたね」

今、僕が感じている感覚は見当違いのような気がしてなりません。現に着信を知らせる振動ですが留守電に入る辺りになると一度切っつては再度電話を掛け、また留守電に入る限界まで携帯を鳴らすという行為を何度も繰り返し返してらっしゃいます。

…正直、もう何回目かは分かりませんね。3回目辺りで数えるのを止めましたので。

「とは言え、やはりこの場合……いや、流石に」

それにしても、これはもう葛藤です。

何せ携帯を取れば確かに解決するでしょうが、それだと僕は自分の中にある何かを失ってしまいます…確実に。

「大丈夫」

さて、その何かとは何でしょうか？ と、そんな僕が自問自答しながらどうすれば穏便に事が済まされるのかを考えあぐねていると、長門さんが何を根拠にかは分かりませんが唐突にそう言ってくれました。

… 大丈夫、ですか？

「本当に大丈夫とお思いで？ とりあえず、何を根拠に大丈夫なのかをお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「… あなた達二人は元々同性同士。どちらかが異性ならその行為には何らかの問題が発生するが、男性同士… 現段階は女性同士でも何ら問題はない」

… た、確かに表面上はそうかもしれませんが、

「僕の意識は飽くまでも”わたし”ではなく”僕”なんですよっ？」

「閉鎖空間が発生するというリスクとあなた一人の道德観念」

「…」

何でしょうか。今、自分の時間が止まったと同時に背筋を冷たいモノが伝いましたけど僕の気のせいですね？

いや、そんな事はいいいんです。今は長門さんが言った事の意味、意味ですよっ！

あれは、簡単に説明すると唯一至上である大義名分の前では個人の都合はお構いなしという事… です。先の言葉には暗にそう含ませているように思っんです。

「聞き間違いと思いたいのですが… そ、それだとあまりにも…」

「大丈夫…今、彼はぐっすり寝ている。一度眠った彼は自発的に目を醒まさない限り、ちつとやそつとではまず起きることはない。大丈夫」

僕を安心させる為か、長門さんは大丈夫を二回言いました。

しかも、その表情には妙に自信ありげに見えたのはこの際、気のせいとしておきしょう。

いいですか？ 自信ありげに言ったところで僕にとって、今しよ
うとしている事は寝込みを襲う痴漢意外の何モノでもありませんっ。

「閉鎖空間のリスクと一人の道德観念」

長門さんが後押しするように告げてきます。

…しかも、同じ事を。

「それ、二回目ですね？」

「…」

「…」

「…」

「閉鎖空間のリスクとあなた一人のモラル」

これは…どう捉えればいいんでしょうか。わざわざ言い換えてきましたよ？

「…」

「…」

「閉鎖空間」

「もういいです分かりましたから…」

…僕の負けです。

しばらく視線だけで牽制し合ってたものの、口を開けば長門さんは同じ事しか言わなさそうでしたので…言葉を被せたせいで聞き取れませんでした。が、さっきも同じ事を言おうとしてたんでしょ…もう観念するしかありません。

それに、涼宮さんの方も限界のようすし。

「長門さん」

「なに？」

「彼は本当に起きたりは」

「しない。安心して」

「くー」

「…分かりました」

そういつた訳で僕は行動に移しました。

移したわけですが詳細は伏せさせてもらいます。いえ、別に寝ている彼に余計なナニかをしたのかと言うわけではありませんよ。僕はそういったキャラでもありませんし、涼宮さんがそんなものを僕に望んでいるわけでもありませんから。

ただ、状況を説明するとなると僕も年頃な青年ですので…その、恥ずかしいわけで。

いえ、本当に何もしてませんよ？

ただ、眠っている女性の彼を起こさないようスカートのポケットに僕は手を入れて探り、彼の携帯電話を取り出しただけです…。

すみません、やってることは充分に痴漢行為ですね、コレ。

いや、一応、僕の名誉の為に言っておきますがこれは……すみません、僕は一体誰に対してこんなにも必死に説明をしているんでしょうかね？

「電話に出なくていいの？」

そ、そうでした。

僕は置かれた携帯を開くと通話ボタンを押しました。

「もしもし」

『何っやってんだよこのアホキョン子おーっ！！！！』
「っづ！??」

やっぱり、涼宮さん…でした、ね。

僕はあまりの大音量に受話器部分から耳を外し、耳に指を入れながら腕一杯に引き離してしまいましたよ。

…っ、それにしても迂闊でした。片耳が

『3秒以内に教室に戻って来ないと今日の団活でバニーだかんなっ』
「！」

それはいけませんっ。

こんな自分の知らない所でこんな罰ゲームが決まったと彼が知れば電話に出た僕が後で何を言われるか。

普段なら彼がそんな事をする心配はないのですが…意識と性別があべこべなこの世界でバニーなんて姿に成ろうものなら最悪、故意に閉鎖空間を発生させるなんて事をやりかねませんっ。

「ゴメン待って、待って涼宮くん。わたし、わたしっ」

『大体っお前は…って、へ？ 古泉さん？』

僕は慌てて電話に出たのが彼ではないことを涼宮さんに伝えると途端に向こうが俄かに静かになりました。

…最悪の事態だけは避けれましたかね？

『これ…キヨンの携帯だよな？』

「そうそう」

『…当のキヨン本人は何処で何やってんだよ？』

「今、聴かせるねー」

僕は耳から携帯を離すと寝息が涼宮さんに聞こえるよう、彼の口元へと近付けます。

「くー……すー…」

『寝…やが…な、アホ…ヨン子』

少々、聞き取りづらいですが涼宮さんの呆れている声を確かに拾いました。

ちゃんとフォローをしておかないといけませんね。僕が何かと騒

動に巻き込んでしまいましたから。彼の擁護はしっかりしておくつもりで

「っん……………」

『!?!』

「っ……………」

「んん……………っふ」

彼が少し身じろぎをしたのですが、

「ん…っ……………くー…」

何と言いますか、今のは耳と心臓に悪いです。

鼻に掛かったと言いましょ…うか…今のは完全に女性のソレでして、妙な艶っぽさを感じてしまいました。

…僕は一体、何を考えてるんでしょう？

『…古泉…ん』

茫然としていると僕の名が呼ばれました。

少々、さっきの彼の彼らしくない寝息で揺らいだ心を落ち着かせてから再度、携帯を耳にやります。

この世界用の演技も忘れずに。

「…はいはい〜？」

『今、場所何処だよ?』

「部室だけど…涼宮くんもこっち来る？」

言ってみてなんですが、涼宮さんがそう簡単に授業をサボタージュするとは思えませ

『そうする。すぐそっち行っから』

そうですか。

思わず微笑になるのが自分でも分かります。涼宮さんの前では出来ないですからね、この場ぐらいいいですよね。

「では、お待ちしております」

『3分で着くからお茶よろしく』

と言が残すと携帯が切れました。

いやはや、此処へ3分で来れる涼宮さんも涼宮さんですが、彼女でも3分は掛かるところを彼に対しては3秒というのは、いつもながら不憫に思いますね。

さて。では、涼宮さんが来るまでにお茶の用意でもしておきましようかね。僕の分と長門さん、彼が起きた時の為の分で四人分。

部室 あつちはメイドでこっちは執事（前書き）

第14部分です！。

今回はなかなか早いですっ頑張りましたよ（ぐっ

それにしても、この11月で二年。この9日後の11/11で三年目に入ります……これからも頑張りますっ（ぐっ

そして今回は朝比奈さんが主ですっ！ 朝比奈さん好きの方々に
気に入って貰えると嬉しいんですが……では、どぞー

部室 あつちはメイドでこっちは執事

「んじ…っ?」

ビクツと身体が震えた。

オレは慌てて顔を上げるとザツと周りを見渡した。さっきまで居た夢の世界とは違うよなと確認するように…なんてな。

視界に入ってくるのは間違いなく部室の風景である。多少は時間が経っているだろうがいつもの風景、いつもの部室だ。

「…つか、寝ちまったのか、オレ」

呟く内、口元が濡れているのに気付いたのでオレは袖で拭おうと思ひ、腕を上げたところでそれに気付いた…誰かがオレの手を握っている。

寝ぼけ眼で自分の手を見やるとそこにあるのは小さくなっちまった自分の手だけでなく、確かにデカい…バカ力のくせに華奢だったハズの…手がオレのと重なるように握られていた。

もうお分かりの通りかもしれないがその握っている人間が誰かという

「くかー…」

誰でもない、男のハルヒだ。

まあ、ここで見知らぬ第三者やら古泉やら長門が掴んでたら流石に驚くが、実際に掴んでるのがこいつだと、

ああ…何だ。やっぱりお前か。

としか思えないんだから不思議だ。

いつの間に此処へ来たのやらと一瞬訝しんだが、大方オレが居ないんで古泉にでも情報を聞いて此処へと来たのだろう。

そう思い、寝起きでイマイチ頭が冴えないままそのチクリ魔を探すとそいつはいつもの定位置で珍しい事に机に突っ伏していやがった。

居眠っているのなんて初めて見るが、古泉は腕を枕に埋もれるように眠っている。

…何かエライ無防備だな、おい。

「すー…」

そんな体勢で眠っているので残念ながら寝顔がイマイチよく見えん…いや、見えないからって別にオレは何も残念がってないぜ？
うん。

「…くー」

その間も古泉は全く顔を上げる気配なしだ。

漏れ出る寝息を聞く限りでは真正正銘のマジ寝だな、こりゃ。

「……ん？」

ここでオレは何か足りない事に気付く。

足りないモノ…それはいつも部屋で聞き慣れた音。長門が本のページを捲る音が無い事に気付いたオレは慌てて長門の方を見た。そこには、

「
…」

この三点リーダーは長門とオレだ。

何故にオレもかと言うと、あの長門が今、目の前で眠っているんだからな。それを目の当たりにしたオレがこうなってしまうのも仕方なからう？

今までにもこう、気になりつつも目の当たりにする機会が無かっただけにこれは貴重でレアで衝撃的な場面だ。

「えと…長門？」

「…」

一応、傍らに人が居れば聞き取れる程度の小声で試しに呼んでみる。本来の長門なら校内の何処だろうと、ボソツと呼んだだけでも聞こえた上に、何？ と背後から挨拶してくるんであるうが、今回はこんな近くでも全くの反応ナシ。

あの長門が身体のを抜き、椅子の背もたれに身を預けて目を瞑っている。最初は眠っているとは判らず、ただ瞑っているだけかとも思ったのだが、身じろぎもせずになだだ静かに寝息…つか、呼吸？ を着いている様は確かに寝入っている。

「…」

初めてみる、長門の寝顔…男の長門が見せる素の寝顔。

「…くっ」

何でお前は今、男なんだっ。

「くここー…」

と、うなだれるオレに分け入るように…いや、割り込むように、
だな…そんな自己主張の激しい鼾が聞こえてくる。

寝てる時も自己主張するハルヒ。何と言つか、古泉や長門を見習
えとは言わんが、もうちょっとトーンを下げられ

「ぐここつ………ぴゅ」

「…」

下げてくれ、頼むから。

男ハルヒの鼾が響く中オレは願わくばと、元の世界のハルヒは鼾
とかは無く静かに眠る娘であつて欲しいと願つた。

12月のあの事故から目が覚めた時は自分の中で色んなのが渦巻
いてて、んなの氣になかったからなあ…いや、まあ願つた所で
そつなるわけ無いし、成るわけないよな。神様に願うつたつて神
様、コイツだし。

「ぶしゅ…」

「…静かにしろ」

「くこつ」

途端に止まる鼾…何のことはない、ハルヒの鼻をオレが軽く摘ん
でやった。

しばしの静寂が部屋に訪れたが、

「…っぐむ………ぷはっ」

オレは摘んでいた鼻を解放する。

流石にこれは起きるかなと思ったが、ハルヒは勢い良く息を吸い、何事も無かったかのようにまた寝息を発し始めた。

「ぐー…」

「はぁ」

しかし、鼾も豪快だな。

鼾を発生させる原因はオレ自身も良くは解らん…が、要は結局、舌が落ちるせいで喉を若干塞いでしまい、気道の確保が不十分になって喉と舌との隙間…それが原因で”鳴る”んだろ？ 確か。

「すびー…」

なんてな…鼾のプロセスなんてオレに解る訳ないし、本当に何のことはない妄想だ。

忘れてくれ。

「？ …何か、いつの間にか乾いたな」

空いている袖の方で口元を拭うが、殆ど乾いていたのもうあまり意味がなかった。

「はぁ」

オレはまた一つ溜め息を漏らすと改めてハルヒに握られている手をどうしようか思案することにした。

オレの手は全く微動だにしなかった訳でもないのにハルヒの手は瞬間接着剤…いや、溶接にでもって引っ付けられたかのように離れない。今までに自分の腕がオレの動きに連られて若干浮いたりもし

たつてのにそれでも起きやしない。

…いや、別にハルヒを起こしたいワケじゃないんだ。わざわざ寝ている神を起こすつもりないし。ほら、触らぬ神に祟り無しってヤツだ。

「しかし、どうしたもんかね…」

一応、試しに指を外そうと試みてはみたが指一本外すのにも苦勞しまくり、そしてその苦勞は報われなかったのでこちらから拘束を外すというのはボツだ…かと言って、ハルヒが放すのを待つのもそれはそれで気が遠くなりそうだが。

…つか、こんだけ弄くったり動かしたりしてんだから起きろよな？

「…んぐ…っ、ん…んー……」

思いが届いたのか、途端にハルヒの鼾が変わったかと思うと身じろぎを شدした。

…やっと起きるか？

「…ぐー……」

起きないのかよっ。

「…はあ」

もうハルヒが起きるのを諦めたオレは椅子の背凭れに身を預けるともう一度部屋を見回した。

「…改めて見ると何も変わってないな、此処は」

性別が反転したオレ達と違って何一つ変わっていない部室の風景はある意味心安らぐ。何があってもこの場所は変わらない…一部、朝比奈さんの衣装が変わっているがある意味ではそれも変わっていないと言える。

だから此処はハルヒにとって大切な居場所なんだと感じさせる。

…まあ、それならオレ達も変えんなよなと思ったりもするけどな。

「つと…？」

柄になく感慨に耽る内に時間の区切りを告げる鐘が鳴り、学校中に響き渡り始める。

オレはそれが何を知らせる鐘かを知るために携帯を取り出し、遅蒔きながら時計を確かめるとそこには

「…は？」

放課後の突入を示す数字がディスプレイに刻まれていた。

…マジか。

「昼休みの途中から二時間寝てんのかよ、オレは」

もう愕然としたね。

午前中には体育の授業二時間を休んだ上に午後の授業もまともに二つをサボり、あまつさえHRまでサボった。

受けた授業は二時間のみ…何しに学校へ来たんだろつかと流石のヤバさに汗がこめかみを伝っているのを感じる。

…初めてじゃねーか？ 無断欠席したのって。

「…何で起こさねーんだよ、アホ古泉」

「ぐー…」

眠る古泉に対して小声で軽く毒づいてみたが、反応が返ってきたのは隣に居るハルヒの鼾で古泉からは返事みたいなモノは返って来ずだ。

あまりの香気な寝っぷりに最近バイトが無いと曰ってたのを思い出し、ちよつと弛んでないか？ とさえ思えてくる。

…この野郎め。

「すー…うつ？ …くー」

その無防備な脳天の旋毛にオレのデコピンを食らった古泉は腕の中で小さく唸ったようだが、すぐに何事もなかったように穏やかな寢息に戻る。

…はあ。

「…あれ？ 開いてる…？」

…ん？

扉の向こうで声がしたかと思えばドアノブが回され、扉が開かれるとそこに愛しの朝比奈さんの目を丸くした姿が現れた。

「ふえ？」

可愛く声を漏らす朝比奈さん。

ここで初めて男の子になった実物を見たわけだが、

「あ、あの…な、何かあったんですかあ？ 何で皆さん、此处で寝てらっしゃるんですかあー？」

皆が既にこの部室に集まっいて尚且つその殆どが居眠つてるといふ状況が判らないせいか、涙を瞳に溜めてオロオロとなさる姿はどう鼻屑目に見ても、大規模百貨店の中で迷子になった小学生以外の何者でもなかった。

こんな可愛い我が子を置き去りにするなんて何て親だ。

「あ…あ、あの、えと…」

つと、想像が羽ばたいて妄想になっちまってたな。ちゃんと現実を見据えんと。

さて、このままだと朝比奈さんが混乱しかねないのでオレは人差し指を口元に当てて静かにしてもらっようジェスチャーで伝えると

「?? あ、そか。えと、あの…何で皆さんが先に…?」

意図を理解して下さった朝比奈さんは音を立てないよう、静かに扉を閉めると小声でオレに訊いてきた。

…それはですね。

「その…オレが昼飯食った後、居眠ったのが原因でして…」

「あ、それ分かつちやいます。お昼ご飯食べた後って何だか眠くなつちやいますよねえ」

愛らしい笑みを浮かべて首肯する朝比奈さん。

何かもう、朝比奈さんは性別が反転していても朝比奈さんは朝比奈さんであると不変で確固たる存在なんだなと思えるね。

「でも…長門さんは分かりますけど古泉くんや涼宮さんは…?」

朝比奈さんも長門が何時々々でも必ず部室に居るってのはデフォらしい…ま、それだけ本好きってのが周知なワケか。

オレはとりあえず古泉が居る理由の説明として昼飯を同伴した事を話しておき、例のいざこざ…古泉がイジメに遭っていた…は伏せる事にした。

もし朝比奈さんに話してみろ、解決したとは言え絶対にあまりの事に瞳に溜まる大粒の涙を落とさんばかりながらも堪え、でも心配から堪えきれずにお泣きになるに違いない…この方は見た目通りに本当に優しい人なんだから。

「…と、まあそんな訳でして。教室からこっち他愛ない話をしながら一緒に此処で飯を食ってたってワケです」

「ふふっ…仲が良いんですね」

だから、朝比奈さんの表情は常にエンジェリックスマイル。

そんな笑顔を観れる観客はオレ一人…早い話、朝比奈さんの涙を古泉の為に流されるのは好かんっ。

はははっ、意趣返してやつだ。悪いな、古泉。

「…んー…」

「？　どうかしました？」

笑顔に占められていた表情が急に何かを躊躇い、考えるようなモノに変わったのでオレは思わず訊いてしまったわけだが、朝比奈さんは理由を訊かれると何故か急に頬を紅潮させ、指をモジモジと始めてしまった。

「えと…ね」

そんな頬を染め、顔を伏せがちにこちらをチラチラと見る朝比奈さんの姿は何と言うか、

「…あうう」

…何と、言いましょうか？

「うゝ…？ …キョ…くん？」

…おかしい。

ヘテロでノーマルなはずのオレがシヨタな朝比奈さんのそんな表情を見ていると何か良からぬモノが沸き立って来るような気が…はて、何故につ？

「……ンくん？」

…はっ！ まさかオレにはそんな変な属性が？

ま、待てまでマテっ。オレは違うつ違うつぞおっ！？ 思い出せ思い出すんだっ女子大好きっ子だったオレを。今のこんな身体に心まで支配されるなっ意識は男、意識は男っ！ い・し・き・は・お・と・こ・お・っ！

「…ヨンくん」

思い出せっ！ ある日の放課後の部室へと訪れた時、あの嬉し恥ずかしハプニングの麗しき朝比奈さんのあの着替え途中の下着姿をっ…て、何でそこでブリーフ姿のシヨタ朝比奈さんが出てくるかなっくそ！！

「キョンくんっ?」

「は、はいー!?!」

「ひゃいつ?!」

…はっ。オ、オレは何をっ?

急に呼ばれたせいで大音響で返事をしてしまったオレは我に帰って朝比奈さんを見ると、オレのかなりデカい目の声に吃驚したあまりに身を縮こまらせ、涙目でこちらを見つめている。

そう、まるでその姿は親からはぐれてしまった子猫とか子犬のようで可愛いですよ? って、チ・ガ・ウ・っ。

「す、すみませんっ、急に大声を上げて…驚かせてしまいましたね、は…はははっ」

頭を掻きながら視線だけで周りを見渡してみるが、皆は事前に申し合わせたかのように眠ったままだった。

「あ、あのね…キョンくん」

「何でしょうか朝比奈さん」

何とも言えない状況に内心の動揺を面に出さないように粉骨碎身の注意と意識を払いながら、朝比奈さんを安心させるように笑顔を向ける。

貴女のお願ひなら不肖わたくしめが何でも聞きますよ?

「その…」

はい。もう、何なりと。

「わたし…着替えなきゃイケないんですけど…その、手伝ってくれませんか？」

「へ…？」

思わず間抜けな返事をしてしまったが、この際どうでもいいっ。

「えと…」

どうやらオレの耳が急性の難聴障害を起こしたらしい。

今、あの北校美少女ランクトップクラス…この世界の場合は北校美少年ランクトップクラス（どちらも谷口談）の朝比奈さんの口から自分の着替えを手伝って欲しいと出たような気がした。

…いや。聞き間違いだな、うん。

「ああ、そうですね。もう放課後ですし、皆が起きたらそのまま団活でしょうから、オレ着替えないとイケませんよね」

さてと、そうなるとオレはまた男のプライドを捨

「え、えっ…着替えないとイケないのはわたしですよ？」

あ、そうなんですか？

「なら、オレ出てかないと」

…って、こいつが掴んでたら出れないじゃ

「や、ですからあ…キョンくんが手伝ってくれないと困るんですよ

」

…まただ。何なんだよこの幻聴は。

が、そんな幻聴とカテゴリたいオレを余所に、朝比奈さんは何やらオレの反応に困り果てたような表情を示しており、あまつさえあまりの察しの悪さに軽く怒っているようにも見える。となると、

「は、はは」

さっきのは幻聴じゃない…て、事だ。

「…？ あの…キョンくん？」

オレは今日何度目になるであろう、腰を屈めながら顔をのぞき込まれて目の前で手を振られ、意識があるのかの確認をされているがそんなのは些細な事だ。

「…キョンくん？」

こんな時はどうすればいいのだろうか…何？ 素数を数える？
却下、大却下だ。

以前に見た何かの映画で素数を四桁ぐらいまで数えてた女優が居たが、話の終盤で敵に捕まったらそのまま頭を撃ち抜かれちまってエンディングを待たずに途中退場だ。

だから何だと言われればそこまでで何て事はないんだが、単にそれを実践したキャラが命を落としている…つまり、元が悪いつて事だ。

つまり、この寝ているとは言え皆が既に部室に居る状況でその行為は死に直結するってワケだ。理解したか？

「っ」

そんな最悪な状況を想定・実行し、結果を想像したら恐気で思わず身震いが来た。

…よし、余計な事考えたお陰で何か落ち着いてき

「あのね、目を瞑ってる間に制服のズボンを脱がして執事さんのズボンを履かせて欲しいんです」

「え…？」

すみません、それ何てプレイ？ という幻聴が何処からともなく聞こえた気がした…って、そんな事は後回しだっ。

どうすればいい。せつかく落ち着いた心は何処へやら、オレの救難信号は敵味方の区別無くフルオープン回線だ…つか、本当に誰でもいい。今すぐ部室のドアを開けてくれっ、そして助けてくれっいや、助けて下さいっ。

「キョンくんいいですか？」

…いい、良いって何がでしょうっ！？

ははっ、オレの葛藤なんか余所に朝比奈さんは何でか知らんがもう待った無しだっ。

…こ、古泉っ？

「すー…」

視線に起きやがれ！ の言葉を乗せてはみたが返ってくるのは寝息だけ。

駄目だ、ホントに駄目だな。本っ当にこうゆうの役立たずだなお前はっ！ よし、万能選手な長門っ！？

「…」

な。お前、ホントは寝てないんだろ？

「…」

…な？

「…」

…は、ははっ。な、なあ、ハルヒよ？

「ぐこー…」

…

「むにゃむにゃ」

何がむにゃむにゃだよ。ベタな寝言言いやがって。

「…キョンくん」

「…はい」

何でしょうか？ 朝比奈さん。

もう腹を括るしかない、そうオレは覚悟した。

「ズボン脱ぐ時にわたし目瞑っちゃいますけど…その、変な事しないで下さいね…？」

「はっはっは、まさか」

そんな大それた事なんか出来ません…つか、逆に聞きたいね。変な事って何でしょうか？　て。

「じゃあ、上着を先に着替えますね」

朝比奈さんはそう宣言なさるとその子供用みたいなブレザーを脱いで、いつも自分が座るパイプ椅子に引っ掛けるとそのままオレの目の前でカッターシャツのボタンを一つ一つ丁寧に外し始めてらっしゃいますっ。

「こーいう時って男の人って便利なんですなー」

と、話し掛けて下さるのですが、もうオレの耳に届いてません。

何が便利なのだろうかとかはそんな事は今のオレのソレには関係ない事であり、今一番の問題はオレの、この、心臓だっ。

兎に角、早いんだよっ。頼む、誰か起きてくれえっ！！

…

外から運動部の連中の青春真っ最中の掛け声が聞こえてくる。

「キョンくん、お茶でいいですか？」

執事服に着替え終わった朝比奈さんはトテトテと表現したくなるような歩みでコンロへと向かうとそう尋ねて下さった。

「はい、お願いします」

貴女が注いで下さったモノなら例え雑巾から出た絞り汁だろうと甘露でしょう。

「熱いですから、気を付けて飲んで下さいね」

こんなオレにまでそのお心遣い…嬉しいです。

「…あの」

「あち…」

…はは、油断して舌が火傷してしまいました。

「…あのお、キョンくん？」

はい…何でしょうか、朝比奈さん？

「何で向こうを向いたままなんですかあ？」

いえ、全く持って何の深い意味はありませんよ？ はは。

まあ何だ。オレはあの着替え以降、朝比奈さんに視線を向けれずに明後日の方向を向いたままやり取りをしている。

理由としては、

今すぐには無理なのだ。

何故ならあの時、朝比奈さんがボタンを外す中、最初にオレは苦肉の策として片手をハルヒに捕られているので、着替えを手伝うのはやはり無理ですと伝えたのだが、

「えと、大丈夫ですよ。涼宮さんの耳元でこう囁けば解いてくれます」

満面の笑みでそう仰った。

んなっバカな…と半信半疑にオレはハルヒの耳元で朝比奈さん案の言葉をこう囁いた。

「すび…」

…えー、ハルヒコ？

「今、少しだけ手を離してくれ…用事が終わったら、アタシの両方の手でお前のその手…包むように握っててやるから」

こんな感じに。

朝比奈さんには悪いがこんな手で解けるんならあんな苦労はしなかったわけなのだが、一息着く間もなくそれが現実となる。

「ん……んんっ……くー」

急に身じろいだかと思えばハルヒの手がオレの手を離れ、自分の鼻先をポリポリと掻き、次に頬を掻き、そしてそのまま自分の手元に置いた。

つまり、

「…解放しやがった」

「ぐー」

なあ、起きてんだろ？ お前。

「ぐー」……ずびー…」

と、ツッコミを入れてみたが返ってくるのは黙りだけだった。

「ふふ。じゃあ、キョンくん…お願いしますね」

そうしてオレは朝比奈さんの着替えを手伝ってしまいう事に遭いな
つちまつたってわけだ。

「〜」

上半身を執事服に着替える朝比奈さん。

今日は暖かい方だとはいえ肌着まで脱いでしまわれるのは正直、
アセります。

上半身が裸のままなのに上機嫌にハンガーラックから執事服一式
を取り出していく様、女性だった頃とは逆に薄い胸板や全体的な丸
っこさは本当に年齢とは関係なしに子供のようだったと表記してお
こう。

そして、この後半にズボンの着替えがあつたわけだが…その事に
関してはこっからの詳細は伏せさせてくれ。つか、別に要らんだろ
な？

ま、色々と限界だったと言っておこう。頭ん中で何回何十回と、
な？ これ何ていうプレイ？ と叫んだ事か。

「すみません、朝比奈さん。一応、ハルヒの手を握っててやらないといけませんから」

それを経て今に至り、オレは先に約束した通り両手でハルヒの手を包むように絶賛にぎにぎ中である。

そんな正当な理由も有ってハルヒの手を握ったままだと、オレが朝比奈さんの方を見るにはどうしても首がしんどい目に遭う。

「あゝ、そうですねえ」

その表向きの理由で朝比奈さんが納得してらっしゃるのが幸いだ。普段のオレならそんな苦労など厭わずに朝比奈さんの方を見ていたいんだが、一番の理由は先の通りだ。

こんな事が有ってはどうかあっても朝比奈さんの顔を見れる訳がない。そんな意識してしまった時点で、男の意識が女になってしまった肉体に支配されているのも同義…とも思われるかもしれないがそんなのは知った事ではない。

もうこの際性別になど関係ない。目の前の特等席で朝比奈さんの生着替えをリアルタイムで見てしまった。充分だ。

「ふふっ」

耳が朝比奈さんの笑みを拾った。

…ど、どうしました？

「何か変な事言いましたっけ…？」

「あ、ううん。違っんです」

表情は見えない。が、見えない分だけ朝比奈さんの声色は上級生

として下級生にアドバイスする、本当に年上としての感じに聞こえた。

「涼宮さんが起きてる時もそう接してあげればいいのに」

「それは…」

無理と言つものですよ。

起きてる時のハルヒってヤツは台風と同じだ…小型なクセに勢力が強い上に自由意志で動き回るといふ仕様、それが終始オレないし周りへと向けられている。

結果、オレはそれが悪い方向に進みそうな時に押し止めたり諫めたり宥めたりとまあ、ブレーキ役になるのは当たり前で、そうして不機嫌だからって心配してみたら取り付く島もないってんだから、必然的にこんな風な接し方は起きてる以外になる。

「これだつて仕方無いですから」

「くすつ…素直じゃないんですね」

はて？ 何の事やら。

「ふふっ」

とは言つたものの、この接し方…いくら身体は女でも意識は男のオレが、ハルヒとは言え野郎の手を握っているってのはなんつーか、物悲しいねえ。

「……良かった。オレ、まだ男だ」

「？ キョンくん、何が良かったんですかあ？」

「っ、いえ、こっちの話です」

つと、ヤバイヤバイ。つい口から漏れていたようだ。

朝比奈さんはオレの誤魔化しに

「そうですか。変なキョンくん」

と、含み笑いで返すと暫くしてパイプ椅子を引く音がした。

朝比奈さんはオレの視界の外に居るため何をしていらっしやるのが全く見えない。耳で確認する限りでは動く様子が無いところを察するに、朝比奈さんは皆に倣ってお眠りになられるのだろうか？

「…えーと」

「ぐがごっ…」

朝比奈さんの方を確認しようと片方の手を放す為に力を抜いた瞬間、ハルヒがその行為を非難するかのように一際デカい軀を上げる。
…何だよ、放すなってか。

「ぐっ…」

力を入れ直すとまた元の軀に戻っていく。

…ああもう、正直ツツコミを入れるのも疲れたぜ。

「つたく」

小さく嘆息した後、オレは手持ち無沙汰から首が楽に回る範囲で

男の長門やハルヒの寝顔をぼんやりと観察したり、あまりの華の無さに外見上は美少女の古泉がせめて埋めている腕の中から顔を出さないものかと末期な願望を向けながら、オレはまた眠気に襲われ、いつの間にか意識を手放していた。

遊行 鉄道・人生飽きたら、いただき道（前書き）

第15部部分ですーっ！

今回は約18日…ちよつと時間掛かちやいました。頭の中でふと浮かんでくる別作品ネタを吐き出す為に書いてたら余計に…（汗吐き出した別のネタというのも連載型で、

朝倉涼子キョンデレものが約3部部分（約30000文字）

と、別作品で

ゼロの使い魔ものが第1部部分（約10000文字）

出来てます…どうでしょう？（滝汗

えー、とりあえずそれは置いて、第15部はハルヒコとシヨタ妹が半々です。
では、どうぞー

遊行 鉄道・人生飽きたら、いただき道

「……ーン？」

「んー…」

誰かがオレを揺さぶり、気持ちのいい安眠から起こそうとしている。

半覚醒状態にさせられたオレはその行為を非難するように身じろぎをする。

「お、キョーン？ 起きろ」

非難とは言え、反応があった事に気付いたそいつは更に揺さぶりをかけてくる。

しかし、誰かは知らないが甘い起こし方だな。日頃の妹の起こされ方と比べたらもう雲泥の差…縦断爆撃と俄か雨ぐらいの差と言える。

ならば、オレが言うことはただ一つだ。

「起き…」

「あと5分…」

「…」

惰眠を貪りたい時の常套句を返すと相手はピタリと揺さぶりを止めた。

ふ…勝った。これで暫くは寝ていられそ

「起きろよ…」

と、勝利を確信したのも束の間、一向に起きようとしないオレに何を思ったのか、そいつはオレの頬をふにふにと突つつき始めてきた。

何だよ、しつこいな。

「涼宮くん…キヨンちゃん起きた？」

これは…古泉か。

普段は男扱いだから気にはしなかったが、流石に”ちゃん”付けで呼ばれると身体が受け付けられない…痒い。

「駄目だな。まあ、まだ時間あるし良いっちゃいいんだけどな」

珍しく寛大な判断だな。

男ハルヒは何故かは知らないが対応が甘く、扱いが緩い。元の世界でもこうであって欲しいが…まあ、無理だろうな。

「…あ、時……あるし…も…し……せとけ」

…ああ、眠気来た。

半覚醒状態だったのだが段々と耳が拾う言葉が途切れ途切れになり、ほとんどを聞き取れなくなった辺りからそれらを見殺し、オレはまた意識を睡魔に明け渡した。

…

机に押し当てていた顔半分がやけに暖かく、耳が脈打つ何かの音を拾っている。

身体は何か揺られるように一定のリズムを刻み、時折にふと浮いたかと思えば一定のリズムがまた刻まれる。

「毎日、放課後は送ってくし…居眠ってたらかうしておんぶまでして送ってって…有り難く思えよな」

耳朶を打つ、そんな愚痴の独自。

その主は、

「しかも、団長直々だぞ？ ホントだったらコスプレ10着ぐらい礼で返してもらいたいぜ」

ハルヒだった。

あまりにも眠り続けるうちに業を煮やしたハルヒが負ぶさってくれているらしい。愚痴の相槌も無しな所を見るとオレとハルヒの二人だけのようだ。

「…しっかし、軽いな。ちゃんとメシ食ってんのか怪しいな……古泉さんみたいになれないぞ」

知るか。確かに最初は古泉とのあまりの差に訝しみを持ったが、今ならこの貧相な肢体で良かったと思えるね…男のオレが色々持て余すから。

「寝る子は育つって言うが、お前は何処が育ってんだろっな」

…ああも、しつこいな。

「う、ううんっ…んんっ？」

「っ！？」

オレが身じろぐと面白い程に動揺するハルヒ。とりあえず、人知れず起きていて且つ、まさか自分の独白とも愚痴ともつかないそれを聴いていたとバレたら後が怖いので今、起きたフリだ。

…あー、

「…ここは？」

「お、おお起きたかつ？ ……良く寝てたな、お前」

度盛りながら肩越しにこちらを見てくるハルヒは微妙に寝ぼけ顔であろうオレの表情を見るとふと笑顔になった。

…んんまあ、

「今日、色々あったからな。思いの外、疲れてて昼飯食べたらずちまって起きたら……」

「俺の背中ってか？ いつも思っただけどさ、お前ちゃんと寝てんのかよ」

ハルヒは半眼になるとオレの生活習慣について色々聞き始めてきた。

寝てるかと言われればちゃんと寝ている。日々の疲労を取るために風呂に浸かり、温まった身体でそのまま布団に入れば至福の瞬間

だ。

ただ、その至福の瞬間を携帯の着信音に邪魔されたり妹が乱入してきたりと色々あったら必然的に眠れない時が出てくるわな。

「いつもは良く寝てるよ。ま、昨日の夜は色々…弟が寝付くまで寝れなかったからな」

「弟ちゃんは元気にしてっか？」

「…元気は元気だ」

言われてから妹が今日は何事もなく帰って来たのが心配になってきた。

朝、古泉から聞いた分には大事…今日オレが出くわしたみたいな事にはならないとは思っただが、大丈夫だよな？

「ま、あの風邪の子みたいな元気っ子がへこんでる姿なんか想像出来んけど」

「オ……あたしもそう思う」

オレもそう思ってた。だから、昨日の妹の表情は堪えた。

昨夜の不安げに抱きついてきた妹。今日は違つと頭を振って消し、周りを見ればもう近所の軒先…そろそろ家が近い。

…ハルヒコ。

「あー？」

もうそろそろ降りたいんだが…

「足届かないからしゃがんでくんないか？」

「あ？ いいじゃんかあ。家ん前まで負ぶってやつから」

…は？ うお！？

降ろしてほしいという提案に拒否を示すようにオレの身体を負ぶさり直す為にヒョイツと浮かせるとそのまんまスタコラと歩く。

「い…いや、いって。降ろせっ」

段々と気恥ずかしさを覚えてきたオレはハルヒの背中ではれるがやはり女の体格と男の体格、ビクともしない。

そうして、ハルヒはオレを背負ったまま最後の曲がり角を曲がると、正に目と鼻の先にオレン家の前…

「あっ！ キョンくっ……………う？」

妹が居た。

…何してんだよ、あいつ。

「お…うつ、弟ちゃん久しぶりっ！ 姉ちゃん運んできたぞ」

「あ、う…えつと……………ハル…あ、ハルっちだあっ！」

「おうおう、元気元っ…気だなっ、コイツめえ」

少し逡巡した後、妹のヤツはこの世界でのハルヒの呼び名？ を呼びながらオレを担ぐハルヒのどてっ腹に向かって突撃を敢行する。流石のハルヒもどてっ腹に食らってダメージを貰うが、それも一瞬で片方の手をオレから放すと抱き付く妹の頭をグシャグシャと撫

ぜまくった。

「うわあゝ…髪ぐしゃぐしゃあゝ」

「ばあか。これが髪整えてる手撫でかよつ。うりゃりゃあゝ」

「いゝやあゝ、きやはははあゝっ」

あゝあ、何かもう本来の兄貴を無視して兄弟仲良いなあ、おい。
見る間にぐしゃぐしゃになる妹の髪を見ながら、それを見て樂し
げに撫ぜまくるハルヒ。ったく。

…ハルヒコゝ

「いい加減降ろせつて」

「んあ？ ああ、降りろ降りろ」

オレの請求にハルヒのヤツはこっちも見ずに適当にあしらつよう
に言いやがった。

…いやっだから、しゃあがあめつてのっ。

「あ？ ああ、はいはい」

「あゝキヨンちゃん、ハルっちに負んぶされてるうゝ」

しゃがむのに邪魔になる妹を引き剥がすと、何事かそこちらを見
やった妹がハルヒの背から降りるオレを見て、何やら嬉しそうに指
摘してきた。

…ああもう。

「いちいち指摘しない。今になってあたしも恥ずかしいんだから」

実際、オレの顔が恥ずかしさから熱くなっているのが自分でも解る。

「キョーンちゃんの、お顔が真っ赤〜か〜」

ええいつ、歌うなっ。

「弟ちゃん、ご機嫌だなあオイ」

オレと妹のそんなちよつとしたやり取りを見ていたハルヒは機嫌良く笑っている…こんなに機嫌が良さそうなハルヒは見たことがないな。

「さて、と。名残惜しいが俺はもう帰るな」

と、帰宅宣言をするとオレの腕をグイッと引っ張ってきた…って、ハルヒコ。

「あたしん家はここなんだが」

「アホキョーン。ブレザー返せっのっ」

へ？

言われてからオレは自分の今の格好を見下ろしてみると、確かに今の女の身体には不釣り合いなデカイブレザーがカーディガンの上に羽織られていた。

「これ、ハルヒコのか？」

「そうゆうこった」

腕を上げて見て長さを比べてみるも明らかに長いし袖口も太い、裾も長いわでちよつとしたコートだ。

…ホント、デカいな。

「指先しか出ないし」

袖口から申し訳程度にしか出ない指を見ながら、誰にともなく呟く。男の身体に戻ったとしても今のハルヒの方がデカいんだろうな。

「…アホキョン。早く返せつての」

「あ、悪い」

ブレザーの背部分をぺちぺちと軽いデコピンで催促するハルヒコ。あまりにぺちぺちぺちとしつこいので見やると何やら顔が赤ら目になっている…って、当たり前だ。暖かいつて言ったところでまだ3月、陽が沈めば寒いに決まっている。

オレは急いでブレザーを脱ぐとハルヒコに手渡した。

「……早く返せよな。ああ寒っ」

早く返せつつあったから早く返したと言うのに何やら口を尖らせていつものアヒル口になると、これ見よがしに口で寒い思いをしたのを強調すると身振りまで加えやがった。

…まあ、寒いわな。

「ハルヒコ、悪い。あたし達もう家に入るな」

「へ？ え、あ、ちよっ」

「ふえ？ もう入っちゃうの？」

当たり前だろ。

さっきまでそれなりに温かったが、ブレザー脱いだら急に寒気が来たし。

「まだハルっちと遊びたいーっ。ハルっちもお家においでよお」

「うえっ！？ ちよっ、弟ちゃん？！」

なっ、ちよっ…

「おまつ、何言っただよっ」

「そ、そうだぞっ！ 弟ちゃん、覚えとけ？ 男子ってのは女子の家にみだりに上がっちゃあダメなんだからなっ」

「…なんで？」

意味が解らないとばかりに訊いてくる妹…いや、もう勘弁しろよなアホ妹。

埒が明かないとみたオレはハルヒの言い分も含め、妹の両肩を持つて回れ右をさせると玄関の方へと押しやった。

…あーハルヒコ、すまん。

「えと、負ぶってくれて有り難な」

「あ…ああ、あぁっ。あれぐらいいつでもやったらっ！」

意外に気前のいい返事に思わず微苦笑を浮かべてしまっ。

「…今度何か奢るな、ハルヒコ」

「べ、別にいらんっ」

…む。

折角、オレから奢っちゃるってのに要らんとは何だ、要らんとは…まあ、いいか。

「…ほらっ、お前も相手して貰ったんだからバイバイくらい言え」

「ううー…ハルっちバイバーイ」

「おう。…おい、キョン子っ」

ん？ 何だよ？

「明日の土曜は探索すっからなっ。10時っ」

「へいへい」

りよーかいしますたよ。

「遅れんなよ！？ えと、」

「ん…ありがとな。送ってくれて」

オレは再度、笑顔で礼を言った。

無いとは思うが、あのまんま部屋に置いてけぼりを食らうトコだったからな。

「つぬ…う、じ、じゃあなっ！ とりあえず、さっさと寝ろよっ？」

ああ。

「帰り、氣い付けてな」

「はんっ。誰に言ってやがる！」

と、何か捨て台詞みたいな事を言っ、ハルヒは昨日と同じ様に全力疾走でその場から走り去る…もう見えんし。

「…ハルにゃんカツコ良かったね」

手を翳して見えもしないのにハルヒの走り去った先を見ていると妹がオレを見上げながら呟く。

「まあ、元が良いからなあー。あまりカツコ良くない兄ちゃんが悪かったな」

しかし、こればかりは仕方がない。

神はオレに二物…巻き込まれ体質と柔軟な適応力を与えただけで他を忘れやがったからなあ。

…まさか古泉みたいなのが良かったとか言わんでくれよ？

「言わないよー。だからそれじゃダメで…えと、カツコ良いとか悪いとかじゃなくて…キヨンくんはキヨンくんだもん。キヨンくんがお兄ちゃんだからあ、わたしはキヨンくんが好きなんだよ」

…んー。

いまいち妹の言ってる意味が良く解らんが、一生懸命にオレが兄で良かったかを言いたいみたいな事は充分に伝わってくる。

…ありがうな。

「兄ちゃんもお前が好きだぞ」

言って頭を撫でてやると妹は照れ笑いを浮かべ、撫でられて気持ち良さそうな顔になっている。

…っと、忘れてた

「オレ達まだ外じゃねえか。ほらっ家に入るぞ」

「はあゝい」

妹の両肩に乗せていた手をそのままに家の中へと押しやりながらオレ達は入った。

適当に靴を脱ぎ捨てながら、ただいまを言い、奥から返事を聞く前にオレと妹はさっさと二階へと上がっていく。流石に家の中は冷た目だった外気のそれとは違い、まったくと温い。

そのまま自分の部屋に入ると約束通りに妹の相手をする為、着替えてる間に自分がやりたいゲームを選んどくよう言っておく。

「えゝとー…：ゲゝムー、わたーしゝもおゝ遊ぶうゲームゝ、ゲムー」

またぞろ新しい即興の歌を歌いながらソフトを選ぶ妹。

電源の入ってないテレビ画面に映り込む、その表情はやたらと嬉しそうであり楽しそうだ。

「キョゝンくーんとおゝ久しぶりいゝのー、对せゝんー」

…あー。

ここ最近は適当にあしらってばっかだったのを思い出す。

その理由は言わずもがな。SOS団の活動に振り回されっ放しの毎日で何も無ければ無いで、嵐の前の静けさと身構えて体力温存とかを考えてた。

…なら、今夜とことんやったるか。

「決まったかー？」

「んーとー、まあだ〜だよー」

歌の調子のまま返事を返す妹。

一応は候補は出来上がったのか、他を片付けでソフト4〜5本を手元に置いて悩んでいる様子だ。

…ふむ。そんななら、

「ボードゲーム系なんてのはどうだ？」

「これー…？」

妹が一本のソフトをオレに見えるように両手で掲げつつ、小首と上半身を使って傾げている。

そのソフトは所謂、土地マスにある空き物件を買っていき、他プレイヤーが自分の物件に入った時に貰える買い物料：罰金：や株、出発地点の銀行から貰えるボーナス等を使って資産を稼ぎまくり、ゴール設定資産を超えて最初の銀行に入った一番多く総資産を稼いだプレイヤーが一位という、ルールとしてはオーソドックスなゲームだ。だが、

「…いいの？ いっぱい時間掛かるよ？」

本当に？ と言いたげではあるが自分の好きなゲームだけに妹の表情は嬉しくて堪らなそうだ。

そう。妹が言う、この時間が掛かる…は実は端的な表現ではない。このゲームはゴールする為に必要な資産のボーダーを変更する事は可能で、やろうと思えば幾らでも早くクリア出来る…何もしなければ。

「一応、紳士同盟ルールでやるから良いだろ」

紳士同盟…このゲームをするに当たって、以前オレと妹で作ったルールであり、お互いに故意な足の引っ張り合いはしませんという意味だ。

「やった〜」

何故にそんなルールが存在するのか…このゲームのミソである、あるシステムがかなりの曲者なんだな、コレが。

物件は幾つかのエリアに別れて3〜5つずつあり、一つのエリア毎にプレイヤー一人で占拠すれば資産価値が倍増し、買い物料も上がる。だが、他プレイヤーの所持物件を任意で強制的に買い取る事が出来る5倍買いで”邪魔”をする事ができるのである。

「電源入れるね〜」

次に株というシステムがある。

基本はインサイダー。エリア毎にその株価値が違うのだが、ある一定枚数を買ったエリアの株価値が上がり、買えば買うほど所持枚数分と株価値で資産が上がり且つ、株を買ったエリアに自分

の物件が増資を行えば上がり幅が飛躍的になる…が、実は売るときにも一定枚数売ると価値が減るといふイベントが起きる。これ…売る時は任意で所持枚数に大幅な開きがある場合、一定枚数売って筆頭株主の資産を減らして”邪魔”をする事が出来、何らかのイベントで店を売却した場合も下がる時がある。

と、まあ。この”邪魔”…すべての資産を上げる行為に関わってくるから奥が深い。

「っし」

オレは制服からセーターにジーンズといったラフな服に着替え終わると妹の隣に座った。

画面はタイトルが終わり、設定画面に進んでいる…

「…」

「スゴいね、キョンくん…ゲームのキャラも男の子女の子が逆になつてるよ？」

…そう、だな。

正直、ハルヒ印トンデモパワーの徹底ぶりには頭が下がる。

何せ、COMキャラ選択画面を開くと登場キャラの全部が性別反転しているんだからな。

…さて。

「…マップはあゝ、と」

「空き地があるところがいいゝ！」

へいへい。

「離れ小島は要るか？」

「要るゝ！」

妹のやつ、テンション高くなってきたな。

空き地と離れ小島は……何か長々と説明しすぎだな。と、まあ色々足を引っ張る要素がふんだんにあるゲームなわけだが、人生とか電車に飽きたって奴はこういうのも一度どうだ？

「やあゝんつ、マーク揃ってるのに小島から出られなあいー！」

暫くゲームが進むと色々な弊害が出てくる…顕著なのはサイコロ運か。

サイコロ運悪く、離れ小島に飛んだ妹が本ルートに戻れず、ブーたれている。が、オレは妹がそこから出られんという事実になんか脅威を感じていたりする。

…つか、早く出してくれ。

「序盤で通るだけで買い物料300Gって法外だろっ？ 宿屋をそれ以上、回転させんなっコラ」

「むうー…だつて出られないから仕方ないもゝん」

しばらくして離れ小島から本ルートに復帰した妹と入れ替わりにCOMの一人が飛ばされ、妹の宿屋をひたすら回転させ…ている内にそのまま決定打を振り込んだ。

…お、COM一匹トんだな。

「撃墜数いちゝ」

…オレもつかうかしてられんなー。

現在、現金の差でトップを走る妹にサイコロ運に助けられて地雷原を避けまくるCOM。そして、逆に思うようにサイコロ運が振るわず、無駄な牛歩に苦しむビリのオレ。

「むー…んー」

とりあえずは…と、急場凌ぎにまだ価値が低い妹とCOMの株を選んで自分も相乗りしていき、COMの無計画増資で資産を増やしていく。

凌いでる間に何とかエリアの過半数を占める事が出来た幾つかの株の内、誰も手付かずのモノを買い漁り、大量株を所持してから将来性の高い物件から増資していく。

「キョンくん。わたしもここ買っていい？」

株マスに止まった妹があるエリアにカーソルを合わせて訊いてきた。

…別に構わんが、

「…そこ完全に割拠ってるし、オレはもう上げ切ってて旨味なんぞ無いぞ？」

「ウソ言っちゃダメだよー」

と。妹は、にぱあとした笑顔を見せたかと思うとオレの口八丁には惑わされずに株を買い始めた。

…ちいっ。

「やっぱ覚えてたか」

「キョンくんが取られた空き地そのままにするわけないもん。それに今、お金あるからすぐ買い上げちゃうでしょ？」

したり顔で指摘する妹にオレは黙秘を行使した…って、まあ結局は買ったんだが。

しかし、まあこの手のゲームをプレイしてる時の妹は非っ常に目敏い。ソフトの持ち主は大概オレなのだが、物に依ってはプレイ時間で妹の方に一日の長があったりする。

更にこのゲームに限ったなら、もうオレが眼からウロコを出してしまいそうなテクニクを見せ付けられたのは正直、一度や二度ではない。

「んと…ここはヘリコプターかなー」

特に空き地を扱った際の運用がスゴい。

先にも書いたが離れ小島での宿屋…一周6マスしかない小島に通った回数×10G買い物料の宿屋がエグい。離れ小島から脱出するためのジャンプマスに止まれなかった場合、滑車を嬉々として廻すハムスターが如く延々と宿屋を通らなければならんからな。

最初は差ほどにも痛くないんだが、段々とまあボディーブロー宜しくとか、真綿で絞殺みたくジワジワジワと効いてくるんだよな、コレが。

…空き地の殆どはお前が取っちゃったな。

「…さつき株買ったトコの取られてる空き地は兄ちゃんが奪うからな」

「はあ…いい」

妹の空き地の運用方法は基本的に先の宿屋や移動手段のヘリポート等の特殊物件が主で、一番資産価値の高い通常物件を建てる事は全くない。

オレは逆に特殊物件は必要最低限のみで中盤戦からは通常物件を建て替えて資産の向上を狙う。

「っし、空き地げつと…と」

よし、目的の空き地を買い取れた。

短く中期戦は妹を出し抜くのは大変に骨が折れ、下手をしたらオレがトブ恐れがある。が、こうやって長期戦になだれ込めば…

「ああっ、また離れ小島に飛んじやったあーっ」

と、こんな感じに何かしら起きるわけだ。

…とりあえずはこれで、

「競合せずにここの株が買えるな。ま、しばらくは宿屋の回転でもしとけ」

「むうー……良いもん。いっぱい回って通るだけで1000G取られるような宿屋にするんだからあっ」

…んなモンこさえられた日には真っ先にトんだCOMは明日は我が身ってヤツだな。

「ぐるぐる〜回ってえ〜くうるくるー、今あで〜520うー」

「…む」

これは急いだ方が懸命だな。本ルートに戻らない限り他にやりようが無い妹はひたすらに離れ小島を回りまくっている。

オレは銀行と株屋を回って買い取れた株の量を確認した。
…枚数足りる、か？

「ええい、四の五の言ってられんか」

意を決するとオレは行動に移す。

空き地を通常物件に変え、自物件に止まればひたすらにその物件を一気に増資していく。

「600おーば」

オレの怒涛の追い上げを見てか、妹のサイコロを振るボタンを押す指にも力が入り、オレもギリギリ届くか届かないかでボタンを押す指に力が入っている。

…ようし、この調子なら…ん？

「…5、…4…3……っげ!？」

さっき振ったサイコロの出目にイヤな予感を感じて確かめてみたら…マズッたっ。

「やったあゝっ！ 一名様ごあんーなあい」

平時、日頃のリアルラックの無さがここへ来て、痛恨の離れ小島へのジャンプマスでビタ止まり。

オレは急いで小島の反対側にあるジャンプマスへのマス数を数え、妹が手塩に回していた宿屋の買い物料を見る。

「一回通っただけで680…デカいなあ…っ」

「愛情込めてく回したからあ、いっっぱい落としいてねえー」

マズい、非常にマズい。

一回で出られれば儲けモノ…しかし、ひと度ハマれば通過の度に積み重ねていく+10G。しかも、妹はまだこの小島に滞在中のため二人で宿屋を回す事になれば一度の通過で1000以上なぞあつと言っ間だろう。

それら、数字のプレッシャーが大きくのし掛かつて来る。

…なあ？

「止まったららば」

「キョーンくんのおく土地荒あらすう」

「っ！」

まさかの恐喝…オレは妹に戦慄した。

…っ、オーケー。いいだろうっ、

「ここで見せてやろうっ。ここぞって時の兄ちゃんの力をおっ！」

たかがゲームでと思われるかもしれん。が、されどゲームである。勝負に興味なぞ無かったなら古泉とのゲームでたまに負けた時、こっうイラッと来るかよっ。

自ずとサイコロのボタンに掛かった指に力が入る…いざ、運命のボタンを押さん！

「うおお」

「晩御飯出来たよー」

階下からおふくろの夕餉を告げる声。

勢いを削がれ、ボタンに迫った指は滑って空振り、行き場なくウロウロする。

「キョンくん、ご飯だってー」

さて、どうするか。

このまま放置し気になったまま飯を食うか、ボタンを押して結果を確認してからでも良いが…出られてなければ今日の夕餉は味気なくなる事間違いないだろう。

…うーむ。

「こーはーんっ」

動かないオレに妹が肩を引つ掴んで揺さぶりだす。

…ああーはいはい、分かった分かったから。

「ほら、飯行くぞ」

「うん」

そうして、オレ達は立ち上がると部屋を後にし、食卓へと向かった。

湯浴 姉弟だと特に抵抗感は無（前書き）

更新に2ヶ月も掛けてしまいました……第16部分を心待ちにしていた読者様には大変ご迷惑をお掛けしてしまったと反省……いや、猛省しています。

これを更新した後、いつも通りに評価一覧へと赴いてコメントがあるかを見に行くのですが、正直怖いです。けど、この2ヶ月でどんな批評があってもちゃんと書き込めます……書き込みますので……えと、見捨てないで下さると嬉しいです（あせ

えと……第16部分ですが、遅れたお詫びというか文字数は5割増の量です……本来なら伏せるはずだった入浴風景を存分に書きました。

まさしくキョン妹（男の子）一色です。

この更新分のキョン妹に萌えていただけたら幸いです。では……（礼

湯浴 姉弟だと特に抵抗感は無

…うーん。

サイコロを振り損ない、この後のゲームの展開をどうするのかを
考えながら気にしながらの夕飯はやはり味気ない。

「んー、んー、んー」

んな風に思いながらオレが飯を食らってる横で妹はご飯を口一杯
に頬張り、ご機嫌に鼻歌交じりに食事中…何の気兼ねもないってな
風で美味そうに飯を食っているのは大人げないが無性に腹が立つな
そんな妹とは対照的にオレは飯を口に入れては、もそもそとした
ゆっくりなスピードで箸を進めている。少し面食らったのは意識せ
ずに食べているとやたらと背筋は真っ直ぐに姿勢正しくしているん
だよな、この身体。

外じゃ意識的に関係無くダラケてるんだが、家ン中では何かあ
んのかね？

「キョンくん」

「…んー？」

「今日もわたしも一緒にお風呂入った方がいい？」

…そだな、

「今日も頼む」

「じゃあ、また流しつこだー」

もうすぐ小6になるというのに何ともまあ嬉色満面な表情でしよう。

一般的に兄弟姉妹でもこの年代だ。妹の周りでもまだ一緒にお風呂なんてのは流石にナンセンスだろう。まあ、ある意味こうも純粋なのは貴重なのか…いや、だからといって元の世界でそれは犯罪だつ。

「おふぉー」

そんなオレの気を余所にまるで大好きなイベント事のように待ち遠しげに上機嫌な妹…口の中に飯入れたままで喋るんじゃない。

「ふー」

…ふう。

しかし、まだ妹が弟な分だけマシなのか、一緒に風呂…と、相成ってもあんまり抵抗がなかったりする。

いや、これはある意味助けられてるんだよな。入浴中に自分の身体を洗う内に欲情…正直、火照りを持て余しますっ！ てのはあまりに笑えん。

…はあ。

「…まだ食べ終わらない？」

…んー？

物思いに耽りながら食べているといつの間にやら妹は食べ終わったらしく、オレの方を見やって急かしてきた。

同時に食卓に着いたのに妹の方が早いとは、つくづくこの身体に見合ったこの小さな口は容量が無い。その上、

「おかず、何個かやるぞ」

「？ いらなの？」

この身体は少食仕様…いつものクセで大皿から移したおかずは本来なら平気で平らげられる量も今は無理なのだ。

自分の身体ではある。が、意識は男…配分が男寄りになるのは仕方がないんだよなあ、難儀な。しかし、

「全然食べられないの？」

…ああ。

食べた量を考えると確かにハルヒの奴が心配する少食さだよ。

「だから遠慮せんでいいからな」

「じゃあ、もらっちゃうね」

言葉を受けて妹がオレの皿からおかずを幾つか浚っていき、見る間におかずを消化していく。

これは元の世界以上に食べているような気が…やはり身体が男の子だから食欲旺盛なんだろうか？

「…あんまり食うと太るぞ」

「大丈夫だよ、学校でいっぱい動いてるから。スゴいね、駆けっこしたら速いんだよ？」

そりゃあ、色々と筋肉の質とか違っただろうし。

「ミヨキチなんかもつと速いんだー」

…ほう。

直接見たわけではないが妹の言葉は事実だろう。

ああ小学生離れた体格だ、小学校平均なぞ足元にも及ばない成績を叩き出しているに違いない。元も良いし、さぞかしイケメンならぬ美少年になってるんだろうか。

「な、ミヨキチはどんなだった？」

「うんー？ んとねー…背は変わんないけど髪が肩ぐらいで格好良くていつも女子に囲まれてるんだけど、今日わたしが見てるのに気付いたら一緒に居てくれるんだよー？」

意図した観点とは違うが、妹の説明は他に今日の学校での事がぼんやりとだが状況が判る説明だ。

昨日はただの一時的なモノだったか。昨夜の事もあり、朝から気懸かりではあったがこの感じだと杞憂に終わったな…あの子が妹の傍にいるなら滅多な事はないだろうし、それこそ

「でもねー、ミヨキチと居ると女の子がキヤーキヤー騒がしくなるんだよ？ なんてー？」

…は？

「…何だソレは？」

「分かんない。わたしは”せめ”だとかミヨキチは”うけ”だとか言ってたー」

「…」

「なんでー？」

「…はは」

…なんでだろうな、兄ちゃんにはさっぱりだ。
とりあえず妹にはそうはぐらかしておく。

考えたくはないが、どうやら妹達のクラスには”腐”の付く女子が居るらしい…そんな女子達が元は男子とは…いや、まあ確かに男子が読むこちらとは違ってアレには青年指定が無いらしいが、そんなものが小学6年の女子にまで蔓延・感染しているのはどうだろうか…いや、まて。なら、元の世界で既にそこの知識があるのか？

「…ふむ」

だとするなら、さぞかし小学生には見えないミヨキチを見てはその青い衝動を…っ、けしからん！ 実にけしからんっ！

「キヨンくん、どうしたのー？」

口に出したか顔に出たのか、妹が何事か訊いてくる…いや、別に何でもないぞ？

とりあえずは、だ。元の世界に戻ったら周りの男子の視線には気を付けると言いたい…言いたいが、妹にソレを言ったところで何故かと訊いてくるに違いないし、説明に困ってしまうのは目に見えている。

機会があれば、折を見てミヨキチに注意を促しておくのが無難だ

な。

…さて、と。

「浚えたし、ごちそうさまするか」

「ごちそうさまでしたー」

「風呂の時間までに勝負の片を付けるぞ」

「はい」

席から降りた妹はサツサと二階へと上がる。

順番はオレからだというに、先に座られても行動を済まさなきゃ
番が進まんだろうが。

部屋の戸を開くと妹の奴はオレのベッドでシャミセンの相手をして
いた。そう言えば、昨夜はこいつの姿を見掛ける事すらなかった
が妹の所に居たのだろうか？

…ふむ。

「な、シャミセン貸してみ」

「いいよー、シャミッ？」

それはちよつとした好奇心。

寝転がる妹に高い高いされているシャミセンを横から拝借すると
両の脇に手を入れて抱える。面と向かって暫し睨めっこした後、ソ
レを確かめてみた。

「…はあ」

正直、確かめるんじゃないかなかったと少し後悔した。

それはオレの予想に反し、だらしく伸びる胴体の下腹部には雄を表す物体がぶら下がっていやがった。

…何でお前だけ特別扱いなんだコノヤロウ。

「にゃ」

人語ではないが、その鳴き声は存外に我が知るわけ無かろうと言っているように思えたのはオレの気のせいかな？

雄の三毛猫の価値はハルヒに無意識で一計を案じさせるらしい。言わせてくれ、その気配りを常日頃に回せよう。

「キョンくん、早くしないとお風呂沸いちゃうよー」

…ん？ あ、ああ。

色々ともやもやしたモノを胸中に湧き上がらせていると、シャミセンを取られて手持ち無沙汰になっていた妹がゲームの方を急かしてきた。

正直、この性別反転での扱いの違いに思う所が出来たのだが、今日はずつと巻き込んでしまった妹へのケアをするんだと決めている。だから、第一に動いてやらないと意味がない。

…そだな。よし、

「とりあえず終わらすぞ」

気怠げに欠伸をしながら尻尾をぶらぶらとさせていたシャミセンをベッドに置いとやるとそのまま丸くなり、すぐに眠りの態勢へと入った。

コイツは元々もさることながら度重なる事件の影響で頭が良いはずなのに、ここからまた騒がしくなるのは目に見えているだろうに

それでも寝入ろうとするとは…本当に大物だねえ、コイツは。

「巻き返せるかな」

既にテレビに陣取り、こちらを振り返る妹。

オレは負け惜しみ気味に不敵な笑みを向けると隣に座るとコントローラーを握りしめ、今度こそ確実にサイコロのボタンをグッと押した。

さてと、これ以上ゲームの内容をつらつらと書くのも何だからな割愛させてもらおうぞ？ 結果としてはあの後、一発では抜けられずに再三に四苦八苦したもののトビもせず、何とかゲームを終える事が出来た。順位は妹が断トツのトップでオレは下位争いを辛くも制しての二位…妹に兄としての威厳を見せ付けられなかったのは運なのか、実力かやり込み具合の差か。

そんなこんなで一回戦を終えた時、下から風呂が沸いたとおふくろの声があつたので二回戦は後回しだ。

「お・ふ・ろ」

やんややんやと嬉しげな妹に対してオレは少々鬱だ。

何せ、入浴中は余計な事を考え無いために五感の一部を意識しないように制限しなければならず、瞼は閉じたままで視界は真っ暗。暢気な妹の実況を耳にしないために聴覚は手で塞いでおく等々…涙ぐましい努力をしなきゃならんからな。

我ながら状況を楽しむような楽観的やら享乐的な部分と言つか、そんな甲斐性のようなモノがない自分が悲しい。

「さ、キョンくん。脱ぎ脱ぎだよー、目つむってー」

脱衣所に来るとそこからはもう完全に妹主導で為されるまま。

身の回りの世話：着替えを上から下まで侍従にしてもらうのに身を委ねる貴族とはこんな感じなのかねえ？ 正直、全然気が休まらない。

妹にしてみても昨夜の最初は戸惑ってはいたが風呂から上がり、服を着せる段にはもう手慣れたもので今のオレは等身大の着せ替え人形みたいなもんだ。

「キョンくんはブラジャーとかないのー？」

…んな事訊いてくるなよな。

目を瞑り、身を委ねていると妹が何とも答えにくい疑問を口にした。

把握している限りにはみんなスポブラばっかだったように思う…曖昧な表現だが、あまりガン見するわけにもいかんだろ？ 今のオレの身体は最も自分に近しいくせに正反対にいる他人様のなんだからな。

「…無いな、多分」

「そうなのー？」

だから、この世界の自分のクローゼットは未知の領域ばかりであり、必要最低限に止めながら確認しかしていない。

その中で実は心許ないスカート対策として見つけたものがあつた…それは、

スパッツだ。

もう見つけて思い付いた時はナイスアイデアだ！ とガッツポーズしたね。あれを履けば少しでも気を紛らわせられる…と。だが、

蓋を開けずともお気付きの通りに結局は穿かずに学校に行っている。
理由は簡単だ、

実際に穿いてみたオレは絶句したんだわ、これが。

何と言いましようか…穿いてみての感想は、だ。色々あるんだが、要はあのピッタリ感がオレに何か要らんモノを芽生えさせそう
でヤバかったのが最たる理由だ。

つまり、オレにはその属性はまだ無いのであつて

「ミヨキチはちゃんとしたブラジャー着けててね」

…

「それがどうかしたか？」

「カッコイイんだよー？」

…そうか。

つか、それぐらいしか言えん。

妹の奴は何が言いたいんだろうか知らんが、正直そんな情報を口
出されてもオレには何も言えんっての。

そりゃあ、年相応な女子にしてみれば憧れの的だろうさ。

「…んー、しょ。はい、タオル巻いたよ」

途端に感じる、胸へのささやかな圧迫感と妹の言葉を受けてオレ
は瞼を開くと、

「…」

目の前の鏡に映るはタオル一枚、ポニーテールが似合う女の子の姿が映っていた。

それを眺め見ながら不謹慎ではあるが、ハルヒや朝比奈さんので目が肥えてて助かったと言わせてくれ。もし、それ以前ならこれだけでも直視すら色んな意味で危うかった。それくらいの破壊力がこの世界のオレにはあった…って、何言ってんだろうね、オレは？

「次、わたしー」

軽く額に手を当てて顔をしかめていると妹がバンザイしながら目を瞑り、オレを見上げてきた…本来なら自分で脱ぐのは別に差し支えは無いが、これは妹なりの配慮なのだろう。

昨夜の風呂も含め、今の間は互いに服を脱がし合う事にした。学校等での不可抗力な部分以外も全てなるべく見ないよう慎重に事を成し、家では互いに手を貸しつつ借りつつ行えるならその方が良い。妹の年齢ならまだ先に言ったように勝手に脱いでも良い。だが、それをしないというのは幼いながらに体面と言ったソレを理解しているのだろう…何気に思慮が深い。

兄ちゃんは嬉しいぞ。

「…ん。そら」

「…ふむ」

…ふむ。

服を脱がせるとオレの手が止まる。

妹の男の子の身体を見ながら、この発育状態は元の世界でも大差ないのだろうかと思ふ。

妹はもうすぐ小6になる…というのに低学年でも通りそうな程に

その身体の幼さには少し心配してしまう。オレがこいつと同年の時はおつとマシ…一応には歳相応だったと思う。だが、この妹の男子の姿は兄としては心配だ。

子供子供しているとは常日頃感じてはいたが、目の前の妹の胴体は本当に幼児の様な丸みが全体的に残っているし、胸板も薄い。視線を下げて観てみると二次性徴といったものの前兆すら見えていないとは。

「…？」

一向に作業が進まない事に気付いた妹が瞼を瞑ったまま小首を傾ぎ始める。

…すまん、すまん。

「今からタオル着けるからな」

「はあい」

オレはそんな心配を何とか押しやって気を取り直すと作業を再開していき、最後に妹の腰にタオルを巻いてやる。

もう目を開けていいと言うと妹はパツと瞼を開けてこちらを見つめてきたかと思うと

「…えへへ」

ハルヒにも負けない笑顔を向けてきた。

…準備万端だな。

「じゃあ、洗うの任せるからな？」

「うん」

妹が嬉しげに頷くのを見たオレはお互いの髪ゴムを取ると洗面台に置き、連れ立って浴室へと入った。

「うおっ、さむっ」

その瞬間、暖房から隔離されていた寒気が湿気と共に露出した肌に纏わりつき、

「っひ、冷たっ」

当たり所が悪かったのか、天井から落ちてきた露に驚いた妹が声を上げてわたわたし出す。

これ以上の被害…オレが直撃を受ける前にやらなければいけない事をする事にした。それは、

浴室を暖かくするのを兼ねたカモフラージュ。

まずはお湯の蛇口を捻り、シャワーに切り換えると温かい湯が出るまで待った。

手で温かくなったのを確認するとそれで以て冷えた四方の壁を温めてやる。こうすれば壁は急激に温められて湯気が発生し、これを充満させれば視界が悪くなって己の身体と言えど見え辛くなる、浴室も温くなって一石二鳥なのだ。

それが完了すると次は妹の身体にシャワーを浴びせてやる。

「わあ…う、温かい」

背中から胸元、両肩に最後は頭。

充分にシャワーを当ててやるとオレは背を向けてイスに座り、今度は妹にシャワーを浴びせて貰う。

日頃の行動を考えると今正に妹が色々と余計な事をして問題があるはずなのだが、この時はお互いに気を配りあって事が進んでいく。

「じゃあ、行くよ」

…ん、頼まあ。

背中に向けられていたシャワーが頭へと移される。

水気を存分に吸った髪が背中にびったりと張り付くのを感じ、改めて女のオレは髪が良い感じに長いのを実感すると共にふと、あいつはもう髪伸ばさないのか？ と思った。

「あー、キョンくん何かニヤニヤしてるー」

シャワーを浴びせ終わり、シャンプーしようと前に回っていた妹がオレを見てそんな事を言ってきた。

…気のせいだ。

「えー、そうかなあ」

…そうさ。

オレは額に張り付いた髪を払うなり汗を拭う振りをしながら確認してみる。が、感触はいつもの状態…イマイチ自分に自覚はないんだが、そんなに顔に出やすいのだろうかね。

古泉にでも一度訊いてみるか。

「んな事より。ほら、今回も頼むぞ」

「はい」

返事をすると共に髪が洗われ、オレは瞼を閉じて妹の手に身を委ねていく。

その手付きは丁寧で手を抜く感じは一切ない。いつもの妹では想像出来ないが髪は女の命と言うが…髪の大切さは女性共通であり、年齢は関係ないと言うことか。

「カユいところはないですかー」

…んー？

「問題ないぞー」

理髪店「こつこ…」というか。

この歳でこつこつというのは少し恥ずかしいぞ、妹よ。

「んー…」

今度は何だ？

「ハルにゃんほどじゃないけどキョンくんの髪もキレイだよー」

「そつかー？」

その辺はどうも自分に対しての評価ってのは難しくて何とも良う言えないんだよな。

そんなオレに構わず、妹はキャツキャツしている。

「わたしもねー、女の子のキョンくんくらいの長さまで伸ばすんだ」

…？

「ほお」

そいつは初耳だな。

「じゃあ、何か？」

「うん。勿論、キョンくんのお気に入りのポニー」

…はて、自分の嗜好について妹に言っただけか？

念入りに振り返ってみたが言っただ覚えは無い。まあ、経緯はどうあれ身内とは言え、身近にポニー娘が居るのは嬉しい限りだし周りが周りだ。

んなお願いを口には出来んな…兄想いな妹を持って兄ちゃん
は嬉しいぞ。

「その時が楽しみだ」

「えへ」

目を瞑っているのを見てとれないが、恐らく妹は照れ笑いをして
いるだろうと気配で判った。

そういったやり取りをしながら洗髪が滞りなく済んでいく。

「…ふう」

妹の手によってオレの髪は梳いていかれ、上手くタオルで纏めら
れていく。

「終わりー。次はわたしの番ね」

そんな風に髪に関して諸々の工程が終わると妹はオレの交代で椅子に座り、妹の髪の番になるんだが、オレは少しの間待つことになるので何気にこの2日間を思い返すとある行為についてふと気付いた。

もしかしくても自分でポニーにして、鏡でそれを見てニヤつくってのはかなりシニールではなからうか？

と。

…むむむ。

「…キョンくん、どうかしたの？もしかしてお胸痛い？」

一向に作業が始まらないのを不審に思った妹が目蓋を開けてこちらを心配げに見つめてきていた。

…また、

「顔に出てたか？」

こくと頷くと妹はジッと見上げてきた。

違う理由から顔をしかめていたのだが、妹が言うような理由ではない。まあ、確かに息苦しくはあるがそう言うほどでもないんだよな。

要はだ、気にせんでいいってこった。

「そら、目開けてるとシャンプー入るぞ？」

「…ん」
「…」

変わらずオレの顔をジッと見つめ上げていた妹は此方に向き直るとあるう事か、その状態で眼を閉じてきた。

はて、何故に妹のヤツは顔を上に向きにして目蓋を閉じているのだ？ いやまあ、ある意味お約束なボケが返ってきたと言うことが…さてと、

「こら…そうじゃなくて下だろ、下」

「むー」

「言っこと聞きなさい。早く前向く」

「はあい…」

何がやりたいのかは知らないが何でそんな意気消沈な風に返事をするのやら。

風呂場で半裸という状況と相手が妹でなければ何ともガツッポーズものなシチュではあるが、何が悲しくて妹と”ごっこ”をせにやならんのだ。

「…」

ならば、相手は誰か…

朝比奈さん？

恐れ多い。つか、身の程を弁えろ、想定すること自体が罪だと才

レ自身に言いたい。

長門か？

バカか、オレは？ そんな事を考えるなんてのは論外だ……でも、アイツは多分、オレが言えば応じてくれるだろう、そんな気がする。理由は解らないが何処かそう思えたのかは解らない。いや、つか、こんな考え自体が失礼だろう！

これじゃあ、信頼を笠に着たセクハラじゃねーか。

「…キヨンくん？」

…あ、ああ。

また考えが深みにハマってたようだ。

「悪い。今から洗うな」

オレはシャンプー液を手につけると妹の髪をやんわりと洗い始める。が、手は動くが思考はまだ抜け出してくれない。

しかも、次に出てきたのは何故か

鶴屋さん。

だった。何かもうね、自分の頭の中身にうんざりするぜ。手当たり次第じゃねーか。

…あー、

で、結果出て来た、と。ふっ、残念だったな、アイツとは既に済んでいる…

「…」

したんだよな、オレ。アイツ…ハルヒに。

もつ目と鼻の先、そろそろ一年に成る…と言うに少しでも思い返せば、すぐにでも蘇ってくるその感触が生々しい。一瞬だが触れたような感じまでが再現されてしまう。

まあ確かにアレが初めてだった訳だし、シチュやら何やらが相俟ってかつてない程に鮮明だ。今、絶対に顔が紅いに違いないっ。

「…キヨンくん？」

…っ？

「な、何だ？」

「さっきから同じとこばっかり」

心、此処にあらずと言いたげにアヒル口でオレに抗議してくる我が妹。

小学生が一丁前にオレの意識が全然自分に向いていないのを感じ取り、大いに拗ねているようだ。

…まあ、何だ。

「すまん。ちよつと考え事してた」

「…ハルにゃんの事？」

何故解るつと、内心ツツコミ入れる。が、悟られる訳にはいかなバレル訳にはいかないので白を切るしかない。

…さあ、な。

「ほら、閉じてないと入るぞ」

「むゝ…」

はぐらかすと妹は納得はしていないからなっ？ とばかりに不機嫌なため息を吐くと此方を見やっていた片目を閉じた。

とりあえずは一段落か…だが、その機微に気付いた以上、オレが放っておくわけにもいかないのでちゃんと機嫌を取っておく事を忘れない。

「ほら、シャワー掛けっからな」

「…ん」

それを察したのか、存外にご勝手にどうぞ感を滲ませながら返事をする妹。

とりあえず、オレは妹の髪に付いたシャンプーの泡を洗い流していく…さっき妹がオレにしたように五の指で髪を梳いてやりながら優しく。

「ゝ…っ」

くすぐったいのだろうか、妹が自分の腕を抱きながら身を縮こませて肩を微かに震わせる。

「どっか痒いのか？」

「…ゝ、っ」

「っ？」

オレの問いにふるふると首を振つての否定のジェスチャー…のとはつちりの水滴攻撃と残り泡を受けるオレ。

一瞬だがペットサロンの一風景を垣間見たのは内緒だ。それはさて置き、一旦は流し終えたわけだが…ま、何だ。

「ほら、頭こつち持つてこい」

「…う、え…い、いい」

泡を落としきつてホツとしている所にそう告げると妹は眼を微かに見開き、遠慮がちに再度、ふるふると首を振ってきた。

…はあ。

「走り回ってたんだろ？ 二回目やるかやらないか、匂いみないと汗臭いのが残るかもしれんぞ」

「っ？ あ、う…」

そう、必要があればシャンプーは二回。オレはどちらに関わらずそうだし、した方がいいに決まってる。

何でか嫌がる妹を無視しつつ、オレは身体を寄せると妹の頭をソツと抱え、そのまま髪に鼻先を埋めた。何度かそのまま匂いを嗅いでみて別段、問題が無いかと判断すると顔を離し、身体を離して妹の頭を解放してやると、

「…」

何やら俯いたまま手をモジモジしているのは何でだ？ …まあいいか。

頭を何度か触れるように軽く叩いてやる。

「さ、このまま身体洗うからな」
「…うん」

小さくではあるが妹が頷くのを確認するとオレは再度シャワーを被り、身体を十分に温めていく。それもある程度で見切りを付けた後は一旦はシャワーを止め、用意してあった別のタオルに石鹸を存分に含ませるとそれで以て妹の背中を洗っていく。

…それにしても、

「こうやって背中流すなんて日が又来るとは思わなかったな…」

「わたし…」

…ん？

呟きながら背中を洗ってやっていると妹がそれに対して口を開いた。

「わたしはキョンくんが良ければ一緒にお風呂に入りたいよー？」

「まあ、元に戻るまでは世話になるさ」

「そうじゃなくてー…戻っても一緒に入」

「勘弁してくれ」

不穏な妹の言葉を無理矢理遮る。

当たり前だ。兄ちゃんは捕まりたくない…いや、それ以前にそんな趣味はないっ。

「まったく、冗談は休み休み言え」

「わたしはー、一緒に」

「ベタな返しすな」

妹の洗いたての髪に手刀をかますと、へむっとか呻き声が聞こえてきた。

…はい、こっち向く。

「前洗うから眼閉じてろ」

「…はあい」

…頼むからそんな落ち込んだ声色で返事しないでくれまいか、妹よ。

前々から兄離れ出来て無いような気はしていたが、まさかここまですとは…何処で間違えたんだかなあ。他の兄妹もこんななのか？

「…はあ」

「むう…」

頬を膨らませて拗ねる妹に再度ため息を吐きつつ、前を洗っている。

「…」

…ふむ。

前を洗っていると不謹慎とは知りつつも、目線が思わず下に行ってしまう。

妹のココは朝比奈さんとは違い、身体に相応なので躊躇うとか息を呑むとかしないで済むのが気持ち的に楽でいい。何というか…部

室での着替えで目撃してしまったアレは男としての矜持を碎かれるので正直、滅入った。つか、

身体はシヨタでアレが極道なのは流石にダメだろ？

あまりのアンバランス差に身体が熱くなっただのは言うまでもなく……て、何言ってるんだ、オレ？

ん？ 待てよ……まさかアレは胸の大きさに比例しているんじゃないだろうか？ だとすると、この観点からアプローチしたと推移するとハルヒの基準では、

古泉>>超えられない壁>>谷口>国木田 オレ

という事に……すまん、ちょっと泣きそう。

何だか色んなモノが崩れてきそうだ……自慢じゃないが、オレは人並み以上はあると思っていたんだ。嘘じゃないっ。

「はああ」

「？」

っと、語りが少し脱線したな。

オレはんな事を勝手に考えた脳に頭を振って無理矢理引き剥がし、自己嫌悪その他諸々で凹みつつも妹の身体を黙々と洗っていく。

上半身が終わり下半身、足の指や足の裏と全て終えたとお湯の蛇口を捻り、シャワーを浴びせて石鹸を流してやる。妹はまだ拗ねたまんまだが、大人しくしてたので滞りも全くない。

「よしっと、もうちょっと待ってる」

「ん」

流し終わった後は盥でタオルに付いた垢やら石鹸を落としに掛かる。

思いつ切り空気を入れて揉み洗っては流し、洗っては流し…を繰り返し、水面に垢が浮かなくなるまで一連の作業を繰り返す。しばらくすると残りカスも浮かなくなってくるのでそれを確認するとキレイに畳んで水を絞り、座る妹の膝に置いた。

その後は盥の縁に付いてしまった垢を手で擦り流すだけだ。

「眼開けていいー？」

…まだだつての。

「ぶー、ぶー」

「ああもつ、ほら」

手持ち無沙汰で退屈な為、ブーたれ始める妹を立たすと腰にタオルを巻き直した。

…はあ、

「…んじゃあ、次は兄ちゃんな」

「はあい、まかせて〜」

と、言うわけで今度は洗われる側になるわけなんだが、オレはと言つと妹を退かしては早々に眼を閉じておく…でないと意識しかねん。

「タオル外すねー」

…おう。

宣言と共に胸の圧迫感が消えて呼吸が幾分か楽になった。
何て言うか、慣れない息苦しさから解放されて一息付けるというヤツか。男だったオレには普段から身体…胸元にタオルを巻く習慣なぞないから当たり前か。

「ふう…」

「大丈夫ー？」

…正直キツかった。

「じゃあ、洗うねー」

真っ暗な視界。

感覚だけが自分がタオルで洗われているのが解る。
弟…と男の子の力とは言え、妹の体格に見合った頼りなあい力。
うんしょんしょと健気な掛け声付きで腕が動いているのを耳にして何か癒されるのはオレが兄バカだからなのか。

「…キョんくんの背中、狭くなっちゃったね」

背中をこしごししながら妹が残念そうに呟く。
ずっとこのままな訳じゃあない。

「すぐに戻るから安心しろ」

…兄ちゃんに任とけて。

現状、長門待ち…記憶の整理が終われば直ぐにでも原因の会話や
ら言動を究明し、ハルヒの気を逸らせるなり何なりで世界を元に
戻す。

こんな状況を何度経験したって話だ、実績あるから自信もある。

「でも、それだと」

…ん？

「元に戻っちゃったら一緒にお風呂入れなくなっちゃう」

またか。

「あのなあ」

オレは思わず額に手をやる。

確かに判らんでもない…昨日今日と妹の喜び様を目の前で見てっ
からな。

「…」

妹の手は完全に止まり、口も開かないからお互いに黙り込んで居
辛い雰囲気だ。

…はあ。

「元に戻ったら無理に決まってるだろ…」

「…うう」

耳が妹のぐずりを拾う。

「…戻るまでは良いんだ。解るな？」

「…ん」

…だから、そう言うこつた。

「…うん」

再び妹の腕が動き始めて背中を、次に腕をと洗われていく。
まだ立ち直れないのか、先程からの掛け声にもイマイチ覇気がない。

「…キョンくん、前」

…あ、ああ。

問題の身体の前を洗うようなのでオレは気をしっかり持つと腕を若干広げ、グツと全身に力を入れる。

「あんまり凝らなくていいからな」

「…ダメ、だよ？ キョンくんは今、女の子なんだし」

そう告げると同時に石鹸たっぷりのタオルが首筋を触れ、思わず声を漏らしそうになるがそこはグツと堪える。

首筋から始まり鎖骨…と。あー…何だ、上から順々に。

「…っ、こら、くすぐりたいぞっ」

「っ、わたし、ちゃんとやってるもんっ！」

オレがそう注意すると遊び半分でしてると思われ、それは誤解だ
とばかりに不機嫌になる妹。しかし、くすぐったいのはくすぐった
いのである。

「っ…な、なあ、まだか？」

「まだっ」

段々と返事が連れなくなってきたいるが手付きは変わらない。

上半身が終わるとオレは腕を下げ、下半身へと向かうと両脚を投
げ出しておく。足は裏やら踵から指の一つずつだ。

「つく、こ、こそばいっ」

「キョンくん、じっとしてよー」

これはお互いにそうなのだが、妹は指を洗っていても何もない癖
にこっちの番になる執拗だ。
やせ我慢してたのか？

「つく、」

「親指から小指ー」

「っ…」

「と、はい。終わり」

「……はあ」

足の指から妹の手が離れていく。
責め苦から解放されての安堵の息が漏れてしまった。

「シャワーで流すねー」

蛇口が捻られる音と同時にシャワー音が耳に入る。

温かなお湯が背中に当たり、泡を落としながら長い沈黙で少し冷めた身体を温かくしていく。偶にシャワーが当たらないのは妹が自身に当てているのだろう…お互いに少し冷えたのだ。

「…はい。洗えたよ」

…ん。

「じゃあ、誘導頼む」

オレは閉じた眼を開けないまま立ち上がると妹の手を取り合い、誘導してもらいながら湯船へと向かう。

滑ったりコケたりしないよう、盥やらを退けて貰いながら慎重にな。

「入浴剤、入ってるか？」

「うん。今日は白だよー」

そうして妹に導かれながら風呂の縁に手を置くとそこからは自力で湯船へと片足を浸け、ゆっくりと、慎重に、縁を跨いで両足を浸け終える。

「…ふう」

何事もなく風呂に入れたのを確認すると、ゆっくりと身体を湯船へと沈めていく。

そして肩まで浸かったのを感じたそこで漸く眼を開け、自分の状態を見て取ると縁に両手を着いて待機している妹を見やった。

…お前の番な。

「眼閉じとけよ？」

言って妹が眼を閉じたのを確認すると腰に巻いたタオルを外してやる…湯船にタオルを浸けんのはマナー違反だからな。

そうしてタオルが湯船に浸かってしまわない様、器用に畳むと既に縁の端にあるオレが巻いていたタオルの上に重ねておく。

「よし、入っていいぞ」

その言葉を合図に妹がゆっくりと片足を入れ始める。完全に足が着いたのを確認し、続けてもう片足を湯船に浸ける。

その間に妹が間違えてオレの足を踏んづけてしまわん様に自分の脚の位置は常に端一杯に広げておくのを忘れない。

かなり恥い上にだらしなさ過ぎるし、何より何かヤラシイが自分から見えん。つか、ここでズッコケた時の大惨事の方がヤバいからな。

「…よいしょ」

気付けば妹がオレに背を向けて湯船に立っており、オレは妹の脇を抱えてゆっくりと誘導して湯船に浸からせるとそのままオレの身体に凭れるように背中を預けた。

これは昨日からのお願いであり、オレに凭れると完全に身を委ね

ていく。

「キョンくん」

「はいよ」

強請られたので今日も妹の身をソツと抱き寄せ、後ろから抱きかかえてやる。

「く」 あったかいね、キョンくん」

…そだな。

こてん…と頭を寄せてそう呟く妹にオレも答えた。

「
…」

「…キョンくん」

…ん？ どうした？

「……身体ごとそっち向いていい？」

「は？ 何言って」

「ダメ？」

…ん、むづう。

こつちを見上げながら、そうお願いするのは反則だ。

「はあ……解った。解りました」

「やったー」

言うが早いか、妹はすぐに身体ごとこちらを向くと身をすり寄せて抱き付いてくる。

オレは溜め息混じりにそれを見守ると動きを完了した時点で再度抱き寄せた。本来なら甘えるんじゃないやありませんとか言って窘めている処なんだが、まあ大目に見てやるしかないんだよな。

「……」

「……」

ここまで来ると会話なんかはない。

いつもの騒がしい妹はなく、オレの腕の中で眼を閉じて静かにしていて耳に聞こえてくるのは互いの呼吸と給湯器の音ぐらいだ。

オレも何時の間にか眼を閉じていて、しかも、だ。何でかあやす様に妹の背中……湯船に隠れた腰の辺りをポンポンと一定の調子で叩いていた。

「キョンくん」

呼ばれて眼を開いて妹を見やるが、妹の体勢はそのまま……多分、眼も閉じたままだろう。

……ん？

「どうかしたか？」

「……キョンくん、細い」

自分の背中に回された妹の腕の力が若干強くなったのを感じ、

「わたしより背が高いのに……お胸もあつて柔らかい」

キヨンくんはお兄ちゃんなのに……そう呟いた。

……お前も

「？」

「……そう言つお前もやっぱり男の子の身体なんだよ……小っちゃい
のにな」

抱き寄せている妹の身体は小さいながらもやはり、しっかりと
した男の骨格であり、見た目以上に大きく感じてしまう。

お互いに再度、自分が置かれている状況を肌身を感じ合う。

「……元にもどるよね？」

当たり前だ。

「だから兄ちゃんに任せとけ」

「……ん」

オレが見つめる間も動かなかった妹は目蓋を開けて、そのくるく
るとした瞳でこちらを見上げると性別が反転しても全く変わらない
笑みを向けてきてくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1104e/>

キョン子の憂鬱

2010年10月10日18時50分発行